われら肉球防衛隊！

沙 亜竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

われら肉球防衛隊！

【Nコード】

N7778X

【作者名】

沙 亜竜

【あらすじ】

ねこみやうと猫宮降人は小学校六年生。無類の猫好きだ。

ある日、教室に一匹の猫が迷い込む。首輪もないから飼い猫じゃないだろう。

ということ、みんなで飼いたいと担任の先生に申し出る。

だが担任はアレルギーで動物の毛がダメな体質。教室で飼うことはできなかった。

仕方なく外に逃がしにいく降人たちだったが、心配で放すことができない。

じゃ、あたしたちで飼っちゃおうよ。

友人のひと言で、降人たちはその猫を隠れて飼うことにした。降人たちは猫に「ミュー」と名づける。

そしてその猫を守るための組織、「肉球防衛隊」を結成する。

その後、襲い来る数々の危険な出来事、そして謎の黒猫……。

去っていく黒猫の背中に叫び声があつつけられた 二本足で立っているミューから……。

猫のミューを守る肉球防衛隊のドタバタ奮闘記。

暖かな春の日差しが降り注ぐ中、通学路をふらふらとした足取りで歩いていく。

ぼくは猫宮降人、ねこみやふるひと小学校六年生。

ちよつと傷んで、ところどころ皮がはげちゃってる黒いランドセルを背負いながら、鼻歌まじりに学校へと向かっているところだ。

ふらふらとした足取りなのは、べつにケガをしているわけじゃなくて、ぼくの普段どおりの歩き方だった。

……できれば直したいのだけど、簡単に直るのなら苦労はしない。小学校の最高学年となった今ではさすがに少なくなってきたけど、ぼくは足がもつれて転ぶことも多く、両足のひざ小僧にはカサブタができてるのが普通だったりする。

と、そんなぼくの目の前を、通り過ぎるひとつの影。

「うひゃっ！ かっわい〜！」

ぼくは思わず声を上げる。

通り過ぎた影は、可愛らしい猫ちゃんだった。

無類の猫好きであるぼくは、思わずその猫ちゃん目がけて駆け出していた。

そして、

「わわっ〜！」

足がもつれ、

「ふぎゃあっ！」

思いつきり、ひざから地面に倒れ込んでしまった。

「うぐぐぐ……」

痛みでひざを押さえたぼくは、うめき声をもらす。

通学路は固い土がむき出しになっていた。

アスファルトとかじゃなただけマシだろうけど、それでもぼくのひざ小僧のカサブタは割れ、血が溢れ出てくる。

でも、泣いたりなんかしない。だってもう、六年生なのだから。

一生懸命こらえながらも、涙がにじんできていたぼくの顔を、可愛い猫ちゃんが首をかしげて見つめていた。

とつてもつややかで綺麗な毛並みの真っ白い猫。

サファイアのように澄んだ青い瞳をこちらに向けている様は、デイズニー映画のワンシーンかと思えるほど。

飼い猫かな？

でも、首輪とか、してないような……。

涙で視界がぼやけてはいたけど、可愛い猫ちゃんにじっと目を向ける。

と、そんなぼくの背後から、音もなく忍び寄る魔の手が。

魔の手は素早く、ぼくの首に絡みついてきた。

「えいっ！」

「ぐえっ！」

絡みついできた手　　というか、ゴツくて太い腕は、容赦なくぼくの首を締め上げる。

「うぐぐぐぐぐぐ……、ギブギブ！　もうやめてよ、拳志郎！」

どうにか耐えようとしてはみたものの、すぐに限界となったぼくは、慌てて叫び声を発した。

「はっはっは！　今日は三秒でギブアップか〜！　相変わらず降人は弱っちいなあ！」

「突然ヘッドロックかけられたら、誰だってすぐにギブアップするってば！　しかも拳志郎、手加減しないんだもん！」

「はっはっは！　おれってば、不器用だからなあ〜！」

「不器用だからとか言いながら殺されかけたのが、いったい何度あったことか……」

「はっはっは！　過去なんか振り返るな！　未来を見据えて生きろ！」

「拳志郎は振り返るべきだ！」

「はっはっは！」

ぼくは首を押さえながら、背後からランドセル越しにヘッドロックをにかけてきていた大男に怒鳴りつけるものの、その大男からは「はっはっは」と笑い声を含んだ軽い言葉しか返ってこない。

こいつは虎間拳志郎^{とらまけんしろう}。クラスメイトで、ぼくの親友だ。

昔からいつもふたりで、こうやってじゃれ合ったりしているのだけぞ。

拳志郎はとても体格がよく、さらに身長も高いから、小柄なぼくとしては死活問題だったりする。

そのたびに文句を言うばくと、それをサラツとかわす拳志郎。小学校に入つてすぐの頃に出会つて以来、ずっとこんな感じなのだ。

「あはははは、ま、とりあえず、おはよう!」

「ああ、おはよう!」

挨拶がヘッドロックなんかより後回しなもの、ぼくたちにとってはごく日常的なことだ。

「ふっ……、相変わらず朝から落ち着きがないなあ、キミたちは」
(ふあさっ)

不意に声が増える。

ふあさっ……と長めの前髪をかき上げながらそんな言葉を向けてきたのは、拳志郎ほどではないけど結構背の高い男子だった。

拳志郎と比べると低いけど、その分細身だから、かなりの高身長に見える。

150センチをちよつと越えた程度のぼくだと、思わず見上げてしまつくらいだ。

くそ、うらやましい……。ちよつと分けてほしいなあ。

と、そんなことはどうでもいいか。

ともかく、新たに加わつてきたこいつは、拳志郎と同じくぼくのクラスメイトで、獅子威将流ししおどしまねりゅうという。

お金持ちの家で何不自由なく育つたらしく、人を見下したような物言いをすることが多い。

とはいえ、それほど鼻につく感じでもないのは、なんとなく間が抜けている雰囲気があるからだろうか。

実際、今現在の将流の家は、一般家庭より裕福なのは確かだろうけど、それほど飛び抜けて大金持ちという印象でもなかった。

あまり深く立ち入るべき話ではないのだろうけど、徐々に衰退していったとか、そんな感じなのかもしれない。

「降人くん、なにやら失礼な思念を感じたような気がするんだけど、どういうことかなあ〜?」

「え? 気のせいでしょ」

ぼくは臆面もなく言い放つ。

「本当かい? ふたりとも、どうもこのボクをバカにしてるように思えるんだよねえ〜」

「それは気のせいじゃないが」

「あつ、バカ、拳志郎!」

「むむむ! やっぱりキミたちはこのボクをバカにしてるんだね〜!?!」

「拳志郎、ダメじゃんか! 本当のことを言ったら話がこじれるだけだって、いつも言ってるじゃん! 将流みたいなのは、適当にあしらっておくのがいいんだってば!」

「なっ……………! 適当にあしらっておくって、降人くん、それはいい、どうということだいつ!?!」

あちや〜……………。

ぼくまで一緒になって余計なことを言い、火に油を注いでしまったみたいだ。

こうなってしまった将流は、ネチネチとしつこいんだよねえ……。あとは、天の助けを待つしか……。と、そのとき。本当に天の助けが、ぼくたちのもとに舞い降りた。

「あれえ〜？ 将流くんたちだあ〜。ねえねえ、どうしたのあ〜？」

ほんわかしたのんびり口調の音が響き、思わず「へにゃ〜」と気が抜けたような空気になる。

「あつ、みるくちゃん！ おはよう、清々しい朝だね〜！」（ふあさつ）

「おはよあ〜！ うん、そうだねえ〜、清々しいよねえ〜！ 思わず、はにゃ〜ん、ってなつちゃんうよねえ〜！」

清々しい朝じゃなくなつたって、この子は「はにゃ〜ん」ってなつてる気がするのだけど。

この女の子は、犬塚^{いぬづか}みるくちゃん。

拳志郎や将流と同じくクラスメイトの、「はにゃ〜ん」としたみるくちゃんは、ちょっと舌っ足らずなところがつっても可愛く感じられる、我がクラスのマスコットの存在だ。

そして彼女がいるということは、必ずセットで現れる片割れが……。

「はにゃ〜んとしててもいいけどさ、こんなところでお喋りしてたら通行の邪魔よ？ もっとも、男子三人組は存在自体が邪魔な気が

するけど」

やっぱりいた。

この失礼千万なやつは、犬塚いちご。みるくちゃんの子の双子の姉だ。クラスは違うけど、妹が心配なのか、休み時間ごとにくちのクラスに来ていいるから、すっかり顔なじみとなっている。

「あっはっは、相変わらずいちごは冗談が上手いなあ！」

いちごの登場に、拳志郎が声を上げた。

これは秘密なのだけど、拳志郎のやつ、いちごのことが好きらしい。

だから、普段は女の子と話すのは恥ずかしいとか言ってるのに、頑張って喋るのだ。

「え？ 冗談なんて言ってないわよ？」

「あっはっは……」

真顔で返された拳志郎の笑顔は、明らかに引きつっていた。

体格のいい拳志郎は、格闘技もやっていて、すごく強い。

そんな拳志郎と本気で対決し、いちごはあっさりと打ち負かしたことがある。

女の子相手だからって、手を抜いていたわけじゃない。拳志郎は本気を出して、そして負けた。

だからこそ、その強さに惚れ込んだ、というのもあるかもしれないけど。

どちらかというと、いちごには頭が上がらないという感じだろう。恐怖を感じてすらいいるのかもしれない。

いちごの身長はぼくとたいして変わらないし、体重はもちろんぼくより軽いというのに……。

「それより、あまりふざけてると遅刻するわよ？」

拳志郎を打ち負かしたという話を聞いたただだと、野蛮で粗暴な男っぽい暴力女っていうイメージになってしまいかもしれないけど。実際のところ、いちごはそんな印象ではない。

ちよっとつり目気味ではあるけど、マスコットの存在のみるくちやんと一卵性の双子なのだから、同じように可愛らしい顔立ちをしているし、彼女のセリフからもわかるとおり、結構真面目だったりするし。

六組五組の学級委員をしているらしいから、人望も厚いと言えるのかもしれない。

もっとも、いちごは面倒見のいい性格だから、誰もやりたい人がいなくて押しつけられただけ、という可能性も否定はできないかな。

「あつ、そうだね。それじゃあ、さっさと学校へ……」

とぼくが先陣を切って歩き出そうとした、ちよつどそのとき。

「やつほい〜！ みんな、今日も元気に集まってるねっ！」

さらに明るい声が、取りとめもないぼくたちの会話に割り込んできた。

「あつ、夢ちゃん、おはようー！」

「降人くん、おっはよ〜っ！ 他のみんなも、おっはよ〜っ！ 風さんたちも、おっはよ〜っ！」

それは、クラスメイトの豹堂夢ちゃんだった。
いつでも元気いっぱいってのはいいのだけど。ちょっと電波な女の子、というのが、周りの評判だったりする。
ぼくや拳志郎たちに対してだけじゃなくて、吹き抜けてゆく風今まで挨拶してるところからも、その片鱗が見て取れるだろう。
そういったちよっと変わった部分だって、夢ちゃんのいいところだと、ぼくは思っているのだけど。

「夢ってば、相変わらず元気ね。あんまり飛び跳ねてると、見えちゃうわよ?」
「にははははっ! そうだねっ、もっとおしとやかにしないとだねっ!」

いちこの指摘に笑いながら答えるものの、ちつともおしとやかになんてならない。

それが夢ちゃんだ。

とはいえ、夢ちゃんは長いスカートをはいていたから、べつに飛び跳ねたからってパンツが見えてしまうなんてことはなかったのだけど。

「あっ、そうだ、夢ちゃん! そこに、綺麗な白い猫ちゃんが……」
「えっ? マジっ? どこどこっ!?!」

ぼくの声に、夢ちゃんは嘔みつかんばかりの勢いで食いついてくる。

彼女はぼくと同じで、無類の猫好きなのだ。

だから、さっきの猫を見たら絶対に喜んでくれるはず、と思ったのだけど。

「……あれ？ いなくなってる」

「え〜〜っ？ や〜ん、わたしも綺麗な白いニヤンコ、見たかったなあ〜っ！」

「ごめんね……、騒いでたから、逃げちゃったみたい」

心底残念そうな夢ちゃんに、ぼくは思わず、しゅん、と沈んだつぶやきをもらしてしまっ。

「うっん、降人くんのせいじゃないよっ！」

ぱーっと明るい笑顔を向けて、そう言ってくれる夢ちゃんに、ぼくの心もぱーっと明るくなったような気がした。

と、そんな中、微かに校舎が見える小学校のほうから、予鈴の音が鳴り響いてくる。

「ぐあっ、遅刻しちゃうじゃん！ ほらみんな、急ぐわよ！」

「ほいさっ！ みんなで仲よくBダッシュだねっ！」

「B……？ まあ、よくわからないけど急がないとね！ 遅刻したくないし！」

「ふっ、ボクにダッシュなんて似合わないけど、遅刻なんてもっと似合わないしね〜」（ふあさっ）

「あっはっは、ま、ごちゃごちゃ言っでないで、黙って走るべし！」
「あう〜、みんなあ〜、待ってよあ〜！」

こうしてぼくたちは、今日も慌ただしく小学校の門をくぐるのだった。

「は〜い、みんな〜、席に着いて〜！」

パンパンと手を叩きながら、担任の先生が教室に入ってきた。

それに合わせて、仲のいい友達と固まってお喋りしていた生徒たちも、慌てて自分の席へと戻っていく。

朝の会のスタートだ。

「今日はとっても、いい天気ね〜！　こんな日は河原でお昼寝でもしたいわよね〜！」

ぼくたちの担任である、狐石雪菜先生きつねいしゆきかなは、いつも本音で生徒に向き合ってくれる先生だった。

「う〜ん、ちょうど一時間目が理科だし、河原で草花の観察とかにしようかな！　そうすれば、わたしは寝てられるし！」

……隠したほうがいいような本音まで、だだもれにしてしまう、なにかと問題のある先生なのかもしれない。

こんな感じだけど、雪菜先生はクラスのみんなから慕われている、とってもいい先生だ。

ほとんど友達感覚でつき合える、という印象が強いからなのだろう。

まだ二十代前半くらいのはずだから、若いといえば若いと思うけど。

それでも小学生であるぼくたちとなんの違和感もなく友達のように接していることから、雪菜先生の精神年齢の低さがうかがえる。

「雪菜先生、そんなんでいいんですか？　というか、校長先生に告げ口されたりとか……」

「ふっふっふ、校長先生が怖くて教師をやってられるかっての！　わたしはわたしの信ずる道をゆくのだよ！」

真面目な女子生徒からツッコミを入れられてもなんのその。

笑いながらそう言い放つ雪菜先生だった。

ところで、クラスのみんなは先生のことを名字ではなく、名前で「雪菜先生」と呼ぶ。

これには理由があった。

このクラス、六年二組での一年間が始まった初日、先生自らお願いしてきた、というか命令が下されたのだ。

「わたしのことは、雪菜先生と呼んでくださいね！　もし名字で呼ぶ人がいたら、容赦なく成績を落とします！」

満面の笑顔を浮かべながらそんなことを言つてのける先生に、初日から驚いたものだった。

どうやら、雪菜先生はちょっと目気味だから、「狐」って字の入った名字が好きじゃない、というのが理由だったようだ。

普通なら「冗談だよ」と笑って済ませるところだろうけど、雪菜先生の場合、冗談であるはずもなく……。

そんなわけで、クラスには先生のことを名字で呼ぶ人はいない。誰だって、こんな不条理な理由で成績を下げられたくはないからね。

「ま、今日も元気に頑張っていこー！　ってことで、べつに連絡事

頂とかもないから、朝の会はこれで終わり！ 一時間目は河原で決定ね！」

雪菜先生はそう言い残し、さっさと教室を出て行ってしまった。うーん、相変わらず適当な先生だな。

でも、そんな先生だからこそ、このクラスが楽しい雰囲気になっているのだと、ぼくは考えている。

きつと雪菜先生は、生徒の自主性の尊重するために、そういうふうに振舞っているのだ。

……………いや、それはありえないか……………。

ともかく、朝の会を終え、一時間目が始まるまでの時間。

理科の授業で河原に行くと言ってたけど、外に出ておくように言われてはいないから、とりあえず教室で待っていればいいはずだ。

というわけで、クラスメイトはみんな席を立ち、それぞれ友達のもとへと集まって騒ぎ始めていた。

「はっはっは、えいつ、ヘッドロック！」

「ぐえっ！」

もちろん、ぼくのもとにも、拳志郎がいつものように寄ってくる。ヘッドロックで挨拶するのは、そろそろやめてほしいところではあるけど。

「げほげほっ！ くら拳志郎！ ぼくはおまえと違って筋肉バカじ

やないんだから、手加減しろってば！」

「はっはっは、筋肉バカとはなんだ、こいつう！」

「ぐえっ！ ギブギブ！ ぼくが悪かった！」

ヘッドロックをかける太い腕によりいつその力が込められると、ぼくはたまらず白旗を上げる。

ぼくと拳志郎が、いつもどおりのバカげたじゃれ合いを続けていた、そんな中。

「きゃ~~~~~っ！」

突然、女子の声が教室に響き渡る。

でもそれは悲鳴という感じではなく、好奇心に満ちた喜びの声といった様子の、黄色い歓声だった。

声を上げている女子たちのほうに目を向けてみると、そこには普段の教室には存在しないものが存在していた。

そこに見えたのは。

「うわあ〜、可愛いニャンコだよ〜っ！ 真っ白で綺麗〜っ！」

夢ちゃんが歓喜の声を上げているとおり、どこか上品さすらも漂わせる、綺麗な真っ白い毛並みの猫ちゃんだった。

というか、その猫は。

「あ……、あれ、さっき見た猫だ」

ぼくは思わず席から立ち上がり、その猫ちゃんに駆け寄っていた。……ヘッドロックをかけていた拳志郎の太い腕を、軽々と振り払いながら。

「はっはっは、猫が絡むと降人は無敵だな！」

なんて拳志郎の声が聞こえてはきたけど。
そんなことより、今は猫ちゃんだ。

この世界は猫のためにある、とすら思っているくらいの、無類の猫好きであるぼく。

うちの家族は、お母さん以外みんな猫好きなのだ。

ただ、お母さんが猫嫌い、というか動物嫌いのため、絶対に飼うことは許されない。

そんな不幸な星のもとに生まれたぼくは、猫を見ると条件反射的に抱きしめたい衝動に駆られるのだった。

というわけで、数人の女子に囲まれていた白い猫ちゃんを、ぼくは素早く抱き上げる。

「うん、可愛い！ 毛並みもサラサラだ！」

「ミュ〜〜〜〜！」

ぼくが抱きしめ首筋の毛を撫でると、猫ちゃんは嫌がることもなく甘い鳴き声を返してくれる。

「あゝ、降人くん、自分ばかりずるい〜〜〜っ！ わたしも抱きたいよ〜〜〜っ！」

「あはは、うんうん、すぐに交代するよ！ ……でも、もうちょっただけ……」

「だめっっ！ 今すぐ、抱きしめたいの〜！ わたしにニャンコぷりいず〜〜〜っ！」

猫好きなぼくと夢ちゃんを中心に、クラスのみんなが集まってきた、白い猫ちゃんを可愛がる。

一方猫ちゃんのほうも、登校時はいつの間にかいなくなっていたけど、今は逃げる素振りもない。

「うにゃ〜っ！ 可愛いよ〜っ！」

「あれ〜？ この猫、首輪もしてないよね。こんなに綺麗だけど、飼いだないのかなあ〜？」

「あつ、飼いだないなら、このクラスで飼っちゃえばいいんじゃない!?」

「おお〜、それがいい！」

「うん〜、教室に猫ちゃん〜、思わずはにゃ〜んってなっちゃいそうで、いいよねえ〜！」

クラスメイトも徐々に盛り上がり、教室で飼ってみんな可愛がるう、という方向で話が進んでいった。

「ふっ、そうだねえ〜。動物を可愛がる精神は大切だと、ボクも思うよ〜。学級委員であるこのボクが、雪菜先生に話してみるよ〜！」

「おお〜、将流くん、カッコいいぞっ！ じゃ、任せたっ！」

「ふっ、ボクに、任せてくれれば、どんなことも万事オツケーだよ〜！」（ふあさっ）

将流も夢ちゃんにおだてられて、すっかりその気になっているようだ。

大げさな身振り手振りをまじえた言葉を放ちながらも、ちらちらとみるくちゃんに視線を向けている。

あんなにノリ気なのも、カッコよさをアピールするためとかなのかな？

もっともみるくちゃんの瞳は白猫のほうに釘づけで、将流のこと

なんてまったく視界に入っていなさそうだけど。

ともかく、「みんなでこの猫を飼いたい」という思いで、クラスはひとつになっていた。

一時間目の授業の準備をして教室に戻ってきた雪菜先生の目の前に、将流がクラスを代表して立つ。

ん？ どうしたの？ といった表情で首をかしげる先生の瞳をじつと見据えた将流は、力強い声でみんなの思いを伝えた。

そして返ってきた答えは……。

「ダメです！」

あっさりとクラスの結束は打ち砕かれた。

反対されるかもしれない、という考えは確かにあった。

でも、ここまでキツパリと否定されるなんて。

「え〜〜〜〜？ どうして〜〜〜〜?!？」

当然ながら、クラスメイトからの大ブーイングが巻き起こる。

そんな生徒たちの様子を見て、雪菜先生は困ったような表情を浮かべていた。

「こんなに可愛いのに〜〜〜〜!」

「先生だって、可愛いって思うでしょ〜?」

「首輪もしてないから、きつとノラ猫か捨て猫なんだよ〜! もし捨て猫だったら、かわいそうだよ〜?」

「猫ちゃんひとりじゃ、生きていけないかも〜!」

「ちゃんとお世話するから、雪菜先生、お願い〜〜〜〜!」

飛びかかってきそうなほどの勢いで必死にお願いするみんなを、雪菜先生はおろおろとしながら見つめ返している。

いつもの先生の様子から考えると、面倒だからとか、そんな理由で拒否したりしそうではあるけど。

でも、今の雪菜先生の様子を見る限り、どうやらそうだったつもりでダメと言ったわけではなさそうだ。

懇願する生徒たちの声が少し静まるまで待ったあと、先生は遠慮がちに口を開いた。

「みんなの気持ちはわかったし、動物を可愛がる心っていうのも大切だと思うわ。教育上の観点から見ても、本来なら許可してあげるべきだとは思うの。……でもね、本当にごめんなさい」

頭を下げる雪菜先生の瞳には、うつすらと涙まで浮かんでいた。

「わたし、猫とか犬とか、動物の毛ってダメなの。アレルギーでくしゃみとかがひどく……、はっ……、くしゅん！ くしゅん！ あう、意識したら、もう出てきちゃった……。くしゅん！ くしゅん！」

そう言った雪菜先生は、口もとに手を当て、くしゃみを連発し始めた。

もちろんそれは演技なんかではなく、くしゃみは次から次へと湧き上がるように繰り返し返され、本当に止められないようだった。

さっきの白い猫ちゃんは今、教室の後ろにあるロッカーの上における儀よく座っている状態。

先生は教室の前にある教壇に立っているわけだから、丸々教室ひとつ分離れているにもかかわらず、こんなにひどいなんて。

あまりのひどさに、見ていて痛々しいほどだった。

化粧品も鼻水なんかでぐしゃぐしゃになっちゃってるみたいだし…

…。

「だから、くしゅん！ほんと、ごめんなさいね、くしゅん！わたしだって、くしゅん！猫とか、可愛いとは、くしゅん！思うんだけど、くしゅん！でも……、くしゅん！」

「も……もういいですよ、雪菜先生！わかりました！とりあえず、廊下に出て待つててください。理科の授業、河原に行くんですよ？」

さすがに見かねたぼくは、こう言つて先生の背中を押す。

クラスのみんなも同じ思いだったんだろう、誰も異論を挟んだりはしなかった。

「あうう、くしゅん！ごめんね……」

完全な涙目になりながら、雪菜先生は廊下へと出ていく。

「ごめんね、ちょっと職員室に戻つてお化粧を直してから行くことにするわ……。みんなは準備が出来たら、靴を履いて昇降口の前で待つててね」

そう言い残すと、雪菜先生は教室のドアを閉め、廊下を歩いていった。

残されたぼくたちは、さっきまで猫を飼わせてと騒いでいたのが嘘のように静まり返っていた。

「……ま、仕方がないね……。とりあえず授業だし今はこのままにしておいて、戻つてきてもまだ教室にいるようだったら、この猫は学校の外に逃がしてあげよう」

学級委員としての責任感からか、沈黙に耐えられなかったのか、

将流が場をまとめるようにそう言った。

「……そうだね。飼えないのは残念だけど、それしかなさそう」
「うん、先生ほんとに、つらそうだったもんねっ」

みんな、黙って頷く。

「よし、それじゃあ、おれたちも準備して外に出るか！」
「うん！ もっとも河原に行ったら、雪菜先生は寝っ転がって、だらだらするんだろっけど」

「にははははっ！ でも、外で授業するのは、楽しくていいよっ！」
「天気もいいし、清々しい気分になれそうだよねえ〜」（ふあさっ）
「猫ちゃん〜、それじゃあ、行ってくるねえ〜！」

というわけでぼくたちは、白い猫ちゃんをその場に残し、慌ただしく教室から出ていった。

勝手に逃げちゃってもいいと考えていたから、教室のドアを少し開けたまま河原へと向かったのだけど。

授業が終わって帰ってきたぼくたちを、白い猫ちゃんの綺麗な青い瞳が出迎えてくれた。

「あちゃ〜、やっぱり出て行ってないね〜っ！ う〜ん、困った困った！」

夢ちゃんが言葉とは裏腹に全然困っていなさそうな笑顔を浮かべながら言う。

「そうだねえ〜。ぼくのいるこのクラスの居心地が、とってもいいのかもしれないねえ〜！」（ふぁさっ）

将流もいつもの軽い笑い声を上げる。

「はっはっは！ とはいえ、このままじゃマズいだろ。雪菜先生が来るまでに、外に連れ出さないとな！」

そんなふたりに、拳志郎がやっぱり笑いながらではあったけど、冷静な指摘をする。

「うん、そうだよね」

ぼくもそれに同意する。

「だけど〜、猫ちゃん、かわいそう〜……」

そしてみるくちゃんが、今にも泣き出してしまいそうな弱々しい声をこぼす。

と、そんなぼくたちのもとに、騒がしい嵐のような物体が飛び込んできた。

「ちょっと、あたしの可愛いみるくを泣かしたのは、いったい誰よ！？」

鬼の形相でツバを飛ばしながら怒鳴り散らしているのは、みるくちゃんの双子の姉であるいちごだった。

毎時間毎時間、よくもまあ、こうやって人のクラスに遊びに来るものだ。

みるくちゃんは、思わず守ってあげなきゃって気にさせる雰囲気を漂わせているから、いちごが心配になるのもわからなくはないのだけど。

「はっはっは！　べっにおれたちが泣かせたってわけじゃ、ないんだがな！」

「あなたの言うことなんて、信じられないわ！　みるく、ほんとに泣かされたんじゃないの？」

「うっ……うん。そうだよ。お姉ちゃんはいっつも、早合点するんだからあ。しっかりしなきゃ、ダメだぞあ？」

「うぐあつ、あなたにしっかりしろとか言われるなんて！　納得がいかないわ！」

「そ……それって、どういう意味い？」

なんというか、心配しているのは確かだろうけど、いちご本人もみるくちゃんに対して結構失礼なことを言ったりするんだよね、いっつもいっつも。

「べつに深い意味はないわよ！　というかみるく、あんたそれじゃ、どうして泣きそうな声出してたのよ？」

首をかしげてハテナマークを浮かべていたみるくちゃんを軽く受け流すと、いちごは逆に質問で返す。

「え〜？　んつとねえ、この猫ちゃんがねえ〜、かわいそうでえ〜、そんでねえ〜……」

のんびりとした口調で答えるみるくちゃんの言葉を遮るように、ぼくは口を挟むことにした。

もちろん、白猫ちゃんの件を簡潔に伝えるためだ。みるくちゃんに任せてたら、説明するだけで休み時間が終わってしまう。

ぼくたちには、この休み時間のうちに猫ちゃんを学校の外まで逃がさなきゃいけないという使命があるし。

というわけでぼくは、朝の会が終わったあとの教室にこの白い猫ちゃんが入ってきたこと、可愛いし首輪もついてないから、みんなで飼おうという話になったこと、でも雪菜先生にお願いしたら猫の毛アレルギーらしくダメだと言われたこと、そしてこれからこの猫ちゃんを学校の外まで逃がしに行くことを、いちごに話した。

ときおり相づちを打ちながら、いちごは真剣な表情でぼくの言葉を聞いてくれた。

「そつか。よくわかったわ。ってか、あんたたち、おバカ？　もう休み時間半分過ぎちゃってるじゃないの。早く連れていかないと！」

もっともな意見だった。

「ふっ、ボクたちが教室を出ようとしたところに、キミが来てしまったから、こんなに時間がかかってしまった、とも考えられるんじゃないかなあ〜?」（ふあさっ）

「ほほ〜。すると、なに？ あたしが悪いとでも言うわけ?」

余計なことを言い放つ将流に、睨みつけるような視線を返すいちご。まさに一触即発といった様子で火花を散らしていた。

「っていちご！ そんなことやってるから、時間がなくなるんだってば!」

「なんですって!?!」

一応ぼくのほう为正論だとは思っただけど、いちごの怒りの矛先はこちらに向いてしまったようで。

ああ、もう、こんなじゃ、猫ちゃんを連れていけないじゃん。

なんて思ったところで、助け舟が出された。

「は〜い、そこまでっ！ いちごも、将流くんも、降人くんも、そこまでそこまでっ！ ニヤンコも呆れ顔で見てるぞっ！ ほらほら、早く出発するよっ!」

いつの間にか猫ちゃんを両手で抱き上げていた夢ちゃんが、一瞬でその場を取りまとめる。

若干電波な女の子なんて言われている、ちょっと変わった部分のある夢ちゃんだけど、いつも絶妙なタイミングで鋭い発言とかをする。

ぼくたちのグループの中で一番頼りになるのは、実は夢ちゃんなのかもしれない。

ともかく、いちごがどうにか気を落ち着かせたところで、ぼくたちは素早く教室をあとにした。

ぼく、拳志郎、将流、夢ちゃん、みるくちゃん、そしていちごの六人で下駄箱まで歩き、昇降口を通過して外に出る。

そう、ぼくたちのクラスに迷い込んできた猫を逃がすためなのに、いちごも一緒に来ていたのだ。

授業の開始までに間に合わなかったとしても、ぼくたちは言い訳できるけど、いちごは理由にならないだろうに。

「大丈夫よ。あたしはこれでも、真面目な生徒で通ってるのよ？
少しくらい遅れたからって、目くじら立てて叱られたりなんてしないわ」

そんなふうに言われると、妙に納得してしまう。
すごくケンカっ早くて、口調も高圧的だったりするのに、実際のところ、いちごはすごく真面目なのだ。

拳志郎が、「ああいうのを、ツンデレっていうんだぞ。最高だろ？」なんて言ってたけど、ぼくにはいまいち、よくわかっていない。
ツンデレって確か、普段はツンケンしているのに、好きな人の前とかだとデレッとなる感じだよね？

でもぼくは、いちごがツンケンしているのはよく見てる、とかいつも見ているけど、デレッとしてるところなんて、まったく見た記憶がないのだから。

……拳志郎は見たことあるのかな……？

そんなことを考えているうちに、ぼくたちは裏門付近まで到達していた。

わざわざ裏門まで来たのは、正門の前は少し広い道になっていて車の通りも結構あるし、猫ちゃんを逃がすにはさすがに危険だろうと判断したからだ。

「うゝ、でもおゝ。ほんとにこのまま逃がしちゃうのおゝ？ 猫ちゃん、大丈夫かなおゝ？」

「うゝん……、だけど、本能ってやつがあるわけだから、きっと大丈夫だよっ！」

「そうだねえゝ。本来猫つてのは、肉食の獣なわけだしねえゝ。闘争本能とか、生存本能とかだつて、充分強いと言えるんじゃないかなおゝ？」（ふあさつ）

「はっはっは！ 確かに夜中とか、争い合ってる猫の声なんか聞こえてきたりもするよな！」

「ふえゝ。夜中はぐつすりだから、あたちはよくわからないけどおゝ。でもおゝ、やっぱり心配だよおゝ。車にひかれちゃったりしなかなおゝ？ 通りがかりの悪い人にいじめられちゃったりしなかなおゝ？ ご飯にありつけなくて、おなかすかせちゃったりしなかなおゝ？」

みるくちゃんはこの猫ちゃんのことを、すごく心配しているみたいだ。

「大丈夫だとは思っけど……、でも、絶対とは言いきれないよね……」

ぼくの声に、さっきまで逃がすことに反対なんてしていなかった

夢ちゃん、拳志郎、将流もつつむいてしまっ。

微かな風の音だけが響く中、ぼくたちはただ黙って立ち尽くしていた。

その静寂を打ち破ったのは、いちごのひと言だった。

「そんなに心配ならいっそのこと、あたしたちで飼っちゃわない？
もちろん内緒でさ！」

「へ〜、きちんと座ってるじゃないの」「うん〜。逃げたりもしないのお〜。おりこうさんだよねえ〜」

裏庭の奥にある一角で、いちごとみるくちゃんの双子姉妹がぼのぼのとした会話を響かせる。

ふたりの目の前には、あの白い猫ちゃんが、たたんで置かれたタオルの上にちょこんと座っていた。

ぼくたちは、猫ちゃんを自分たちで飼おうと決めた。でも、ゆっくりしてもいられなかった。休み時間はすぐに終わってしまっからだ。

裏庭にあるウサギ小屋の横に植え込みがあつて、小屋と植え込みのすき間部分なら、ちょうど周囲から隠れて見えなくなる。

そのことに気づいたぼくたちは、とりあえず猫ちゃんをそのすき間に残して教室へと駆け戻った。

さすがに逃げられちゃうかもしれないな。

そう思っていたけど、次の休み時間に戻ってきたぼくたちは、猫ちゃんの澄んだ青い瞳に迎えられた。

夢ちゃんが持っていたタオルを提供してくれて、それを地面に敷き、その上に猫ちゃんを座らせたところで、クラスの違ういちごも駆けつけてきた。

そして今、ぼくたちはこうして、猫ちゃんを温かな目で見つめている。

この場所で飼うことに決めたのは、やっぱりみんなで世話をしたいから、というのもあった。

もっとも、無類の猫好きであるぼくと夢ちゃんは、できることから自分の家で飼いたいと思っていたのだけだ。

ぼくの家はお母さんが動物嫌いだし、夢ちゃんの家はペット不可のアパートだから、願いが叶うことはなかったのだ。

「ほんと、綺麗な白い毛だね〜っ！ う〜、わたしだけのものにしたいよっ！」

夢ちゃんがぎゅっと白猫を抱きしめる。

ちよっと強く抱きしめすぎたのか、微妙に猫ちゃんはジタバタともがいているように見えた。

「でもさ、ノラ猫にしては綺麗すぎると思うし、もしかしたらやっぱり飼い猫だったりするんじゃない？」

「ええ〜？ そうなのかなあ〜？」

いちこの冷静な声に、みるくちゃんは明らかに不満そうな顔をす

る。
せっかくみんなで飼おうと決めた矢先に、その気持ちを冷ましてしまうようないちこの発言は、さすがにちよっと空気が読めていなかったと言えるだろう。

KY王子の異名を持つぼくがそう思うくらいだから、それは相当なものだ。

……言っててちよっと悲しくなってくるのは、どうしてだろうか……。

「はっはっは、でもま、もし飼い猫だったら、これだけ綺麗だし、きつと金持ちの家で飼われてたはずだよな。そんな金持ちの飼い猫

がいなくなったら、写真つきのビラとかを大量に貼って探したりするだろ。そういうのもなさそうだし、大丈夫じゃないか？」

「ふっ、そうだねえ。それに必死に探しているようなら、学校にだって連絡が入るはずだよ。もしそうになったら、ちゃんと返してあげればいいのさ」（ふあさっ）

拳志郎と将流が続けてそう意見を述べる。

ちよつと自分勝手な解釈かもしれないけど、でもぼくとしても、そう思っていた。

「うん、そうだね。そうなってもいいように、ぼくたちはしっかりとお世話してあげればいいんだよ」

「そうだよねっ！ よおっし！ 全身全霊を込めて、わたしはニヤンコをお世話しちゃうよっ！」

ぼくの言葉に、夢ちゃんも肯定の意思を重ねてくれた。

昼休みになり、ぼくたちは給食の残りを持ち寄って、また猫ちゃんのもとへと集まっていた。

「きゃー、食べてる食べてるっ！ 超ラブリーっ！ わたしがニヤンコを食べちゃいたいくらいだよっ！」

小さい子猫ってわけではないから結構なんでも食べるよつで、持ってきた給食の残りを、猫ちゃんは好き嫌いなくたいらげている。

そんな様子を見た夢ちゃんはさつきから、鼻息を荒くしながら興奮気味の言葉を並べ続けている。

うーん……。確かに電波とか言われるのもわかるほど、夢ちゃんは周囲の目を気にしなさすぎかもしれない。

てゆーか、食べちゃいたいと言いなから鼻息を荒くしヨダレを垂らして猫ちゃんを見ているなんて、女の子としてどうなのだろう？

ま、猫好きのぼくとしては、その気持ちもわからなくはない。というより、似たような気持ちではあるのだけ。

ぼくが自分の気持ちをどうにか抑えることができているのは、こうして夢ちゃんのちょっとアレな状態を見ているからなのかかもしれない。

と、それはともかく。

「ねえ、猫ちゃんって呼ぶのは、さすがにもうやめない？ あたしたちで、名前つけちゃおうよ！」

「おっ、そうだな！ それがいい！ おれたちで、いい名前を考えよう！」

いちごからの提案を聞いて、拳志郎を筆頭に、みんなが一斉に沸き立つ。

「うん、そうだねっ！ ニャンコも、決めてほしいよねっ!？」

もちろん夢ちゃんもはしゃいだ声を上げ、猫ちゃんに向けてそう問いかけていた。

「ミュー！」

問いかけられた猫ちゃんのほづも、もちろん、と言っているかのよづに、明るい鳴き声を返す。

「あつ！ ビビツときたつ！ この子はミューちゃんだよつ！」

「あははは！ 安直ね〜！ でも、可愛いし、いいんじゃない？」

「うん〜、あたちもいいと思うよあ〜」

「ミュー、ミュー！」

「はっはっは、本人も嬉しそうに鳴いてるぞ！ こりゃ、決まりだな！」

「本人っていうか、本猫？」

「細かいことは気にしちやいけないよ〜。でもま、この子の名前はミューちゃんて決まりだねえ〜！」（ふあさつ）

猫ちゃんはこうして「ミュー」と名づけられ、ぼくたち六人の心もひとつになっていた。

ミューちゃん存在は、雪菜先生には秘密だ。

それだけじゃなく、他のクラスメイトにも秘密にしておくことにした。

つまり、ぼくたち六人だけの秘密。

こういうのって、なんとなく楽しいよね。

「ふふつ」

ぼくは思わず、笑みをこぼしていた。

「うおつ！ 降人、おまえ、いきなり笑うなよ！ 気持ち悪いいな！」

「むっ、ひどいなあ！ でも、そういう拳志郎だって、それにみんなだって、笑顔になってるじゃんか！」

まする。

こうして、ミューちゃんを守るための秘密組織、『肉球防衛隊』が結成されたのだった。

ガサゴソ。

ぼくは今、自分の家の冷蔵庫をあさっていた。

あっ、お刺身が買ってある。……よし、赤味をひと切れ、持っていこう。

あのあと、ぼくたちは話し合った。

みんなで給食を少しずつ残して食べさせるだけじゃ、ミューちゃんのエサとしては足りないだろう。

じゃあ、どうしようか？

というわけで、放課後と朝にも、家からなにか持ってくることになったのだ。

食べ物類を家から毎日持ってくると、さすがに親に見つかって問題になるかもしれない。だから、順番を決めて交代で持ってくることに決めていた。

提案したぼくから順にという話になったため、放課後になって一旦家に帰ったぼくは、こうして冷蔵庫を物色しているのだった。

と突然、その背後に人影が忍び寄る。

「降人、なにやってるのさ？」

「うわあっ!？」

あまりに大げさな声を上げて振り返ったものだから、声をかけた本人のほうも目を丸くして驚いているようだ。

「ね……姉ちゃんか、びっくりした……」

そう、それはぼくの姉ちゃん、ねこみやほーぶ猫宮羽浮だった。

羽浮姉ちゃんは、ふたつ年上の中学二年生。

いつも明るく元気なところは、なんとなく夢ちゃんと似ていなくもない。

ただ、これも夢ちゃんみたいと言えなくもないけど、微妙にずれている感じだから、姉としての威厳はないと言っていいだろう。

さらにはなんとというか、色気もまったくないというか、胸なんてペタンコで……。

お父さんに似たのか、ぼくよりも背は高いのだけど、女性らしさは皆無なのだ。

もつとも、お母さんに似てしまっただけの低いぼくも、あまり男らしい感じとは言えないわけだけだ。

どっちにしても、姉ちゃんがモデルさんみたいに女性らしい雰囲気だったとして、弟から見たらべつになんとも思わないのが普通かもしれない。

とすると、ぼくはこうして色気のない姉ちゃんだと思っているけど、他の男性から見たら、すごく魅力的ってこともあるのかも……。

……うーん……、それは、絶対にありえないな……。

ぼくはそう結論づける。

「びっくりしたのはこっちのほうだったのさ！ まったくもつ！」

……ていうか、あんた今、失礼なこと考えてなかった？」

「え？ ベ……べつになにも考えてないってば！」

姉ちゃん、あなたはエスパーですか？

「ま、それはいいわ。それで？ いったい、なにしてんのさ？」
「いや、その、べ、べつに、なんでもないよ！」

思いつきり焦りまくりながらも、ぼくはどうにかごまかそうと必死になる。

いくら姉としての威厳はないと言いきっていても、二歳年上の姉ちゃんには敵わないことも多い。もしバレてしまったら、やっぱり問題になるだろう。

「ふうん……？」

姉ちゃんは、あからさまに怪しいものを見るような目を向けてきた。

冷や汗がたらりと背中を伝って流れ落ちる。

見つめ合ったまま、時計の音だけが響いていた。

沈黙に耐えきれなくなったぼくは、

「あつ、それじゃぼく、急いでるから！」

と言い残し、逃げるように姉ちゃんの前から走り去っていた。

急いで羽浮姉ちゃんの前から走り去ったけど、ぼくはすっかり、赤味ひと切れをゲットしていた。

手でつかんでいたから、ちょっと生温かくなっちゃってるかもしれないけど……。

とにかく、それを持ってみんなが待つ学校へと向かう。

「遅いぞ、降人！」

「ごめんごめん！ 姉ちゃんに見つかりそうになって……。結局これしか、持ってこれなかったよ」

「わっ、お刺身だよっ！ 豪華だねっ！」

「いやいや、たくさん入っていくら、とかで売ってるやつだから、豪華ってわけじゃ……」

「でも、ひと切れだけ？ さすがに足りなくない？」

「う……、そう言われると、返す言葉がないけど……」

「いいから。早くミューちゃんにあげようよあ」

「ふっ、そうだねえ。ミューちゃんの可愛い食事姿を拝見したいよねえ」(ふあさっ)

「文句言つて悪かったわ。ともかく降人くん、早くそれ、ミューちゃんにあげちゃって」

「うん。ほらミューちゃん、お食べ！」

「ミュー！」(がしががじ)

「うわあ、かわい！ はにゃんってなっちゃう！」

「食べてる食べてるっ！ ああ、ヨダレが出ちゃっわっ！」

「夢、あんたってどうしてそう……。ほら、ハンカチ」

「うにゅっ。いちご、ありがとうっ！ ぱくっ！」

「うわっ！ ハンカチ食べるんじゃない！ 口の周りを拭けっつとよ！ ああ、もう、べちゃべちゃ！」

「へ、猫じゃん！ やっぱりね。あんた、隠れてこんなことしてたんだ」

「うん、そう、猫……って、え！？」

突然加わったひとりの声に、ぼくは驚いて振り返った。

「やほ、久しぶり！ みんな今日も仲よく集まってるのね！」

「あ、降人くんのお姉さんだあ！」

みるくちゃんが、いつもどおりの間延びした声を上げる。
そう、ぼくたち六人の背後で前屈みになってのぞき込んでいたのは、楽しそうに笑顔を浮かべた羽浮姉ちゃんだった。

「わわっ！ わたしたちの秘密基地に侵入者だよっ！ これは由々しき事態だよっ！」

「むっ、夢ちゃん、侵入者呼ばわりはひどいな〜！ なにを隠そう、わたしはあなたたちの味方なのさ。ほら！」

夢ちゃんの言葉に、姉ちゃんは右手に持ったビニール袋を掲げる。そこには、何切れかのお刺身が入っていた。

「降人が赤味をひと切れ持って、慌てて学校に向かったみたいだからね。ま、だいたい予想はついたから、お刺身をもっ少し持って、追いかけてきたってわけさ」

「羽浮さん、わざわざすみません」

「いえいえ、いいのよ。相変わらずいちごちゃんは、礼儀正しいわね〜」

「猫かぶってるだけだろ」

「なんですってえ〜!?!」

「相変わらずみんな、仲よしみたいね〜！ 安心したわ！」

こうして姉ちゃんにバレてしまったぼくたちは、今までのいきさつを全部話した。

「なるほどね。わかったわ、わたしも協力する！ 協力者は多いほうがいいでしょ？」

なんだか姉ちゃんはノリ気だった。

「あつ、それならおれも、南みなみにミューちゃんを見せてやりたいな」

「おおつ、だったらわたしも、希望のぞむに見せたいよっ！」

「いいじゃんいいじゃん、みんなで協力しちゃおうっ！」

どういうわけだが、いつの間にか姉ちゃんが場を仕切って、拳志郎と夢ちゃんの言葉を受け入れていた。

ちなみに拳志郎の言う南ちゃんってというのは彼の妹で、希望くんというのは夢ちゃんの弟だ。

確か南ちゃんは四年生で、希望くんは三年生だったかな。

「ふっ、肉球防衛隊も、徐々に規模が大きくなっていくねえっ！」

（ふぁさっ）

前髪をかき上げながらそう言う将流の言葉に、姉ちゃんは驚くほどに食いついた。

「きゃはははは！ なにそれ、バカっぽい名前！ もう、最高
~~~~~！」

おなかを抱えて大声で笑い始める姉ちゃん。

そんなふうになると、命名したぼくとしては恥ずかしくなってしまう。

でもすぐに姉ちゃんは、

「いいわ、年長者としてわたしが隊長になっただげる！」

と言いつつ。

……言いつつ途端、

「きゃはははは！ 隊長だって！ ヤバ、すごいバカっぽい！ ウケる〜！」

涙まで流しながら、思いつき笑い転げ始めてしまったのだけど。

そんな様子を見てぼくは思う。

羽浮姉ちゃん、あんたが一番バカっぽいよ、と。

でもそんなこと、口が裂けても言えはしないのだった。

「うーん、春だったのに、今日はやけに寒いわよね」

いちごが両腕をさすりながら、そうつぶやいた。

彼女の横では、みるくちゃんがそれに同意するかのように、小さく可愛らしいクシャミをしている。

ぼくたちは最近の日課のようになっていて、ミューちゃんの様子見に来ていた。

授業の合間の短い休み時間にも、ぼくたちはなるべく集まって、ミューちゃんの様子を見たり、エサをあげたり、撫でたり抱き上げたりして可愛がったり。

そうやって日々を過ごしていた。

「確かにちよっと、寒いよね」

「風が吹くと、とくにそうだねえ」。ウサギ小屋の壁があっても、反対側からの風は防げないわけだし」（ふぁさっ）

ぼくがいちごの言葉に同意すると、将流も髪をかき上げながらそう言った。

「子供は風の子だよっ！ わたしは今日も元気いっぱいっ！ パワー充填百二十パーセントだよっ！」

「……お姉ちゃんは元気すぎる……」

元気に大声を張り上げる夢ちゃんに続いて、おとなしそうな男の子が控えめな声を添える。

夢ちゃんの弟、豹堂希望くんだ。

羽浮姉ちゃんが勝手に隊長になって、入隊を許可したメンバーのひとり、ということになる。

もうひとりの新人隊員、拳志郎の妹の虎間南ちゃんも、同じようにこの場所に来るようになっていた。

ちなみに羽浮姉ちゃんは中学生だから、今はこの場にはいない。

「夢さんは本当に元気ですね。うちのお兄ちゃんも元気ですけど、その分、おバカですから……」

学年が上のぼくたちに囲まれて、さすがにちよつと遠慮気味な声ではあったものの、南ちゃんはそんなことを言っていた。

拳志郎の妹なのにとってもしつかり者で、まだ四年生ながらも、セミロングでストレートの黒髪が綺麗な、可愛い感じの彼女。

将流がいつも、数年後にはかなりの美人になるに違いないねえ、と言っている。

確かに大柄な拳志郎と似ているのは背の高さくらいだから、将流がそう言うのもよくわかるというもの。

それにしても、南ちゃんの背は、平均身長よりも結構高そうだ。というか、チビなぼくの背の高さなんて、あっさりと抜かれていた。

将来モデルとかになったとしても、全然不思議ではないのかもしれない。

ほんとに拳志郎の妹なのだろうか。複雑な家庭の事情とかがあったりするのだろうか。

なんて疑ったこともあったけど。実際にはちゃんと血のつながった兄妹に間違いないらしい。

「はっはっは、南、なんだよそれは！ ま、確かに元気ではあるから、寒さのほうは大丈夫だけだな！ みんなも寒いなら上着を羽織ればいいだけだろ！」

その兄である拳志郎が、いつもどおりの笑い声を上げる。

確かに南ちゃんの言うとおり、こいつはいつも元気で、そしておバカだ。

「あんたは非常識なまでに丈夫な体してるから、そりゃ平気でしようよ」

そしてそんな拳志郎に素早くツッコミを入れるのは、いちこの役割だった。

いちごもいちごで、元気だよなあ。

「はっはっは、おまえだって、そうじゃないのか？」

「あゝ、まゝ、風邪はひかないわね」

「バカは風邪をひかない……（ぼそっ）」

ふたりのおバカなかけ合いに、ぼくは思わずつぶやいていた。

「ん？ なんか言った？」

「い……いや、なにも」

もちろん、いちごに睨まれたばくは、慌てて言葉を濁す。

実際のところ、いちごは成績優秀な上にスポーツも万能という、神様は不公平だと言わざるを得ないようなやつなのだけだ。

こうして拳志郎と口論というか、言い争う姿を見ていると、どう考えても同類のおバカっぽく思えてしまう。

「でもお〜、ミューちゃん寒くないかなあ〜？」

そんなバカげた周りの雰囲気の流れたりせず、みるくちゃんが心配そうな声をこぼす。

「ふむっ、そうかもだねっ！ 子供は風の子だけど、子猫は風の子とは言わないしっ！」

それに合わせて、微妙にずれた発言をする夢ちゃん。

「ミューちゃん〜、寒くな〜い〜？」

「ミュー……」

首をかしげて語りかけるみるくちゃんに、ミューちゃんはまるで返事をするかのように弱々しい鳴き声を上げた。

「やっぱり〜、寒いんだよお〜」

「う〜ん、そうみたいだねえ〜。いくら体中に毛が生えているとはいつても、寒さを感じないわけじゃないだろうしねえ〜」（ふあさっ）

「でも、隠れて飼ってるんだから、小屋とかを作るってわけにもいかないだろうし……」

頭を悩ませ始めるぼくたち。と、みるくちゃんが立ち上がった、こう言った。

「あたちが、ミューちゃんのお洋服を作るよお〜！」

放課後。

みるくちゃんは意気揚々と服作りに必要な布地を買ったために帰っていった。

双子の姉であるいちごも、彼女についていった。きっと、みるくちゃんだけじゃ心配なのだろう。

というわけで、ぼくを含めた残されたメンバーが、ミューちゃんの前に集まっていた。

「へへ、ミューちゃんの洋服か。楽しみだね〜！」

羽浮姉ちゃんも合流して、ぼくたちはさっきの件について話し合っている。

みるくちゃんが服を作ると言ったとき、ミューちゃんは明らかに不安そうな顔をしていたように見えた。

いやまあ、さすがに人間の言葉を猫のミューちゃんが理解しているとは思えないけど、でもなんとなく、状況は察知しているように思えたのだ。

普段のみるくちゃんの様子 失礼だけど、とつてもトロい様子を見ていると、本当に大丈夫なのか、ぼくも心配だった。

さすがに本人に対してそう言うのも悪いから、小声でいちごに尋ねてみたところ、

「ん、あの子、お裁縫は得意だから、ミューちゃんの服を作っただけで寒さをしのぐ、ってことに問題はないと思っわ」

という答えが返ってきた。

ぼくはそれを聞いて、ホッと胸を撫で下ろしていたのだけど。

「ただ、ちよつと……、ん……。ん、なんでもない」

と続けられた言葉に、一抹の不安を感じざるを得なかった。
そしてそれは、現実のものとなる。

「さー、ミューちゃんー！ あたち、徹夜して頑張つて、お洋服作
つてきたよー！ 着てちょうだいねえー！」

次の日、みるくちゃんが作ってきた洋服は、鮮やかなピンク色を
基調とした、ひらひらのフリルやらリボンやらの飾りがこれでもか
というほどついた、可愛らしいを通り越して、ちよつと痛い感じの
衣装だった。

満面の笑みでその服を着せようとするみるくちゃんに、明らかに
嫌そうな顔を向け、逃げようとしている様子のミューちゃんだった
けど。

異常なほど気合いの入ったみるくちゃんの魔の手から逃れるすべ
なんて、ミューちゃんにはなかった。

「うっわあー、可愛いよー！ ミューちゃん、これでもう、寒く
ないねえー！」

「ミュー……ミュー……」

数分後、リボンやフリルで覆われた衣装に身を包むミューちゃん
は、ぐったりと頂垂れているように思えた。

きつと、ミユウちゃんは思っているのだらう。
確かに体は寒くなくなったけど、こんな衣装、べつの意味で寒い
よと。

「キシャー……！！！」

休み時間になり、ぼくたちがいつものようにミューちゃんを隠しているウサギ小屋の横まで来ると、なにやら尋常ではない威嚇の鳴き声が聞こえてきた。

その鳴き声は、明らかにミューちゃんが発したものだ。

「なんだ!？」

ぼくたちは顔を見合わせ、ミューちゃんのもとへと急ぐ。

クラスの違ういちごや、学年も違う南ちゃんや希望くんはまだ来ていなかった。

つまり、ぼくたち同じクラスの五人が、こうして真っ先にミューちゃんのもとへ駆けつけたことになる。

その場にいたのは、ぼくたちの他には、ミューちゃんと、そしてもう一匹。

みるくちゃんが用意したフリフリのピンクの衣装を着たままだから、毛を逆立てているかはよくわからなかったけど、ミューちゃんは完全に威嚇のポーズ。

そのミューちゃんと対峙しているのは、一匹の黒い猫だった。

「わっ！ 黒猫なんて、不吉だよっ！ 幸せのお祈りしないとっ！」

相変わらず夢ちゃんの食いつき方は、ちよっとずれている。

幸せのお祈りって、なにさ？

「なんなんだ、この猫は!？」
「ミューちゃんのお友達かなあ〜?」

拳志郎の叫び声のごとき言葉に、みるくちゃんがいつもののんびりとした声を添える。

う〜ん、みるくちゃんも、夢ちゃんに負けず劣らず、ずれてるなあ……。

ぼくの周りって、なんだかみんな、ちょっと変わってる人ばかりなんだよね。

……もちろんぼくは普通だけだ。

「バカね! こんなに威嚇し合ってる、友達なわけないでしょ!」

とそこへ、いちごが遅れて駆け寄ってきた。

遅れて来たとはいっても、状況を見ておおよその会話内容は察しているのだろう。

「ええ〜? でも、ケンカするほど仲がいいって言うよあ〜?」

いちごの正常なツッコミにも、そんな受け答えを返すみるくちゃん。やっぱり、ずれている。

一方のいちごは一見普通っぽく見えるけど、なにせいちごなのだ。拳志郎を打ちのめしたほどだし、女格闘家とか姐御とかってイメージがあるのだから、どう考えても普通とは言えないだろう。

「ちょっと降人くん! あんた、なにか失礼なこと考えてるような顔してるわよ!？」

「な……: ちょ、え!? いや、べつに、ぼくは、なにも……!」

突然いちごから鋭い目つきで睨まれたぼくは、思わずどもってし

まっ。

「というか、羽浮姉ちゃんに続いて、いちごもエスパー!?
ぼくの周りって、どうしてこうも変な人ばかりなんだ!？」

「はっはっは、降人は思ったことがすぐ顔に出て、とてつもなくわかりやすいからなあ!」

焦りまくっているぼくを尻目に、拳志郎はそう言って笑っていた。
そ……そうか、ぼく自身がわかりやすいだけなのか……。

謎は解けたけど、納得のいかないところではある。
とりあえず、気をつけるしかないか……。

と、今はそんなことを考えてる場合じゃないや。

「キシャー……!」

「シャー……!」

目の前ではいまだに、ミューちゃんと黒猫が威嚇の声をぶつけ合
い続けていた。

「……うわ……、大丈夫かな……?」

「ミューちゃん、すごい声出してますよね……!」

そのあいだに、希望くんと南ちゃんもやってきたけど、ぼくたち
のそばに着くなり思わずそんなつぶやきをもらしていた。

「とりあえずミューちゃんにとって、あの黒猫が威嚇すべき相手つ
てことだけは、間違いなさそうだね〜」(ふぁさつ)

「うん、そうだね。でも、だからといって、ぼくたちが手出しして

いいものなのかな？」

「うーん……。猫には猫の世界のおきてとか、あるかもしれないわよね……」

将流の言うことはもっともだったけど、ぼくもいちごも、どうしたらいいか頭を悩ませていた。

と、そんな中。

すでに素早く行動を開始していた人が、ぼくたちの中にひとりだけいた。

「こら、ダメでしょっ！ 同じニャンコ同士、仲よくしなくちゃっ！」

そつたしなめながら、夢ちゃんが黒猫を背後から抱きかかえる。

猫ってかなり、敏感な動物だと思うのだけど。

夢ちゃんはそんな黒猫の背後に、気づかれないうちに回り込んで、そして抱きかかえるということを、いとも簡単にやってのけたのだ。

「ニギヤツ……！？」

いきなり抱きかかえられた黒猫が、驚いたような鳴き声を上げる。ジタバタともがき暴れる黒猫だったけど、夢ちゃんの束縛から逃れることはできなかった。

うーん、さすが夢ちゃんだ。

夢ちゃんって、可愛い動物とかが関わると、とんでもない力を発揮するんだよね。

……ま、ぼくも人のことは言えないか。

「あっ、このニャンコ、オスだよっ！」

不意に夢ちゃんはその言つと、抱きかかえた黒猫の両足を持ち上げて、股をおっぴろげさせた。

「ミギヤウツ!？」

さっきまでにも増して、ジタバタともかく黒猫だったけど、もちろん夢ちゃんの腕から抜け出せるわけもなく。

「あつ、ほんとね」

「わあ、可愛いねえ〜!」

「ほんとだ。小っちゃくて可愛いですね。……あつ、べつに、他意はないですよ?」

「にやはははつ! 他意つてなによ〜つ?」

なんとというか、主に女子たちがとってもハイテンションではしゃぎ始めたような気がする。

「はっはっは! まだまだ発展途上って感じだな! おれのなんて

……」

「は〜い、下ネタ禁止! 猫ちゃんだったら可愛いけど、あんたたちの話なんて、可愛げがないんだから!」

拳志郎もその輪に加わろうとしたのか、なにやらおかしな方向に突き進もうとしたところを、絶妙なタイミングでいちごが止める。

このふたり、やっぱり息ピッタリだなあ。

「む。そういうことは、実際に見てから……」

「ぎゃ〜〜! このバカ、なにしてるのよ!」

「ごそごそと腰のベルトに手をかけ始めた拳志郎の顔面を、思いつきりグーで殴るいちご。」

その様子を見て、拳志郎の妹である南ちゃんは思わず頭を抱えているようだった。

おバカなお兄ちゃんを持ってしまって、頭が痛いです。とでも考えているのだろう。

「はっはっは、いいパンチだったぜ！」

「アホか！ ってか寄るな触るな近づくな！ 半径三メートル以内に入るんじゃない！ このお下劣野郎！」

「にははははっ！ 拳志郎くんといちご、楽しいっ！ ……あっ！」

「ミギヤッ！」

拳志郎といちごの夫婦漫才（とか言ったら殴られそうだけど）を見て大笑いし始めた夢ちゃんは、つい黒猫を抱きかかえていた腕の力を緩めてしまったのだろう。

ここぞとばかりに気合いの鳴き声を上げた黒猫は、するりと夢ちゃんの腕をすり抜け、そのまま裏門のほうへと一目散に逃げていってしまった。

「ああ〜っ、わたしの黒ニャンコちゃんがつ！」

「あんたのじゃないでしょ！」

残念そうに叫ぶ夢ちゃんに、いちごがツッコミを入れる。

「ミュー……」

弱々しく鳴いたミューちゃんの声は、ぼくにはなんとなく、ため息のように聞こえた。

さっきの黒猫は、いったいなんだっただろう？

疑問に思いながらも、ぼくたちには授業があるから、ミューちゃんをその場に残して去るしかなかった。

タイミング悪く移動教室の授業が続き、結局昼休みになるまで、ぼくたちはミューちゃんのもとへ向かうことができなかった。

移動教室の授業じゃなかった、別のクラスのいちごや南ちゃん、希望くんに行ってもらうように話はつけてあったけど、ぼくたちと会う時間はないから状況も聞けない。

ミューちゃんは、大丈夫だろうか？

またあの黒猫が来て、ひどいことになっていたりはないだろうか？

ぼくはなんだか悪い予感がして、心配で心配でたまらなかった。

「ま、きっと大丈夫だ。いちごが様子を見に行ってくれてるんだから。な？」

そう言って、拳志郎はぼくを落ち着かせようとしてくれたけど。

実際、心配したって今のぼくにはどうしようもない。それは自分でもよくわかっている。

だけど、それでもどういうわけか、嫌な予感は膨れ上がるばかり。

昼休みになっても、給食を食べ終わるまでは教室を出てはいけないうことになっている。

だからぼくは大急ぎで給食をたいらげ、というよりも、ミューちゃんにあげる分をいつもより多めに隠し持って、勢いよく教室を飛

び出した。

「あら、猫宮くん、もう食べ終わったの？」

雪菜先生が驚きの声を上げているのは聞こえてきたけど、ぼくは止まることなく廊下を走る。

「こら、廊下は走っちゃダメよ……」

と叫んでいる先生の声は、すぐに聞こえなくなった。ぼくはすでに曲がり角を曲がり、下駄箱に到達していたからだ。

素早く靴に履き替え、そのまま中庭を通ってウサギ小屋の横へと向かう。

そこにはまだ、ぼく以外の人は誰も来ていなかった。

ただ、別の招かれざる客が、ミューちゃんを取り囲んでいた。

「ミュー……」

困ったように弱々しく鳴くミューちゃんと、その周りを取り囲む、たくさんウサギたち。

そう、それはウサギ小屋の中で飼われているはずのウサギたちだった。

何種類かのウサギがいるらしく、灰色だったり、白かったり、黒と白のまだら模様だったり。

様々なウサギたちが今、ミューちゃんを取り囲んでいた。

そしてそのウサギたちは徐々に、ミューちゃんへとじり寄り寄っていく。

まさにそんな場面に、ぼくは到着したのだ。

「わっ!?　なんでウサギが?　って、そんなこと考えてる場合じゃない!」

ぼくは大きく足音を響かせながら、ミューちゃんのそばに駆け寄る。

「じゅ、ミューちゃんから離れる〜!」

ぼくの大声と足音に気づいたからだろう、一斉にウサギたちがこちらに目を向け、逃げるようにミューちゃんのそばから散っていった。

「ミュー!」

ミューちゃんがあたかも、助かりました、とでも言うように鳴き声を上げながら、ぼくにすり寄ってくる。

「大丈夫だった?」

「ミュー、ミュー!」

ぼくの問いかけに、ミューちゃんは返事をしてきているように、ミューミューと鳴き続けた。

「ちょっと、降人くん、どうしたの!?　って、なによこれ!?　ウサギが……!」

そんなぼくとミューちゃんのもとへ、いちごが駆けつける。

「降人、大丈夫か?」

「ふっ、なんだか、大変なことになってるみたいだねえ〜」（ふあさっ）

「うわわわっ！ ウサちゃんたちが、大変っばいかもっ！？ これは由々しき事態だよっ！」

さらに同じクラスの三人も、続々と向かってきた。

その中にみるくちゃんの姿はない。ちょっとトロい彼女は、給食を食べ終えるのにも時間がかかるからだ。

ぼくが急いで教室を出たことを知って、他のみんなと同様、すぐに追いかけていとは思っただろう。

でも、一部をこっそりとビニール袋とかに入れてごまかすとか、そんな裏技的なことを、みるくちゃんが実行に移せるわけではないのだ。

というか、そもそもそんなこと、思いつきもしないだろう。昼休みが終わるくらいに現れて、「ごめんね〜、あたち、トロくてえ〜」と涙目になりながら謝ってきそうな気がする。

と、今はそれよりも、目の前の状況をどうにかしないと。

確かにミューちゃんの危機は去ったと言える。

でも、逃げ出したウサギたちをどうにかしないと、状況を考えて、ぼくたちが悪者にされてしまうに違いない。

ウサギ小屋を見てみると、カギをかけて閉められているはずのドアが開け放たれていた。

周囲にはぼくたち以外に誰もいない。ということは、ぼくたちが犯人だと疑われてしまう可能性が高い。

もちろんぼくたちは犯人じゃないけど、そんな言い訳が通じるかどうかわからないし。

「ミュー……」

「ごめんなさいね……」。

弱々しく鳴くミューちゃんは、そう謝罪しているようにすら見え
た。

「あ……、服になにかが……」

よく見ると、ミューちゃんに着せてある服の中に、野菜や牧草の
切れ端なんかがつっかかっていた。

いや、引つかかっていたというよりも、故意に入れられたとしか
思えないような感じだ。

ふとウサギ小屋に目を向ける。

小屋の中でいつもエサが置かれている場所を見ると、そこは
はなにも置かれてはいなかった。

給食の時間より前にウサギのエサを用意しておくことになってる
はずだから、おそらく三時間目の休み時間にはウサギ当番の人がエ
サを置いていたはずだ。

犯人はどうやってかカギを手に入れてドアを開け、そしてウサギ
のエサを持ち出してミューちゃんの服の中に入れた。

きっとミューちゃんは、植え込みと壁のあいだに敷いてあるタオ
ルの上で眠っていたのだろう。猫は一日の三分の二くらいは寝てい
るといっし。

そして、ドアが開け放たれたままだったせいで、おなかをすかせ
たウサギたちは小屋から出てきて、エサのにおいを嗅ぎつけ、ミユ
ーちゃんを取り囲んでいた。

おそらく、そういうことだったのだろう。

「これは、誰かがミューちゃんをいじめてるってこと……?」

ぼくは思考を巡らせ、小さくつぶやく。

と、そんなぼくを現実に戻す声が響いた。

「降人くんっ！ それより、こっちを手伝ってほしいんだけど！
ウサちゃんたち、捕まえて小屋に戻さないっ！」

夢ちゃんが悲痛な叫び声を上げる。

彼女だけではなく、拳志郎も将流もいちごも、あとから来ていたらしい南ちゃんや希望くんも、逃げたウサギを捕まえるために走り回っていた。

どうやらみるくちゃんだけは、まだ来ていないみたいだったけど。

「あっ、そうだね、ごめん！」

ぼくは急いでミューちゃんをタオルの上に戻し、逃げ惑うウサギたちの捕獲部隊に加わった。

「みなさん、今日は少しお話があります」

帰りの会になると、普段は見せないような真面目な顔をした雪菜先生が、生徒たちをじっと見据えながらこう切り出した。

ざわざわざわ。みんな、にわかにはざわめき始める。

「あの雪菜先生が、真面目な顔して帰りの会を始めたぞ!？」

「そんなバカな!? いつもなら『今日は連絡事項なし』、以上終わりっ!』で終了するのに!」

「なんだか、嫌な予感がするよっ! もしかして、お説教っ!?! 教師の専売特許、クラス全員連帯責任が発動しちゃうのっ!?!」

などなど、みんな口々に好き勝手なことを言い始めていた。

その中には、やっぱりと言うべきか、夢ちゃんもまじっていたわけだけど。

大騒ぎとかなったなら、まっ先に加わっていく性格だもんなあ、夢ちゃんは。

と、そんなクラスメイトたちのざわめきを、雪菜先生が大声で一喝する。

「静かにつ! まずは先生の話の話を聞きなさい!」

バンツ!

大声に加え、黒板を平手で叩いて、喧騒を静める雪菜先生。

いつもは生徒たちから軽視されている感すらある雪菜先生だけど、さすがに教師としての威厳はあるらしい。

一瞬にしてシーンと静まり返る六年二組の教室。
満足そうに軽く唇の端をつり上げると、雪菜先生はぼくたちに向
かって話し始めた。

「どうもこの学校に、隠れて猫を飼っている生徒がいるらしい、と
いう噂が今、先生方のあいだで話題になっています」

ざわ……。

一瞬ざわめきが広がりそうになるものの、また怒られると思った
からだろうか、すぐにその声は静まった。

静まったとはいっても、そこかしこで、ひそひそと話しているよ
うな声は聞こえる。

そしてぼくは、思わず身を固くしていた。

隠れて猫を飼っている生徒。

それは紛れもなく、ぼくたちのことだ。

ミユーちゃんの話は、このクラスだと、ぼくと拳志郎、将流、
夢ちゃん、みるくちゃんの五人以外は知らないはずだけど。

それでもクラスメイトの中には、なんとなく感づいている人もい
るかもしれない。

だからこそ、周りでみんながひそひそと話している。そういうふ
うにも考えられた。

確かにぼくたちは、先生や他の人に秘密にしようと考えながらも、
警戒を怠っていた気がする。

職員室からは見えない陰になる場所だからと思って、安心しすぎ
ていたのだ。

「あなたたち、なにか知らない？」

優しく諭すような声で、雪菜先生は質問を投げかけてくる。クラスのみんなは、お互いに顔を見合わせるけど、先生に答えを返す人はいなかった。

でも……完全に無視するのも、不自然かな……？
ぼくは不意にそう考え、意見を述べる。

「し……知らないです！」

思わずどもり気味になってしまい、余計に怪しさを増していたかもしれないけど。

ふと視界に入った将流は、頭を左右に振り、呆れを含んだため息をついているようだった。

うつつ、ぼくって演技には向かないタイプの人間みたいだ……。薄々気づいてはいたけどさ……。

微かなざわめきが教室内を漂う中、雪菜先生はひとしきり他の生徒たちにも視線を巡らせると、再び口を開いた。

「そう、誰も知らないのね」

ひと言だけ、つぶやく。

だけど雪菜先生は、先日ぼくたちが猫を飼いたいと言っていたことを知っている。

とすると、このクラスの誰かが隠れてあのとときの白猫を飼っているのではないか、と考えていてもおかしくない。

ある程度疑いを持っていると思っておいたほうがいいのかも知らない。

ぼくはそう考えながら、雪菜先生の様子をうかがっていた。

「子供たちだけで世話をするって、大変なものね。もし自分たちのせいで猫ちゃんが死んでしまったら、あなたたちも悲しいでしょ？」

よりいっその優しさを含んだ声音で、雪菜先生は語りかける。

「……これって……やっぱり先生、ぼくたちの中に猫を飼っている人がいることに、気づいてる……？」

普段から適当さが目立つ先生ではあるけど、生徒たちの気持ちをしっかりと理解してくれているのは確かだろう。

だとすると、きっとこのクラスの誰かが……いや、もしかしたらぼくたちのグループが噂されている生徒だとまで、わかっているのかもしれない。

「前にも言ったけど、動物の世話をすること自体は、教育の上でも大切だと思うわ。だから、もしそういうことをしている生徒がいたとしても、先生は咎めたりなんてしません。でも、ひと言、相談してほしいな」

雪菜先生の言葉に、クラスの誰も、声を発することができなかった。

教室全体を見回した先生。

その瞳は、不自然に固くなりながらうつむいている、ぼくたちのグループ五人を、順に捉えているように思えた。

「……お話は以上です。今回の件だけじゃなくて、いつでも先生を頼ってくれていいんだからね。教師っていうのは勉強を教えるだけの存在じゃないのよ」

終始優しい声で話し続けた雪菜先生は、帰りの会を締めくくる。
そして、

「それじゃあ、帰りの会を終わります。みんな、気をつけて帰るのよ！」

おそらく意識的に明るく声を弾ませながら、先生はそうつけ加えた。

ぼくたち五人、いつもの面々は、ちょっと沈んだ顔でとぼとぼと廊下を歩いていった。

目指すはもちろん、ミューちゃんのいるいつもの場所だけど。

誰もなにも喋ることなく、ただ黙って歩くだけだった。

いつでも元気が取り得の夢ちゃんさえ、雰囲気にも呑まれているのか、ひと言も口にしない。

「あれ？ あんたたち、そんな暗い顔して、いったいどうしたってのよ？」

不意に背後から声がかかった。

その喋り方から振り向くまでもなくわかる声の主は、もちろんいちごだ。

いちごのいる六年五組は、ぼくたちの教室よりもさらに下駄箱から遠い位置にある。

もっとも帰りの会の長さは日によってまちまちだし、必ずいちご

があとから来るとは限らないのだけど。

ともかく、そんないちこの呼びかけにも、ぼくたちは生返事を返すばかりだった。

「ん〜？ なによなによ。あんたたちらしくないわね〜。そんなじゃ、ミューちゃんに笑われちゃうぞ？」

ぼくたちの様子を心配してくれたんだろう、いちごは普段以上に明るい笑い声を上げながら、五人の肩を次々と叩いていく。

「ん……そうだよ。べつにぼくたち、やましいことをしてるわけじゃないんだし」

「そうさ〜。ちょっと自己満足というか、自分勝手なのかもしれないけど、でもボクたちは正しいと思うことをしているんだ。胸を張っていいはずだよ〜」（ふぁさっ）

「はっはっは、そうだな！ だいたいおれたちが弱気になってちゃ、ミューちゃんを守ることなんてできないよな！」

「うん〜。そうだよえ〜。お姉ちゃん、ありがと〜」

ぼくたち四人は、いちこの言葉に素直な思いを吐き出す。

そう、四人……。

いつもなら底抜けに明るい夢ちゃんだけが、今でもまだ沈んだ表情のまま、廊下にたたずんでいた。

「ちょっと、夢。あんた、どうしちゃったの？ いつもみたいになさ、真っ先に笑ってくれなきゃ！ 夢の笑顔がないと、みんな寂しいんだからさ！」

いちごはなおも気遣いの声を夢ちゃんに向ける。

「はっはっは、おまえ、よくそんなセリフを恥ずかしげもなく言えるな！」

「な……！？ あ……あたしはべつに、正直に思ったことを……！
っていうか、拳志郎、あんたうるさいっての！」

ゲシッ！

手よりも先に足が出るいちごだった。

「はっはっは、いいキックだ！ だが……みぞおちは……反則だ……」

バターン！

拳志郎はおなかを抱えたままスローモーションで豪快に倒れたかと思うと、そのまま体を反転させて大の字に寝転んだ。

「って、拳志郎……！」

「うわっ！？ あたし、やりすぎちゃった？ ごめん、拳志郎、大丈夫！？」

ぼくが駆け寄るより早く、いちごが倒れた拳志郎を抱き上げる。

「はっはっは、背中に感じる微かな胸のふくらみが、とつてもグーだ！」

「な……っ！？ いっぺん、死ね！」

いちごは真っ赤になって、拳志郎抱き上げていた腕を容赦なく放す。

それによって、拳志郎の頭は後頭部から廊下にぶつかって、ゴツンと大きな音を立てていたけど。

どう考えても自業自得だろう。

しかしまあ、なんとというか、仲がいいよねえ、あのふたり。

「あははっ……。みんな、いつもどおりだっ……」

と、その様子を見ていた夢ちゃんが、控えめながら笑い声を響かせる。

「……そうだねっ！ わたしも、いつもどおりじゃなきゃダメだよねっ！」

続けてそう言った夢ちゃんの顔は、もうすっかり、いつもどおりの明るさを取り戻していた。

ぼくたちはそのあと、心配してくれてはいたけど理由はわかっていなかったいちごに、帰りの会で先生から言われたことを話しながら、ミューちゃんのもとへと向かった。

昼休みの件でミューちゃんが心配だったから、早足に歩きながらではあったけど、ウサギ小屋の横に着くまでのあいだに、いちごには状況を説明し終えていた。

「なによ、そんなことだったんだ。全然気にする必要ないじゃない。先生だって、咎めるつもりじゃないって言ってたんでしょ？ それなのにあんなに暗くなってたなんて、みんな顔に似合わずデリケートなのね！」

話を聞き終えたいちごは、そう言って笑っていたけど。

いちごがぼくたちに気を遣ってくれたのは、さっきのやり取りでもよくわかっていた。

クラスは違うけど大切な仲間なんだと、改めて感じた。

そんないちごの気遣いで、なんとなく温かな空気に包まれていたぼくたちではあった。

でも、冷たい風が容赦なく吹きすさび、温められたぼくたちの心を凍らせる。

いや、それはあたかもかまいたちのように、ぼくたちの心を切り裂いていったと言ってもいい。

それくらい衝撃。

残酷な現実が、ぼくたちの目の前に襲いかかってくる。

ここ最近は毎日訪れているウサギ小屋横の植え込み。そこにはミューちゃんがタオルにくるまって隠れているはずだった。

でもその周囲が、真っ赤に染まっている。

ぼくたちは、あまりのことに声すら出せなかった。

そしてミューちゃんのタオルが微かに見え隠れする、植え込みとウサギ小屋の壁のあいだには、大きな茶色い毛並みの物体が……。

グルルルルル……。

それは、うなり声を上げる大型犬だった。

おなかをすかせているのか、異常なほどにヨダレを垂れ流すその犬の口からは、赤い液体がしたたっている。

牙のすき間には、切り裂かれたと思われる、鮮やかな色の肉片が……。

「きゃあああああああ！」

われに返り、悲鳴を上げるいちご。

その声で、夢ちゃんやみるくちゃんも悲鳴を重ね始めた。

いや、女の子たちだけじゃない。拳志郎や将流でさえも、うわあああ、と叫び声を上げていた。

これは……まさか、あの犬が、ミューちゃんを……！？

戦慄が走る。

あれ、でも、待てよ……？

このにおい……。

それに、この赤い液体……。
血というにはあまりにも赤く、鮮やかすぎる気が……。

ぼくは素早く、植え込みの近くにしゃがみ込む。

「ちょっと、降人くん！？ 危ないわよ!？」

いちごが心配の声を向けてくるけど、ぼくは構わずに液体を指ですくって確かめる。

うん、やっぱり。

「あかさ、この赤いの、ペンキだよ」

「……え?」

ぼくの声に、みんな、呆然としたつぶやきをもらす。
と同時に。

「ミュー……」

植え込みの中に隠れていたのだろう、真っ赤に染まったミューちゃん
が飛び出してきた。

「うわっ、真っ赤っかだっ!」

「……これも、ペンキだね」

ミューちゃんは、どうやら全身ペンキまみれになっているようだ。
そのすぐ横には倒れた缶が見える。真っ赤なペンキはこの缶に入
っていたようだ。

ぼくたちが騒いだりしたからだろうか、うなり声を上げていた大型犬は、のそのそと裏門のほうへと歩き去っていった。

と、不意に人の気配がした。

ぼくはとつさに、ミューちゃんをタオルでくるみ、植え込みの中に隠す。

「あゝあ、おまえら、ペンキぶちまけちゃったのか。こんなところに置いておいたオレも悪かったとは思うが」

「あつ、熊田先生！」

それは、熊田要港先生くまだまゆこうだった。

いちごのクラス、六年五組の担任で、とっても体格のいい体育会系の先生。中学校の体育教師の免許も持っているのだとか。

「ウサギ小屋の屋根を塗り直してくれて、頼まれてなく。それでペンキを用意して置いておいたんだが、誰も通らないと思って油断してしまった。ちゃんとフタも閉めてなかったし。悪かったな」
「いえ、それより、ペンキをダメにしてしまって、ごめんなさい」

実際にはぼくたちがペンキの缶を倒したわけじゃなかったけど、事を大げさにする必要もないと、ぼくは罪をかぶることにする。

他の誰もそれを否定しなかった。みんなもぼくと同じように考えていたのだろう。

「いや、それはいいさ。まだ予備もあるし、体育用具小屋から持ってくればいいからな。ところで……」

熊田先生はぼくたちに視線を巡らせ、質問をぶつけてきた。

「おまえらは、いったいここでなにやってるんだ？」

さらに視線をずらし、熊田先生はいちごを見据えると、こう続けた。

「とうか、犬塚までいるのか。他のクラスの友達と遊んでたのか？ あつ、そうか、双子の妹とその友達か！」

自分ひとりで勝手に疑問を浮かべて、勝手に自己完結してくれたようだ。

ぼくたちとしては楽でよかったけど。

「そ……そうなんですよ！ ちょっと、その……、かくれんぼしてたんですよ！」

「ほ、そうか！ 今どきの生徒にしては、子供っぽいことをしてるな！ いや、バカにしているわけじゃないぞ？ いいことだと言ってるんだ。そもそもオレたちが子供の頃はだん……」

いちごがその場をごまかすため、なにげなく放ったひと言。

それに熊田先生は思いのほか深く食いつき、ぼくたちは長々と先生の昔話を聞かされる羽目になってしまった。

しばらくして、ようやく長話は終わってくれたのだけだ。

先生はまだ缶の中に残っているペンキだけでもウサギ小屋の屋根に塗ってしまおうと言い出した。

早く帰ってほしかったという意図もあり、ぼくたちも手伝いますよと申し出てはみたのだけだ。

子供たちにウサギ小屋の屋根に登るなんて危険なマネをさせられ

るわけがないだろう、おまえたちは気にせず遊んでいいぞ、と断られた。

とはいえ、ミューちゃんをタオルにくるんだまま植え込みに隠している状態で、今この場を離れるわけにもいかない。

ぼくたちは熊田先生がいなくなるまで近くにいた必要があったのだ。

というわけで、先生がウサギ小屋の屋根にペンキを塗っているあいだ、本当にかくれんぼをすることになるのだった。

「なんでこのボクが、かくれんぼなんてガキっぽいことを、しなければならんだよ〜」

という将流のボヤキや、

「あたち〜、かくれんぼとか〜、おにごっことか〜、苦手なのにい〜」

というみるくちゃんの泣き言をねじ伏せ、ぼくたちにはかくれんぼを始める以外に、選択肢は残されていなかった。

熊田先生が帰ったあと、ぼくは慌ててタオルにくるんだミューちゃんを植え込みから引っぱり出した。

「ミュー〜〜〜〜〜!」

心なしか怒っているようにも思えた。……つて、それも当然か。

ともかく、よく調べてみると、ペンキまみれになったミューちゃん
の服には、どうやら肉とかジャーキーとかが挟み込まれていたよ
うな形跡があった。

それをさっきの大型犬が食べて去っていったと考えられる。

ミューちゃんを隠していた場所の近くにペンキの入った缶が置い
てあり、あの大型犬がぶつかって倒し、ミューちゃんもその犬も赤
ペンキまみれになった。

そんなところだろうか。

「うわ〜ん、あたちの作った服も、ペンキでぐちゃぐちゃだよあ。
お洗濯して、綺麗になるかなあ………」

みるくちゃんが涙を流しながら、ミューちゃんに着せていた服を
脱がす。

なんとなくミューちゃんがホツとしているように見えたのは、は
たして気のせいだろうか……。

それにしても、昼休みのウサギの件といい、今回の犬の件といい、
いったいどうなっているのだろうか？

「もしかしてミューちゃん、誰かに狙われてたりするのかな……？」

「ミュー………」

ほくのつぶやきに、ミューちゃん自身も困ったような鳴き声を返
していた。

次の日。

朝のエサ係の順番となったぼくは、珍しく余裕のある時間に登校していた。

最初にぼくがエサを家から持ってきたときはお刺身を食べさせたけど、どうやら生のものを食べさせるのは、おなかを壊す可能性があるからあまりよくないらしい。

というわけで、基本的にはみんなでお金を出し合って、キャットフードとか猫缶とかを買おう、という話になった。

そうやって買ってきたエサは、ミューちゃんを隠しているすぐ横の植え込みに、ビニール袋に入れて隠してある。

それにしても、今日は暖かいな。

四月も半ばを越え、桜の花びらもほとんどが散り終わっている。

そんな舞い散った花びらを踏みしめながら、ぼくは学校の正門から中庭を通り越して、ミューちゃんのもとへと急いだ。

ぼくたちが放課後にエサをあげたあと、次にミューちゃんが食事に取りつけるのは、こうやって次の日に登校してきたときということになる。

だからミューちゃんは、おなかをグーグーと鳴らしながら待っているに違いない。

すぐ横の植え込みにエサの入った袋があるわけだけど、猫であるミューちゃんには、勝手に袋を開けて中からキャットフードとか缶詰を取り出して自分で食べる、なんてことができるわけもないし。

「ミューちゃん、お待たせ〜!」

「ミュー！」

ぼくがウサギ小屋の横をのぞき込むと、ミューちゃんの青い瞳が見つめ返してくれた。

「さあ、お食べ」

ぼくはカリカリのドライフードを、夢ちゃんが用意してくれたいたエサ入れのお皿に乗せて差し出すと、ミューちゃんはそれをガジガジと美味しそうに食べ始める。

うん……。やっぱり、猫って可愛くて癒されるなあ。

別のお皿に水を注ぎながら、ぼくはぼんやりとミューちゃんを眺めていたのだけど。

「あれ？」

ミューちゃんが今食べてるのは、もちろんぼくがさっき袋の中から取り出したドライフードだ。

それなのに、ふと見るとミューちゃんの周囲には、ミンチ肉といった感じの物体、つまり、よく猫缶とかに入っているようなものの残骸が、ポロポロとこぼれ落ちているように見えた。

昨日の放課後は、大型犬とペンキ事件なんかがあったわけだけど、そのあとにエサ当番だった夢ちゃんがミューちゃんに与えたのも、確かドライフードだったはず……。

ぼくはビニール袋の中を急いで確かめてみる。

ミューちゃんのエサとして、ドライフードだけではなく猫缶も買ってはあった。

でも、どうやらその猫缶の数は減っていないようだ。

缶切りも袋の中に一緒に入れてあるけど、ミューちゃんが自分で

缶を切るなんてありえない。

これは……いったい、どういうことだろう？
じつとミューちゃんを見据えながら考える。

「ミュー！」

そんなぼくの様子なんて気にすることもなく、ミューちゃんは満足そうな鳴き声を響かせていた。

と、不意に予鈴の音が聞こえてくる。

急いで教室に向かわないと、遅刻になってしまっだろう。

ぼくは疑問を胸に抱えながらも、素早くビニール袋を植え込みの中にしまつて教室へと向かうしかなかった。

休み時間、移動教室の授業があるいちごと中学生である羽浮姉ちゃんを除いた肉球防衛隊のメンバーが、ミューちゃんの前を集まっていた。

最近は、黒猫と威嚇し合っていたり、ウサギに取り囲まれていたり、大型犬に襲いかかられたり、なにやら慌ただしいことが多いけど。

今日は今のところ、平和そうだった。

そこでぼくは、今朝の疑問を口にしてみることにした。
みんなの意見も、聞いてみたかったのだ。

「きつと善意の理解者が、わたしたちの活動を隠れて手助けしてくれてるんだよっ！」

とは、夢ちゃんの見解。

確かにそうやって、ミューちゃんにエサをあげてくれてる人がいる、というのなら、べつに問題はないと思うのだけど。

「……あの、ぼく……、変な噂を、聞いたよ……？」

いつもながら、お姉さんである夢ちゃんとは対照的なほど控えめな声を上げたのは、希望くんだった。

「え？　どんな噂なのかな？」

ぼくの声に、希望くんはいつもどおりの小さな声ながらも、しっかりと答えを返してくれた。

希望くんが言うには、どうやら裏庭の奥辺り、つまりミューちゃんを隠しているこの付近で、なにやら怪しい人影の目撃情報が相次いでいるらしい。

見るからに怪しいのはその風貌で、帽子を深々とかぶり、サンダラスとマスクで顔を覆っていたのだという。

まだたまに涼しい日もあるとはいえ、暖かい日も多くなってきているというのに、目撃されたときは必ずジャンパーを身にまとい、いたみたいだから、その怪しさは相当なものだろう。

しかもその人は、きよろきよろと辺りをうかがい、ウサギ小屋の陰に隠れるようにして忍び足で歩いていたという話まであるようだ。

「はっはっは、なんというか、自分は不審者です、と言ってるよう

な格好だなあ！」

「その人つてえく、ミューちゃんを狙ってたりするのかなあ〜？
いじめたりとかも、するのかなあ〜？」

拳志郎がいつもの笑い声を伴って無責任な発言をすると、みるく
ちゃんがそれに反応して涙目になってしまふ。

「どうだろうねえ。聞いてる限りだとあまりにもあからさますぎる
から、逆にその人が、さっき夢ちゃんが言ったように善意の理解者、
つて可能性もあるけど……。でもまあ、どう考えても怪しいからね
え〜……。」「

将流は意外と冷静に考えているようだった。

「そうだね。その人がミューちゃんに善意でエサをあげてくれた、
とは考えづらいよね。ぼくたちが隠れて飼ってるのを知ってて、そ
の人も騒ぎにならないように隠れてエサをあげていたとしても、や
っぱり不自然すぎる。いくらなんでも、余計に目立つ格好だったの
は、自分でもわかるはずだし」

そしてぼくも、状況をしっかりと把握するため、考えを口に出して
みる。

でも結局、答えにはたどり着かない。

「それじゃあ、その人はいったい、なにをしていたんでしょうか？
それに、猫缶の中身っぽいものが落ちていたってという謎も残りま
すし……。」「

南ちゃんの疑問に、ぼくたちは誰も、これといった解答を示すこ
とはできなかった。

それでも、ひとつだけ決まっていることはある。

「なんにしても、ぼくたちがミューちゃんを守るってのは、変わりないよ」

「……うんっ、そうだねっ！」

「はっはっは！ 肉球防衛隊の活動強化が必要だな！」

「そうだねえ〜！ ボクたち肉球防衛隊で、絶対にミューちゃんを守り抜こう〜！」（ふあさっ）

『お〜〜〜〜〜！』

勢いよくこぶしを振り上げたぼくたちは、よりいっそう結束を固め、ミューちゃんを守るうと誓い合っただった。

ある日の放課後、ぼくは拳志郎と南ちゃんと一緒に、商店街を歩いていた。

買い置きしてあった猫缶やキャットフードが残り少なくなっていたから、それを補充するための買い出しに来たのだ。

南ちゃんが可愛らしいピンク色の財布を紐で首から下げ、それを両手でしっかりと握りながら、笑顔でスキップしている。

今日は南ちゃんが、ミューちゃんのエサ代を出してくれるのだという。

拳志郎の妹だというのにしっかり者の南ちゃん、普段はお小遣いをもらっても、ほとんど使わずに貯金していたらしい。

財布を嬉しそうに振って、じゃらじゃらと音を鳴らしながら、

「今日はみなみが全部出しますね！」

と、南ちゃんは満面の笑みを浮かべる。

もちろん、四年生の南ちゃんにお金を出してもらうなんて思い、ぼくと拳志郎で支払うから南ちゃんはエサを選んでくれるだけではないよ、と断ったのだけど。

「いざというときに使わなきゃ、貯めた意味がないじゃないですか！」

彼女はそう言って、一步も退こうとしない。

「お金は使うためにあるんです！ それに、エサ係は当番制。ミニーちゃんのお世話は全員で協力してやることになってます。だって、わたしだけ甘えるなんてこと、絶対にできません！」

ビシッと鋭い視線を向けながら主張する南ちゃんの勢いに負け、ぼくはただ黙って頷き返すことしかできなかった。

「はっはっは！ わが妹ながらしつかりしてるなあ、南は！」
「お兄ちゃんはいつもながら、適當すぎる感じだよね。おれがつき添ってやる、とか言ってたわりに、お店の場所もわからなかったし……」

得意顔で笑っている拳志郎をも、鋭い言葉で一蹴。

一瞬にして、しゅんと沈んだ表情に様変わりしてしまう拳志郎だった。

でも、ほんとにしつかりしてるなあ、南ちゃん。ぼくも、もっとしつかりしなきゃダメだよね……。

「というか、ごめんね。ぼくもつき添いで来たのに、場所を知らなくて……」

「あっ、いえ、その、みなみのほうこそごめんなさい。そういうつもりで言ったんじゃないです。それに降人さんは、当番でもないのに善意で来てくださったんですから、感謝の気持ちでいっぱいですよ！」

ついポロツと口をついた言葉で、南ちゃんに気を遣わせてしまったぼく。

うう、しつかりしないと、なんて考えれば考えるほど、余計に墓穴を掘ってしまう。

やっぱりぼくはダメダメだ。

「おいおい、それならおれだって、善意でつき添ってやってる、ということになると思うんだが」

「お兄ちゃんは別よ。だいたい普段から頼りないんだから、たまには役に立ってくれなきゃ困るわ!」

「はっはっは、わが妹ながら、手厳しいな!」

「笑ってないで反省しなさい!」

沈みがちになっていたぼくだったが、南ちゃんと拳志郎の兄妹が織り成すテンポのよいかけ合いに、思わず笑みがこぼれる。

なんだかんだ文句を言いつつも、ふたりが仲のいい兄妹だというのは、とてもよくわかった。

「あつ、あれじゃない? ペットショップ・わんにゃんキャッスル」

ぼくが指差したそこには、西洋風のお城をかたどった可愛らしい建物があつた。

「はい、そうですね! お友達から聞いてたけど、なんかすごいですな〜!」

可愛らしいお城をイメージしているとはいえ、そのペットショップはかなりの広さがあるようで、駐車場にはたくさんの車が停まっていた。

お客さんもたくさん来ているのがうかがえる。

「うん、確かにすごいね……。でも、どうしてお城なんだろう……」

ぼくはそのあまりの広さに呆然として、思わずどうでもいい疑問が口から飛び出していた。

「いらつしゃいませ〜！ 初めてのお客さまですね〜？」

ペットショップに入ると、大きな猫の絵が全面に描かれたエプロンがいやが上にも目を引く店員のお姉さんが、元気いっぱい声をかけてきた。

広い店内では、そこかしこで、同じように店員さんの元気な声が響き渡っている。

「ペットをお探しですか？ 当店では、犬や猫から、フェレット、ハムスター、インコにオウム、果てはイノシシやらトカゲやら大蛇まで、ありとあらゆるペットを取り揃えてありますよ！」

「いえ、あの、えっと、ですね。猫ちゃんのエサを、探してるんですけど」

言葉を挟むすきもないほどにまくし立てられ、さすがにちよつと面食らっている様子の南ちゃんだったけど、どうにか店員さんにそう答える。

ぼくや拳志郎は、言葉を発することさえできずにいたわけだから、やっぱり南ちゃんはしっかりしていると言えるだろう。

「というか、ぼくと拳志郎が情けなさすぎなのかも……。」

「あつ、は〜い。猫ちゃんですね。子猫ちゃんですか？」

「え〜っと、違う、かな？」

「それでしたら、こちらへどうぞ〜！」

迅速に目的のものを聞き出し、素早くぼくたちを案内する店員さん。

なんとというか、さすが、という感じ。

「この辺にあるのが、猫ちゃん用のエサとなっております！」

そう言って店員さんから示された「この辺」というのが、これまですごい広さがあったりしたのだけだ。

「猫ちゃんの好みもありますし、同じエサばかりでは飽きてしまいますし、といったわけで、多種多様なエサをご用意してあるんです！」

「はっはっは、さすがにこれだけあると、迷っちゃうな！」

「そっだね〜」

あまりの種類の多さに、商品棚を眺めていた拳志郎とぼくは、思わずため息まじりの言葉を吐き出す。

「はい、迷ってしまわれるお客さまも、大変多くなっております。でも、ご安心を！ 売れ筋商品のみを集めたコーナーがございます。ランキング上位のエサを何種類か買って帰れば、きっと間違いはないはずです！」

店員さんも慣れたもの。そう言いながら商品棚の裏手に回って、売れ筋商品コーナーへとぼくたちを導く。

そんな場所があるのなら、最初からそっちに行けばいいのに、と思わなくもなかったけど。

でもそれが、上手いやり方ってやつなのだろう。

たくさん種類を見せてどれを買えばいいか迷わせておいて、売

れ筋商品を「何種類か」買えばOKと言って売れ筋商品を見せる。それを見た客は、売れているものならそれでいいかと考え、売れ筋商品のコーナーにあるエサを買っていく、という寸法だ。

店員さんはおそらく最初から、ぼくたちがあまり猫のエサに詳しくないことも見抜いていたのだろう。

とはいえ、ぼくたちが小学生だというのはわかっていると思うのだけど、それでも抜き取りなく接客するあたり、この店員さん、プロだなあ……。

南ちゃんは店員のお姉さんと笑顔で会話しながら、売れ筋商品の中からよさそうなものを選び、次々とカゴに入れていく。

あんなに買って、お小遣いは大丈夫なのかな、と心配になってしまつくらい。

支払いは南ちゃんに任せるとは言っていたけど、ぼくも拳志郎も、財布を持ってきている。

もし足りないようなら、次のぼくの当番の先払いつてことで、お金を出せばいいと考えていた。

もつとも、その心配は杞憂に終わる。

すっかり者の南ちゃんが、用意してあるお金で買えないほどの商品をカゴに突っ込むはずはないのだった。

それどころか、「今日は三千円分買います」と言っていたのだけど、きつちり計算していたのが、エサ代は二千九百八十円。もちろん消費税込み。

残りの二十円で、税込み十円のガムをふたつ購入すると、

「はい、つき添ってくれたお駄賃です！」

と言って、ぼくと拳志郎にそれを手渡す。

なんだかとおっても、自分が情けなくなってくる今日この頃、
なのであった。

ミューちゃんのエサを買い終え、帰ろうとしていたぼくたちに、

「あつ、お客さま。もしよろしければ、猫ちゃんのおもちやなんかもあるんですが、見ていかれませんか？」

さっきの店員さんが、やっぱり元気いっぱいな声でそう話しかけてきた。

「あ……え〜っと……」

「おもちや、ですか？ でも、ミューちゃんは子猫じゃないですし」

ぼくが生返事をするだけだったのに対し、南ちゃんは的確な受け答えをする。

うつうつ、ぼくじゃ南ちゃんには、絶対に敵わない気がしてきた……。

そう考えて落ち込んでいるぼくに構うことなく、店員さんはさらに声のトーンを上げてまくし立てる。

「いえいえ、子猫じゃなくても、猫ちゃんは遊んだりするものですよ！ どうぞ、こちらへ。ほら、このネズミのおもちやなんかは、野性の本能ともいうべき狩りの欲求を満たしてくれますし、肉球に優しいボールなんかもございます。それから、猫ちゃんには爪ときぎも必要ですから、おもちやではありませんが、こちらの爪ときぎマットなんかもよろしいですよ。あつ、立てて置いておく爪とき用のボールなんかもあります、ボールの上におもちやがついているタイプなんかも取り揃えてありますし、それから……」

いつの間にやらぼくたちを猫のおもちゃコーナーまで導き、嬉々とした表情で次から次へと商品の説明をしていく店員さん。

仕事だからというのは、確かにあるだろう。

でもそれだけじゃなくて、この人が本当に猫好きだというのがひしひしと伝わってきた。

「あ……あの、でも、すみません。こんなにいるいろと教えていた
だきましたけど、お金がもう残ってなくて……」

南ちゃんは、今にも泣き出しそうにうるうると瞳を潤ませながら、
微かに震える声でそう弁解していた。

しっかり者の南ちゃんは、余分なお金なんて持ってきていなかったの
のだ。

とはいえ、ぼくの気持ちはすでに決まっていた。

「店員さん。いくつか買いたいので、詳しく教えてください」

ぼくの言葉に、目を丸くする南ちゃん。

「降人さん、ダメですよ！ みなみ、もうお金ないですし。それに、
今日はみなみが当番なんですから、降人さんにお金を出してもらおう
わけにはきません！」

彼女は予想どおり、ぼくの行動を止めに入る。
でも。

「これは当番の仕事としてじゃなくて、ぼくの判断で買っつてこと
だから。ミューちゃんに喜んでほしいからね。それなら、いいでし
よ？」

じつと南ちゃんの瞳を見据えて、優しく諭すようにぼくの考えを伝える。

そんなぼくを見つめ返して、南ちゃんはなぜかほのかに頬を赤く染めながら、黙ってひとつ頷くのだった。

ニヤーン！

学校へと戻る道すがら、不意に猫の鳴き声が聞こえた。

「あっ、猫ちゃんです！」

南ちゃんが明るい声を上げる。

ぼくと拳志郎も猫ちゃんの声がしたほうに目を向けると、そこには階段があった。

この階段を上った先には神社がある。

実はぼくの親戚が宮司をしている神社だったりするのだけど。

通称ニヤーンコ神社とも呼ばれるそこには、猫の神様が祀られている。

だからなのか、いつでもたくさん猫ちゃんが集まっているのだ。さっきの鳴き声は、そんな猫ちゃんの声だったのだろう。

「はっはっは、やっぱりここには、いつもたくさん猫がいるみたいだな！」

「そうだね。……と、そんなことを悠長に語ってないで、早く戻らないと。ミューちゃんがおなかをすかせてるよ！」

「そうですね！ おもちやも買ってありますし、ミューちゃんの喜ぶ顔、みなみも早く見たいです！」

ぼくたちは意気揚々と、神社へと続く階段の前から駆け出していた。

「ただいま〜！」

「おかえり、降人くんっ！ あまりに遅いから、心配しちゃったよっ！」

ぼくたちが学校に戻ると、みんなが出迎えてくれた。

「ミュー！」

もちろん、ミューちゃんも。

「降人！ あんた隊長代理なのに、なんで出かけちゃってたのさ！ っつて、買い出しだったのね」

今日は珍しく、羽浮姉ちゃんも来てたのか。

姉ちゃんは自分で肉球防衛隊の隊長になると言っていたわりに、あんまりミューちゃんのもとへ来ていない気がする。

中学生ともなると、いろいろと用事があるものなのかもしれない。

というか、どこか部活に入らなくちゃいけない、とかって言ってたっけ。

部活に参加してから小学校に来て、ぼくたちはすでに帰っていることのほうが多そうだし、仕方がないのだろう。

「お疲れ様！ うわっ、結構買ったわね。重そうだわ」

いちごがぼくたちの持つ荷物を見て、驚きの声を上げる。

エサの袋はふたつほどあったのだけど、大きいのを拳志郎が、小さいのを南ちゃんが持っていた。

そしてそれ以外に、ぼくも袋を持っていたのだ。いちごが驚くのも無理はない。

「えっとね、エサだけじゃなくて、こんなのも買ってきたから……」

そう言ってぼくは、自分で持っていたほうの袋の中身、おもちゃの数々を取り出す。

ゼンマイで動くネズミのおもちゃに猫じゃらしっぱいおもちゃ、カラフルなボールに爪とぎ用の小型マット、などなど。

ぼくは、得意満面の顔になっていたかもしれない。

楽しく遊んでくれるミューちゃんのを姿を思い描き、気色悪い笑顔にすらなっていたかもしれない。

「うわあ、おもちゃがいっぱいだあ。ミューちゃん、見て見てえ〜！」

袋から出てくるおもちゃの数々を見て、みるくちゃんが予想以上の反応で歓喜の声を響かせながらミューちゃんに話しかけていた。

ここまでいい反応をしてくれると、こっちまで嬉しくなってくる。

ただ……。

他の人の反応はいまいちだった。

「うーん、ボクはあまり詳しくはないけど、これは対象年齢が低すぎるものが多いんじゃないかなあ？」

「そうね。この爪とぎマットなんかは結構よさそうだけど、他のはちよつとねえ……」

「ミュー……」

将流といちごが、文句まじりの言葉をつぶやく。

それに合わせるかのように、ミューちゃん自身も、あまり嬉しくなさそうな弱々しい鳴き声をもらす。

「み……みなさん、そんなふうに言わないでください！ 降人さんはミューちゃんに喜んでもらいたくて、こんなにたくさん買ってきてくれたんですから！」

「はっはっは、そうだな！ ミューちゃん、ほら、遊んでみたら結構、楽しいかもしれないぞ！」

見るに見かねたのだろう、南ちゃんがぼくをフォローしてくれた。拳志郎も猫じゃらしっぽいおもちゃを手に取ると、ミューちゃんの目の前で激しく振り始めた。

「ミュー」

そうね。せつかくだし。

なんとなくミューちゃんは、そんなふうに言っているように思えた。

そして遠慮がちに、ちよいちよいと、目の前の猫じゃらしにパンチをお見舞いする。

やがて両手を使いパンチを連続で繰り出すと、ミューミューと鳴

き声を上げ始めた。

「はっはっは！ やっぱり楽しんでるようだな！」

拳志郎はそう言いながら笑っていたけど。

ぼくにはどうしても、ミューちゃんが気を遣って遊んでくれているようにしか思えなかった。

と、そのとき。

ふと視線の端を、影が通り過ぎたような気がした。

？

ぼくは思わず、きよろきよろと辺りを見回す。

「ん？ 降人くん、どうしたの？」

いちごが怪訝な表情で話しかけてくるけど、ぼくは答えなかった。ミューちゃんを隠しているこの場所は、ウサギ小屋とその横にある植え込みのあいだということになる。

その周囲には、中庭と、校庭、裏門に続く道以外には、木々が立ち並び一帯が広がっているだけだった。

木々を越えた先にはプールがある。もちろんプールは校舎の別な場所から行けるようになっていて、体育で使う場合とかに、わざわざこんな木々のあいだを抜けていく必要はない。

その辺りの木々はうっそうと茂っているため、薄暗くてなんだか涼しく感じられる。

そんな木々の中に、なにやら微かに人影のようなものが見えた気がした。

ぼくはじつと目を凝らす。

あつ、ちよつと動いた。明らかに、誰がいる……。

そのとき、ぼくは思い出した。

希望くんが話していた、怪しい人影の噂を。

帽子をかぶりサングラスとマスクで顔を隠した、春なのにジャンパーを着ている、怪しい人影が目撃されているらしい。

そんな噂話を聞いた、ということだったはずだ。

「みんな……、ちよつと……」

「え？ 真面目な顔しちゃって、どうしたのよ？ そんな顔、あなたには似合わないわよ？」

いちごが茶化してくるけど、ぼくは真面目な顔を崩さず、声を落として木々のあいだにいる人影のことを話した。

「ふええ〜、怖いよお〜、もごごっ！」

みるくちゃん思わず半べそで声を上げていたけど、いちごがすぐに手を伸ばしてその口を塞ぐ。

気づかれたらマズい。そう考えたのだろう。

でも、結局気づかれてしまっていたようだ。いつの間にか、人影は見えなくなっていた。

ぼくたちに見つかったことがわかって、逃げたに違いない。

「あちゃ〜、逃げられちゃったみたいね」

「はづう〜、ごめんなさい〜……」

いちごの言葉に、みるくちゃんが半べそを通り越して、目に涙を
いっぱい溜めていた。

「……でも、また来るかもしれないよ……？」

と、希望くんが控えめな声を上げる。

「……周りに誰も人がいないときにしか来ないって話だから……。
友達が通りかかったら、急いで逃げていったみたいだし……」

小さな声ながらも、一生懸命に語ってくれる希望くん。
うん、キミの頑張りは、無駄にはしないよ。

「よし。それじゃあ、こっしよっ」

ぼくはみんなを近くに集め、ひそひそと小声で作戦を伝え始めた。

「それじゃ、そろそろ帰ろっか！」

「そだねっ！ ミュウちゃん、また明日ねっ！」

わざとらしいほどはつきりと大きな声を上げながらミュウちゃんに手を振ると、女子たちがウサギ小屋の横から離れていく。

それに男子も続く。

帰るとき、裏門は使わないのが普通だ。というわけで、みんな中庭を越えて、正門のほうへと向かう。

「ミュウ……」

誰もいなくなった一角には、寂しそうなミュウちゃんの鳴き声だけが、微かに響いていた。

とそこへ、こそこそと隠れながら近づく人影があった。

人影は辺りを警戒しながら、足音を立てないように、ウサギ小屋の横 すなわち、ミュウちゃんを隠してある場所にまで近寄ってくる。

手にはなにやら布製の袋を大事そうに抱えているようだった。

……どうして帰ったはずのぼくに、そんなことがわかるのかといえ

ば。それはもちろん、ぼくは帰ってなんかいないからだ。

ぼくだけじゃない。拳志郎も帰ってなどいない。

さつき大げさに声を上げて中庭を抜けていったメンバーに、ぼくと拳志郎は含まれていなかったのだ。

拳志郎はウサギ小屋の陰、ぼくは植え込みの陰に隠れていた。ともかく、物音を立てないようにしながら、ぼくと拳志郎は様子を見守っている。

人影はウサギ小屋と植え込みのあいだを通り、ミューちゃんを隠してある辺りにしゃがみ込んだ。

それを見計らって、ぼくはなるべく足音を響かせないように気をつけながら作戦を遂行する。

あるものを、人影が通り抜けたあとの、ウサギ小屋と植え込みのすき間に置いたのだ。

さらに別のものを、いくつか地面に転がしておく。

うん、これで準備はOK。

どうやら、気づかれてはいないようだ。ぼくはホッと息をつく。

と、そのとき。

人影は、持ってきていた袋の中に手を入れた。

もしかしたら刃物かなにかを取り出して、ミューちゃんを傷つけるつもりなんじゃ……。

ぼくは青ざめ、飛び出そうと身構える。でも、ぼくが飛び出すよりも早く、拳志郎が行動していた。

ウサギ小屋の陰から、突然飛び出してきた物体。

それは、ゼンマイ仕掛けで動く、いくつかのネズミのおもちやだった。

だけど、それがなんなのか確認するよりも先に、思わず声が出ていたのだろう。

「キヤッ!?!」

人影は短く悲鳴を上げる。

……あれ？ この声……。

と、予想以上に驚いたようで、人影は声を上げただけではなく立ち上がってきびすを返すと、脱兎のごとくこの場から逃げ去ろうとした。

その拍子に。

人影の足もとがすくわれる。

いや、正確には足もとにあった物体につまずいたのだ。

そのまま人影は倒れ込み、ドサリと音を立てて地面に転がる。

ぼくがさつき置いておいた爪ときマットと転がしておいたボールが、バツチリ効果を発揮したというわけだ。

さらには生垣の陰から様子をつかがっていたメンバーも駆け寄ってくる。

実はみんなも本当に帰ったわけじゃなかった。

中庭を抜けて正門に行くには、各クラスの教室がある校舎と特別教室のある校舎を結ぶ渡り廊下を横断することになるのだけだ。

その手前には、生垣存在している。

みんなは渡り廊下の手前で身を屈め、生垣に隠れるようにしながらウサギ小屋のある一帯が見える場所まで移動し、息を潜めてこちらの様子をつかがっていたのだ。

そして、いちごと羽浮姉ちゃんを筆頭に、将流と拳志郎、そして夢ちゃんまでもが人影につかみかかる。

さすがに、みるくちゃんや南ちゃん、希望くんは、少し離れた場所で成り行きを見守っていたけど。

「痛たたたた！　ちょ、ちょっと、なによ、あなたたちっ！？　こら、やめなさい！」

数人に囲まれ、つかみかかられた人影は、慌てて大声を上げている。

マスクをしているから、少しくぐもった声ではあったけど、その声はやっぱり……。

「おとなしくしなさいっての！」

「はっはっは、やめろと言われてやめるようなら、こんなことはないってな！」

「ふっ、そうだね。ボクたちのミューちゃんを傷つけようとした罪は、万死に値するのさ！」

「そうだよっ！　無駄な抵抗はやめて、観念しなさいっ！」

「いくらこっちが子供だからって、五対一じゃ、あなたに勝ち目はないわよ！」

口々に叫んで人影を押さえつけようとする肉球防衛隊メンバー。

「みんな、待って！」

そんな仲間たちに、ぼくは静止の声をぶつける。

「えっ？　どうしたのよ、降人くん」

「この人を、よく見てよ」

どうして止めるの、という視線を向けてくるいちごにそう言いながら、ぼくは倒れてみんなから押さえつけられていたその人のサングラスとマスクをはずした。

「あつ……」

「雪菜先生！」

やっと気づいたみんなは、驚いて目を丸くしていた。

そう、ミユウちゃんに近づいてきた人影は、雪菜先生だったのだ。

「くしゅん！ くしゅん！ もう、なにをするのよ、あなたたちは！
くしゅん！ くしゅん！」

呆然と立ちすくむみんなの目の前で、彼女は猫の毛アレルギーのせいでくしゃみを連発して涙目になっている。

涙目になっていたのは、寄ってたかって押さえつけられたから、という理由もあつただらうけど。

「ごめんなさい……」

それを見たみんなは、消え入りそうな声で謝るのが精いっぱいだった。

雪菜先生は、すぐにマスクとサングラスをつけ直して、話し始めた。

「あなたたちが猫の世話をしてるのはわかってたから、少しでも手伝おうと思ったのよ。先生のアレルギーのせいで、教室で飼わせてあげられなかったから、せめてエサくらいはと思ってね。近づくと

くしゃみが出るから、マスクとサングラスと帽子で防御して、服にも毛とかがつかないようにジャンパーを着てたのよ」

先生の持っていた袋の中身は、猫のエサだった。

ここ数日、ずっとこうして誰もいなくなつたあとで、ミューちゃんにエサをあげていたのだという。

希望くんが聞いた怪しい人影の噂は、雪菜先生のことだったのだ。

「雪菜先生……。お気遣いはすごく嬉しいです。ミューちゃんも喜んでると思います」

「ミューー！」

ぼくの声に、ミューちゃんも同意してくれるかのように鳴いた。

先生の持ってきてくれた、ちょっとリッチなグルメタイプの猫缶に舌鼓を打ちながら。

「でも……」

ミューちゃんのエサを持ってきてくれたのに、言ってしまったいいものかどうか迷ったけど、続けてぼくは先生に容赦ない感想を言い放つ。

「いくらなんでも怪しすぎですー！」

「あう、そう、よね……。ごめんなさい……」

今度は雪菜先生がしゅんとして、消え入りそうな声で謝罪の言葉を述べる番だった。

ミューちゃんがウサギとか犬とかに襲われるといった危険が続いている現状では、味方は多いほうがいい。

アレルギーで怪しい格好ではあったものの、雪菜先生が味方についてくれているのは、正直とても嬉しかった。

ミューちゃんを守ると意気込んでいるとはいっても、ぼくたちは小学生なのだ。

羽浮姉ちゃんは中学生だけど、それでも子供の域を抜けているとはいえない。

大人である雪菜先生の存在は、ぼくたちを安心させてくれる。

直接ミューちゃんを危険から守るために体を張ってくれたりまですなくても、相談に乗ってくれるだけでも充分に心強いのだ。

それにしても、昨日の雪菜先生のこととは別として、最近ミューちゃんに降りかかってきた出来事　黒猫が威嚇してきたり、ウサギとか大型犬とかが迫ってきたり、といったことは、いつたいなんだっただろう？

黒猫に関しては、猫同士の縄張り争いだとか、そんな感じだと考えれば納得できなくもないけど。

ウサギとか大型犬とかについては、ミューちゃんに着せている服にウサギや犬のエサが入られていたわけだから、故意にそれらの動物をミューちゃんにけしかけた、ということになるはずだ。

怪しい人物がいるという噂を聞いて、もしかしたらその人が犯人かもしれないと考えたりもしていたのだけど、正体が雪菜先生だとわかった今、その可能性は消え去った。

ぼくたちは、肉球防衛隊としてミューちゃんを守らなければ、と

いう思いを、よりいっそう強く感じ始めていた。
そんな中、また新たな襲撃者が襲いかかってくることになる。

生暖かい風が吹き抜ける、とある放課後。

ぼくたち肉球防衛隊の面々はいつものように、みんなでミューちゃんのものを訪れていた。羽浮姉ちゃんも含めた、フルメンバーだ。姉ちゃんはこのところ、ミューちゃんを心配してくれているからだろうか、部活を休んでこの場所に駆けつけることが多くなっていた。

「今日もミューちゃんは可愛いわねっ！」

無類の猫好きである夢ちゃんが、今日もミューちゃんを抱き上げて、すりすりと頬ずりしていた。

ぼくもよくやってるけど、毛とヒゲが頬に当たって、すごく気持ちいいんだよね。

普段なら頬ずりされているほうのミューちゃんも、喜びの鳴き声を上げたりする場面なのだけだ。

でも、今日は違っていた。

「ミニャー……！！！」

と焦ったような大声を放ちながら、しきりに手を目の前に向かって伸ばしている。

ミューちゃんの手は、抱き上げている夢ちゃんの肩口から、その背後に向けられていた。

と、それも間一髪で避けるミューちゃん。

「うわあ〜！ ミューちゃん、カッコいい〜！」

みるくちゃんは、こんな緊迫した状況だというのに、場違いなほどのんびりした口調。

だけどこのままじゃ、やがては疲れて避けきれなくなってしまうだろう。

いったい、どうしたらいいんだ！？

依然として、二匹のイノシシは直線的な動きで突っ込んできている。

どうにか状況を見極めようとするべくだったが、そんな思考もすぐに途切れることになる。

イノシシたちのターゲットは、ミューちゃんだけではなかったからだ。

その魔の手は、ぼくたち肉球防衛隊のメンバーにまで及んできた。

「わわわ！」

「きゃ〜〜〜！」

「ちよつと、来ないでよ！」

散り散りに逃げ回るぼくたち。

ミューちゃんも小さい体ながらも懸命に避けている。

猪突猛進。前しか見えていないイノシシ……。

「そうか！」「そうだっ！」

ぼくと夢ちゃんの声が重なった。
お互いに見つめ合い、黙って頷く。

「ほら、こつちだ！ ノロマなイノシシめ！」
「そっちのおバカなあなたは、わたしが相手よっ！」

ぼくと夢ちゃんはそれぞれ、別のイノシシを挑発する。

人間の言葉がわかるわけではないだろう。
でも、バカにされていることは、なんとなく感じるものなのかもしれない。

二匹のイノシシは、これまで以上に気合いを入れているのか鼻息も荒くしながら、それぞれ、ぼくと夢ちゃんに向かって、突進してきた。

ニヤツ。

ぼくと夢ちゃんは、イノシシがぶつかってくる直前、横に飛んで華麗にかわす。

ただまっすぐ突っ込んでくるだけのイノシシ。
そして勢い余ったイノシシは、ターゲットが目の前から消えても急に止まれはしない。

ぼくと夢ちゃんは、イノシシを同じタイミングで突っ込んでくるように挑発し、上手く角度を合わせていた。そして、

ゴツン！

大きな音を立てて二匹のイノシシはお互いに頭から衝突し、その

場に倒れるのだった。

イノシシはすぐに立ち上がり、そのまま裏門のほうへと走って逃げてしまった。

あれ？

今イノシシが逃げていったほうに、なにか動く影みたいなのが見えたような……。

黒い、小さな影だったような気が……。

「ぶいつ！ わたしたちの勝利よっ！」

ぼくが目を凝らしていると、夢ちゃんが満足そうな声を上げながらブイサインを掲げた。

「参ったか、イノシシどもめ！ わたしたち肉球防衛隊は、無敵なのよー！」

羽浮姉ちゃんはこぶしを握りしめながらそう叫ぶ。

……でも姉ちゃんは逃げ回っていただけで、べつになにもしてないじゃん。

なんてツツコミは、もちろん入れられるはずがない。……絶対に反撃を食らっちゃうからね。

そして結局、気になっていた黒い影のようなものについても、確

認
で
き
ず
じ
ま
い
と
な
っ
て
し
ま
っ
た
。

次の日の放課後、またみんなでいつもの場所に集まっていた。

昨日のこともあったし、羽浮姉ちゃんも引き続き、部活を休んでまで小学校に来てくれている。

もっとも、姉ちゃんがいてもあまり意味はないかも、というのがぼくの考えだったりするのだけだ。

それでも肉球防衛隊の隊長にして最年長ということになるわけだから、あんな姉ちゃんでも他の人からは頼りにされているようだ。

……一応。

「あっ、ちよつと羽浮さん、ダメですよ！ ミューちゃんにハンバーガーなんてあげちゃ！ たまねぎ入ってるから、食べると体を壊すんですよ！」

「えっ、そうなの？　なんか、すごく食べたそうにしてたから、つい」

「はっはっは、羽浮さんらしいな！」

「笑いごとじゃないってば。まったくもう……」

……うーん、やっぱりあまり頼りにされている感じでもなさそうだけだ。

それ以前に、ひとりだけハンバーガーとフライドポテトを買ってきて、ぱくぱくと食べているなんて、年長者として失格ではなからうか。

と、そんなぼくたちの前に、再び新たな襲撃者が牙をむいてきた。

シユルシユルシユル！

奇妙な音を立てながら器用に体をくねらせ、ぼくたちに迫りくる。

「きゃっ！」

「うわっ、でか！」

どうにかぼくたちは、飛び退いて襲撃者の魔の手をかわす。

いや、まあ、正確に言えば襲撃「者」ではないし、「手」もないわけだけど。

「なによ、このへび！ どこから湧いてきたの！？」

いちごが叫び声を上げる。

そう、その襲撃者は、へびだった。

それも、とても巨大なへびだ。

体をくねらせているから正確にはわからないけど、優に五メートル以上はありそうな、そんな大蛇が、ぼくたちに襲いかかってきたのだ！

身をかわしたぼくたちの横を通り過ぎたへびは、ピタリと止まり、ゆっくりと頭を持ち上げると、舌をちよろちよろと出しながらこちらを睨む。

もちろん、へびの目から表情を読み取ることなんてできないけど、それでも明らかに、睨んでいるといったような雰囲気。

シャーーーーー！！

へびは威嚇の音を発しながら、じわりじわりとぼくたちに近づいてくる。

「うう、怖いよぉ」

「だ……大丈夫だよ、みるくちゃん。このボクが、守って、あげるからねえ」

「ふええ」

泣きべそをかいているみるくちゃんに、将流が優しく声をかける。それだけならカッコいい場面と言えるだろうけど、将流自身もガタガタと震えていたりするから、さすがにちよつと情けない。

でもみるくちゃんとしては、ワラにもすがりたい気持ちなのか、将流の陰に隠れるようにしながら、彼の服の裾をぎゅっと握っていた。

「どこからこんなへビが入ってきたのよ！」

再び、さっきと同じような叫び声を上げるいちご。彼女も彼女でパニックになっているのだろう。

でも、確かにおかしい。こんな大きなへビ、普通に日本に生息しているとは思えないし。

「それにさ、毒へビだったりとかしないかな!？」

姉ちゃんがへっぴり腰で情けなくぼくにすがりつきながら言う。

そうだ。確かにもし毒へビだったら、この状況は危険すぎる。

焦りの念がぼくたちをすっぽりと包み込んだ、そのとき。

「……大丈夫、毒はない。アミメニシキへビ。東南アジアなどの熱帯雨林なんかに生息。ペットとして飼われることもある……」

希望くんがつぶやきをもらす。

うわ、なにげに物知りだ。

「あははっ！ 希望は図鑑を読むのが趣味だからねっ！」

夢ちゃんがそう言った。

緊迫した状況で、みんな冷や汗をたらしている中、この姉弟だけはちよつと余裕があるような……。

「ふふふっ！ わたし、ニヤンコだけじゃなくて爬虫類も大好きだからっ！ ああ、大っきなへびさん、ラブリー！」

こんな大蛇に睨まれ、威嚇されながらも、そう言つてのける夢ちゃん。

ああ、やっぱり夢ちゃんって、変わつてるんだなあ。

と、そんなことを考えてる場合じゃない！

大蛇は威嚇を続け、そしてぼくたちに飛びかかる。

なんとか避けてはいるものの、何度も繰り返される攻撃に、ぼくたちは徐々に追い込まれてしまう。

「どうすれば……」

汗が地面にまでポタリポタリとこぼれる。

「あっ、そうだ！」

不意に姉ちゃんが大声を上げた。ポケットから取り出した、なにが金属製の箱型のようなものを、目の前に掲げる。

そして、

カチカチカチ、シユボツ！
火をつけた。それはライターだった。

目の前で突然燃え上がった炎を見て、明らかに動きを止めるへび。じわじわりと、あとずさりするようにぼくたちから離れると、身を翻して一気に裏門のほうへと逃げ去っていった。

「ふう、危なかったわね！ でも、隊長であるわたしの機転のおかげで、こうして無事撃退できた！ ほらあんたたち、大いに感謝しなさいな！」

姉ちゃんのそんな横柄な物言いに、さすがに困惑しながらではあったけど、みんなは一応「ありがとう」と声を揃える。

「でも、姉ちゃん。どうしてライターなんて持ってたの？」
「ふふふつ、これよ！」

ぼくの問いに、姉ちゃんはさらにポケットから、もうひとつの箱状のものを取り出した。

いや、今度は本当に箱だった。
そしてその中から、一本の細長い筒状の物体を取り出す。

「え？ 姉ちゃん！？」

それは……！ いや、でも、それって、ダメなんじゃ……！！？
焦るぼくたちの目の前で、姉ちゃんは筒状の物体の先端にライタ

「の火を近づける。

そして。

くるり。

その物体を素早く反転させ、火にあぶったほうを口にくわえた。

「うん、火にあぶったシガレットチョコは、やっぱり格別だわ！」

……………。

ツッコミどころ満載な姉ちゃんに、ぼくはどこからツッコミを入れていいかわからず、呆然と立ち尽くすことしかできなかった。

巨大なへびが逃げ去り、姉ちゃんの言葉に呆然としていた、そのとき。

不意に奥の植え込みから葉のこすれるような物音が響く。

あつ、あれは……！

小型の影。

それは、黒い猫だった。

以前ミューちゃんを威嚇していた、あの黒猫だ！

ぼくの視線に気づいたのだろう、黒猫は植え込みから飛び出し、裏門のほうへと逃げ出す。

でも今日は、その姿を他のみんなも目撃していた。

「あつ、黒猫！」

いちごが声を上げる。

あの黒猫は前にもここに来ていたわけだから、また入り込んできても、それほどおかしいことではない。

だけど、ぼくが昨日見た黒い影も、もしかしたらあの黒猫だったのではないか？

そうすると、昨日のイノシシの件も、今日の巨大なへびの件も、あの黒猫がなにか関わっていたのではないか、という推論が浮かび上がってくる。

普通に考えたら、そんなことがあるはずはないと思うのだけど。

それでも、ここ数日のおかしな状況からすると、思わずそんなふうに考えてしまっても不思議ではないだろう。

そしてその考えは、やっぱり間違いではなかった。

「ちょっと、あんた！ しつつこいわよ！ もう来ないでよねっ！？」

凜とした女性の声が響く。

でもそれは、いちごでも、夢ちゃんでも、姉ちゃんでも、もちろん、みるくちゃんや南ちゃんでも、なかった。

え？

みんな一斉に振り返る。

そこには、

「あっ………！」

と言って口を押さえながら、二本足でしっかりと立っている、ミユーちゃんの姿があった。

ヒュ~~~~~……。。

乾いた風が通り過ぎる。

「今、ミユーちゃん喋ったよね!？」

「それに、二本足で立ってたぞ!」

ぼくたち全員から詰め寄せられたミユーちゃんは、観念したように、ポツリポツリと語り始めた。

「わたくしは、実は、魔界のプリンセスなんです」

いきなり度肝を抜かれるような発言だった。

でも、誰も口を挟まない。いや、挟めないのだろう。

そんなぼくたちの視線に気づいているのかいないのか、ミューちゃんはさらに話を続ける。

「さっきの黒猫は、わたくしをつけ狙っている、魔界のプリンセス」

「……ミューちゃんがプリンセスで、黒猫がプリンス……。つまり、家族ってこと？」

どうにかしぼり出したぼくからの疑問の声にも、ミューちゃんはしっかりと答えてくれた。

「はい。あの黒猫は、わたくしの弟、シグマです」

ミューちゃんが言うには、彼女は魔界の王家で、幸せに暮らしていたそうだ。

ただ、いつしかミューちゃんは疑問を感じ始める。

彼女はプリンセスとして、やがては王位を継ぐ立場にあった。

弟もいたわけだけど、どうやら魔界は女性優位な社会のようで、ミューちゃんのほうに王位継承権があるのだという。

とはいえ、自分が母親のあとを継いで女王になる気には、どうしてもなれなかった。

このまま魔界の王家でのうとうと生きていていいのだろうか。もつと世間を知る必要があるのではないだろうか。

そんなもやもやとした思いが、ずっと心の中でくすぶっていたからだ。

ミューちゃんはある日、お城から抜け出して、一般人の暮らす町へと足を運んでみた。

町に出た彼女は、いろいろな人からこんな噂話を聞く。

この世界とは別の、もつと豪華絢爛で楽しい世界があるみたいだと。

それはぜひとも、この目で見てみなければ！

ミューちゃんはそう思った。

そして彼女は、古くからの伝承にあった、近寄ってはいけないとされる異世界へと通じる泉へと向かった。

意を決して泉に飛び込むと、気づけばぼくたちの住むこの世界にいた。

「伝承では、古代王家の血筋を引く者以外が異世界へ出ると、言語能力も思考能力も衰えてしまう、と言われていました。わたくしは王家の血筋なので大丈夫でしたが、それでも身体的には変異してしまい、こちらの世界でいう猫のようになっていました。古代王家の血筋があってもこうなのですから、魔界に住む一般人たちがこちらの世界に来たら、おそらくは本当に猫と同じようになってしまおうでしょう。だから伝承にあった泉には、誰も近づかないように言われていたに違いありません」

「へえ、そうだったんだ」

さすがにちよつと現実逃避気味になっているのか、微妙に棒読み口調ではあったものの、いちごが相づちを打つ。

「だとすると、弟さんはあなたを連れ戻しに来たってことでしょうか？でも、あのへびとかをけしかけてきたのも、その弟さんなのよね？ どうしてそんな危険なことをするの？」

現実逃避気味ではあっても、いちごはしっかりと話の内容を理解して、自分なりに分析しているようだ。

「きつと、わたくしを亡き者にしようとしているんだと思います。王位継承権はわたくしにあります、わたくしがいなくなれば、王位は弟に移りますから。弟はきつと、ずっとわたくしのことを恨んでいたんだわ……」

最後のつぶやきは、とても苦々しい口調になっていた。

王家のことなんてぼくには想像もつかないけど、でもやっぱり、お家騒動とかがつぎまとうものなんだろうな。

実の弟から命を狙われるなんて、すごくかわいそうだよね……。

「大丈夫だよ、ミューちゃん！ ぼくたちが、絶対にキミを守るよ！」

「はっはっは！ それがおれたち、肉球防衛隊の役目だからな！」

「うんうんっ！ わたしたちにど〜んと任せといてっ！」

「みなさん……」

決意を新たにするぼくたち肉球防衛隊の面々に囲まれ、ミューちゃんも明るい笑顔を取り戻す。

シグマ！ ぼくたちは、おまえなんかには負けない！
絶対にミューちゃんは守り抜いてみせる！

ぼくはぐっとごぶしを握りしめ、気合いを入れ直すのだった。

ヒュウウウウウウウウ………。
妙に湿った風が通り過ぎる。

「シグマ、あんた、性懲りもなく、また来たのね!？」

「ふっ……。ミュー姉よ、あたりまえだろう? オレ様にとっては、将来がかかっているんだからな」

「ふん、将来ねえ……。そのわりに自分では手出ししないし、けしかけてきてた動物たちだって、わたくしの仲間たちに簡単に蹴散らされてたじゃない?」

「はっ、笑わせるなよ。今までののは、ほんの小手調べってやつさ」

「へえ〜? でも、近くにいる動物を操るだけじゃ飽き足らず、ペットシヨップから連れ出した動物まで使ってたみたいじゃない。わざわざ秘伝の薬も使ったんでしよう? それでも小手調べだったってわけ?」

「くっ……。バレてやがったのか。でもよ、もしそれでミュー姉を打ち倒すことができれば、それこそ儲けものってやつだしな。小手調べにだって、いくらかの投資をしても構わないだろう?」

「そう……。まあ、それはいいわ。で? 今日はどうしたわけ?

結局また、ひとりでは来ることができなかつたお子ちゃまなあんたに、このわたくしが負けるとでも思っているの?」

「ふん。強がっていられるのも今のうちだけだぜ? 魔界格闘技ナンバーワン決定戦、通称MK1でチャンピオンに輝いたんだからな、このガンマは」

「ウガーーーーー!!! オラ、強いんだな!」

シグマの声に合わせて両腕を上げると、ガンマは力こぶを作って強靭な肉体をアピールする。

「シグマ、あんた……。結局、自分じゃなにもできないってことを認めてるだけなんじゃないの？」

「うるさい！ わざわざオレ様が出る幕もないってことだ！ 今日こそは、ミュー姉を打ち負かしてやる！」

「諦めの悪い男ね。わかったわ、受けて立とうじゃないの！」

ザッ。

身構える両者。

緊迫感が、辺りを支配していた。

「……思わず見入っちゃったけど、向き合ってるのが猫同士ってのは、いまいち緊迫感を削ぐ気がするよねっ！」

「はっはっは、そうだなあ！」

「確かに、なんだかお遊戯を見ているみたいでした」

「……猫のお遊戯……。楽しそう……」

「でもでもお、本人たちは、いたって真面目そうだったよお？」

「ふっ……。猫だから、本人って言い方は間違ってるかもしれないけどねえ〜！」（ふあさっ）

「ほら、バカなこと言ってるんで、あたしたちも行くわよ！」

「ん、そうだね。……というわけで、お待たせ、ミューちゃん」

そこへ、ぼくたち肉球防衛隊のメンバーが、こぞって登場する。

放課後になったばかりの時間だから、中学生である羽浮姉ちゃんはまだ来ていないけど。

……というか、来るかどうかもわかっていないけど。

「みなさん！」

「な……！！ おまえら、いつからそこに！？」

喜びの視線を向けるミューちゃんとは対照的に、驚愕の表情をあらわにする黒猫シグマ。

「いつからって……。ミューちゃんが、性懲りもなくまた来たとか言ってた辺り？」

「さ……。最初からじゃね〜か！」

怯む様子もなく正直に答えるいちごに、シグマは怒りを乗せたツッコミを放つ。

「にははははっ！ だってさ、ほら、三匹の猫が二本足で立って対峙して、しかもなにやら少年漫画チックに前口上を飛ばし合ってるなんて状況、なかなか見れないからさっ！」

「はっはっは！ だからつつい、見入ってしまったってわけだ！」

夢ちゃんと拳志郎の、ちょっと小バカにしたような言い方に、シグマはさらに怒りの度合いをアップさせる。

もう、頭のとっぺんから湯気が立ち昇るような勢いだ。

「くっ……。！ ミュー姉は後回しだ！ ガンマ！ こいつらを、やっちなええ！」

「ウガァー！！ 合点だ、アニジャ！」

「……。いや、兄ではねえけど……」

シグマの控えめなツッコミは完全に無視し、ガンマはぼくたちに飛びかかってくる。

魔界格闘技ナンバーワン決定戦のチャンピオン、なんて言っていたし、猫とは思えないほどがっしりとした体格ではあった。

だけど、所詮は猫。

二本足で立った場合の背の高さからしたら、小学生であるぼくたちから見ても、半分ちよつとくらいしかない。

聞いた話では、一人間メートルは二猫メートルに換算できるとか。そう言っていたのは羽浮姉ちゃんだから、きつと口からでまかせだとは思っけど。

そもそも彼らは魔界の住人だから、正確には猫じゃないわけだし。

と、さっきの微妙に緊迫感もない前口上のとときの雰囲気やガンマの見た目などから、ぼくたちは油断しすぎていたのだろう。

「む……、うおっ!？」

ガンマが真っ先に飛びかかったのは、ぼくたちの中でも一番体格のいい拳志郎。

その拳志郎の胸倉をつかみ素早く体を反転させると、ガンマはいつも簡単に投げ飛ばしたではないか。

投げ飛ばされたほうの拳志郎も、なにが起こったのかわからない、といったような声を発しながら宙を舞う。

ズバーーーン!

激しい音を周囲に響かせながら、見事に決まった背負い投げ。

拳志郎は、一瞬にして白目を向いていた。

倒れた拳志郎を心配する余裕もなく、ぼくたちは次々と投げ飛ば

される。

ぼくや将流、希望くんだけならまだしも、ガンマは女子までも容赦なく投げ飛ばしていった。

拳志郎は打ちどころが悪かったのか、目を回してしまったけど、ぼくを含め、他の人は気を失ったりまでではしなかった。

だけど、逆に気を失ったほうがマシだったかもしれない。

痛みに顔を歪ませ、うめき声を上げながら、ぼくたちは地面をのたうち回る。

拳志郎を打ち負かしたところのあるいちごでさえ、受身も取れずに苦悶の表情で地面に這いつくばっていた。

そしてぼくは、激しくひじから地面に打ちつけられ、あまりの痛みで声も出せない状態だった。

「ふっ……、口ばかりでたいしたことねえな、おまえら」

「あ……あなたはなにもしてないじゃないのよ！」

勝ち誇ったようなシグマに、ミューちゃんは負けじと言い返すものの、その声は焦りで震えていた。

さすがに自分の体格では、このガンマに勝てる見込みはない。それをひしひしと感じていたのだろう。

だからといって、ひとりで逃げ出すわけにもいかない。

ぼくたちが今、こんな凄惨な状況に陥っているその責任は、自分にある。

ミューちゃんはそう考えているに違いない。

そんなこと気にしないで、逃げて！

ぼくはそう言いたかった。でも、痛みで声も出ないぼくには、ど

うつすることもできない。

このままミューちゃんが打ち負かされるのを、ただ黙って見てい
るしかないのか……？

痛みよりも悔しさで、涙が溢れる。

と、そこに、救世主が現れた。

「あれ〜？ あんたたち、なに寝っ転がってるのさ〜？」

すつとんきょうなことを言いながら、羽浮姉ちゃんが歩み寄って
くる。

普通なら、ひと目見たただで大変な状況だとわかるはずなのに、
姉ちゃんはまったく気づいていない。

「あつ、見たことのない猫ちゃんだ。へえ〜、大つきいわね〜。き
やはは、ブタ猫って呼び名がピッタリ！ ねえねえ、このブタ猫、
ミューちゃんのお友達？」

警戒心のカケラもなく、中腰になってまっすぐガンマへと手を伸
ばす姉ちゃん。

うあ、救世主だなんて思ったほうがバカだったかも。

キラリン！ ガンマの目が鋭く光る。

その姿が 消えた！

いや、素早く姉ちゃんの背後に回ったのだ！

ガンマが両腕を姉ちゃんの腰から前に回し、ガシッと抱えると、
そのまま持ち上げ、勢いに任せてエビ反りの体勢で背後の地面にた
たきつける。

いわゆる、バックドロップというやつだ。

背の高さの違いなんてお構いなしに、姉ちゃんは綺麗な弧を描く。
そして。

ドオーーーーーン！

そのまま激しく後頭部からむき出しの地面に叩きつけられる羽浮
姉ちゃん。

やっぱり、女性相手でも容赦がない。

あゝ……。これはダメだな……。

ぼくは冷静に、そう思った。

でも、姉ちゃんは、

「なにするのよ、このブタ猫！ 思いっきり腰を触られたわ！ 許
さないからね、このセクハラ猫！」

と、なにごともしなかったかのように立ち上がると、なんだかずれ
た方向に怒りを爆発させていた。

というか、頭のほうは大丈夫だったの？

……そいえば姉ちゃん、すっごい石頭だっけ。

これはもう、石頭を通り越して、鉄頭と呼ぶべきなのかも……。

ぼくのほうも、ちょっとずれた思考を巡らせる。

……心外ながら、ぼくたちは紛れもなく、血のつながった姉弟の
ようだ。

それはともかく。

怒りをあらわにしている羽浮姉ちゃんに、ツッコミの音がふたつ
ほど。

「相手は猫だし、触られたってべつにいいじゃない」

最初のツツコミはいちごだった。

受身には失敗してまだ少し表情は歪んでいたものの、痛みには慣れているのか、いつもの彼女の役割とも言うべきツツコミは忘れないうつだ。

とはいえ、いくら見た目は猫でも、こっちの世界に来ると猫の姿になるだけで中身は魔界の住人だと考えると、気にするなというのも無理な話なのかもしれない。

そしてふたつめのツツコミは、ガンマから入れられた。

「そんな、色気のカケラもねえ体のくせに」

……的確なツツコミだと思った。

でも、齒に衣を着せず的確なことを言ってしまうのは、時として死を招く。

「ぬわんですつてえ~~~~!!?」

虚ろな目を光らせた姉ちゃんが、ガンマにつかみかかる。

ただ、やつぱり力の差は歴然。あっさりとまた投げ飛ばされた羽浮姉ちゃんだったのだけど。

「く~~~~、このブタ猫！ かくなる上は~~~~!!」

サツ！ ポケットから素早く取り出された物体。

奇妙な形をしたやわらかい容器の先端につけられたキャップをはずし、その先端をガンマへと向ける。

さすがに力の差があったからか、どうにか姉ちゃんの魔の手から逃れたガンマも、目が見えずにふらふらとした足取りではあったものの、シグマの去っていったほうにドタドタと足音を響かせつつ逃げ帰っていった。

次の日の昼休み。

ぼくたちはチャイムが鳴ると同時に、ミューちゃんのもとに集まっていた。

昨日の一件があったあと、ぼくたちは職員室に残っていた雪菜先生と話をした。

心配だからなるべくミューちゃんのそばにいてあげたい。そのために、昼休みは給食を食べず、すぐにウサギ小屋の横に向かうことを許可してもらいたかったからだ。

雪菜先生はぼくたちの話を真剣に聞いてくれた。

そしてぼくたちの申し出を許可してくれた。

というわけで、昼休みになったばかりのこの時間に、ぼくたちはミューちゃんの目の前にいる。

給食を食べずに来たぼくたち。昼食は抜きなのか、というと、実はそうではない。

「ふっふっふっ、任せといてっ！ わたしがみんなの分のお弁当を作って持ってくるよっ！」

昨日の帰り際、こぶしを振り上げ、夢ちゃんがそう叫んだ。なんだかちよっと、鼻息を荒くしながら。

「……夢お姉ちゃんは、料理が大好き……」

いつもながらの控えめな声で、希望くんが解説を加えてくれた。

「はっはっは！ それはありがたいな！」
「それに、女の子の手料理が食べられるなんて、嬉しいよねえ〜」
(ふぁさっ)

拳志郎と将流が喜びの声を上げる。

将流のほうは、ちらちらとみるくちゃんに視線を送りながら。

きつと、みるくちゃんの手料理も食べたい、とか思っているのだろっ。

もっとも、みるくちゃんのほうは、将流の視線にまったく気づく様子もないのだけど。

「でも、夢、ほんとに大丈夫？ ……ごめん、失礼だけど、変な味つけとかにしない？」

「むっ、いちごはひどいなっ！ わたしはこれでも、調理レベル9だよっ！？」

いちごからのツッコミに、なにやらおかしな受け答えをする夢ちゃん。

「……某ゲーム内の料理スキルのこと……」

再びの希望くんの解説に、ぼくは一抹の不安を覚える。

「……でも、腕は確か。安心していいよ……」

小さい声ながらも心強い希望くんの言葉によって、それなら大丈夫だろうと、みんな、夢ちゃんにお弁当を任せることにしたのだ。

「じゃ～～～～んっ！ 見て見てっ！ この豪華絢爛さをつっ！」
『うおおおお～～～～～～！』

自信満々の夢ちゃんが取り出したお弁当を見て、ぼくたちは歓喜の声を響かせる。

何重にも重ねられた重箱の中には、本当に綺麗で、お店で売ったとしても即完売しそうなほどの料理の数々が並べられていた。

唐揚げ、ハンバーグ、スパゲッティ、厚焼き玉子、ほうれん草のおひたし、煮物、おにぎり、サンドイッチ、果ては桜も散り終えた春だというのになぜか、おせち料理まで。
ありとあらゆる料理が、重箱を彩っていた。

様々な料理をごちゃ混ぜにしすぎではあるけど、それにしたってこれはすごい。

夢ちゃんが自信満々になるのも頷ける。

「うわ～、これ全部夢ちゃんが？ 時間かかったでしょ？」
「うんっ！ ちょっと早起きしたから、実は今結構眠いんだけどねっ！」

ぼくの問いかけに、夢ちゃんは軽く目をこすりながら答える。いつも元気いっぱいな彼女だけど、確かにちょっと眠そうだ。
でも、頑張ってくれたんだもんね。感謝しなきゃ。

「そっか～、ありがとね。夢ちゃんって、意外に料理上手なんだね

「えへへ〜っ。…って、意外につ!? ちょっとショックだわっ!」

よかれと思って続けた褒め言葉のつもりだったけど、どうやら逆効果だったようだ。

う〜ん、ぼくってダメだなあ。

とはいえ、ショックと言いつつも、夢ちゃんは笑顔だった。

「ただ、取り合わせが異常だわ、こりゃ」

「があ〜〜〜んっ! ショックパート2っ!」

さらに続けられたいちごのツツコミに、二度目のショックを受ける夢ちゃん。

もちろんそれでも、笑顔は絶えなかった。

和気あいあいとした、お弁当風景。

ぼくは割り箸を受け取って、みんなと一緒に、夢ちゃんの作ってくれたお弁当に手を伸ばす。

昨日ガンマに投げ飛ばされたとき、ぼくは右ひじを打ちつけられた。

骨折まではしてないと思うけどまだ痛みが残っていて、授業中もシャープペンを上手く持てず、ノートを書くのにも四苦八苦していた。

だからもちろん、箸だって上手く操れる状態ではない。

厚焼き玉子をつかもつとして重箱の中に落とし、というのを何度か繰り返しながらも、ぼくはどうにか持ち上げてそれを口に運ぶ。

うん、美味しい!

と、それをじっと見ている視線に、ぼくは気づいた。

「……降人さん、腕を痛めてるから、お箸を持つのも大変そう……」
不意に、希望くんがそうつぶやいた。

それを聞いた南ちゃんは、パチンと両手を合わせながら、嬉しそうにこう言った。

「そうですねえ……。あつ！ それなら、夢さんが食べさせてあげたら、いいんじゃないでしょうか？」

「えっ？ えっ？ で……。でもっ、それはちょっと、恥ずかしいよっ……！」

「そうだよ、それに、そこまですてもらうなんて、さすがに悪いし……」

真っ赤になって恥ずかしがっている夢ちゃんと、同じく微かに赤くなりながら遠慮の声をもらすべく。

「でもさあ降人くん、キミは箸もまともに使えていないだろう？ どうするんだい？ そのまま昼休みが終わるまで頑張っても、玉子焼きを数切れ食べるのがやっとじゃないのかい？ べつにボクとしては、それでも構わないけどさ」（ふあさつ）

「ちよつと、ダメよそんなの！ 今日だって昨日みたいにシグマたちが襲いかかってくるかもしれないんだから！ みんなちゃんと食べて力を蓄えておいてもらわないと！」

「はっはっは！ だったらおれが、食べさせてやろうか？」

「い……。いや、それはちよつと……」

「わたしはあく、それもちよつと、見てみたいかもあ？」

「こらみるく、あんたは黙ってなさい！」

勝手なことを口走り始めるみんなではあったけど、ちゃんと食へて力を蓄えておかないといけないのは確かだろう。
ちらり。

夢ちゃんと微かに視線を合わせる。

「わ……わかったわっ！ 死ぬ気で頑張るっ！」

夢ちゃんはこぶしを握りしめて、そう気合いの声を上げた。

「そ……そこまで嫌なの……？」

「いや、あの、そうじゃ、なくてっ！ その、あの、だって、ほらっ！ えっと……」

ちょっと悲しくなって放ったぼくの弱々しいボヤキ声に、夢ちゃんは真っ赤になりながら、なにやらわけのわからない言葉を連発するのだった。

「はい、あ〜んっ！」

「あ〜ん」

ぱくっ。もぐもぐもぐ。

「どっつ？ 降人くん、美味しいっ？」

「うん、美味しいよ！」

「よかったあ〜っ！」

夢ちゃんが、ぱーっと明るい笑顔を咲かせる。

と同時に、周りからはなんだか生温かい視線を感じる……。夢ちゃんもさっきから、ずっと顔を真っ赤にしているし。

お弁当を美味しいって言ってもらったのが、そんなに嬉しいのかな？

そう考えているぼくを、希望くんがじっと見つめていることに気づいた。

「……お姉ちゃん、前途多難……」

そのつぶやきの意味は、ぼくにはよくわからなかった。

昼休みには結局、なにもおかしなことは起こらなかった。
つまりシグマがリベンジに来ることはなかったのだ。

でも、その放課後、やっぱりヤツは現れた。
昨日とはまた別の、一匹の猫を伴って。

「ワタシは猫ではないですよん。愚民ども、間違えるではないですよん！」

ガンマとは違って、ひよる長いという印象の猫。
いや、本人いわく、猫ではないらしいけど。

こうして言葉を喋っているわけだし、ガンマと同様、魔界の住人
なのだろう。

けどどうしても、笑ってしまふ。
だって、語尾が「にゃん」だし……。

「な……なにがおかしいのですかにゃん!? もう頭に来ましたに
ゃん! ワタシの力を、とくと味わうがいいでございますにゃん！」

ピューーーーーーッ!

器用に肉球ぷにぷにの右手を口に当て、指笛を鳴らすひよる長い
猫……いや、猫もどき。

「……それはもっと、失礼な呼び方じゃないか? ま、いいがな。
こいつはデルタ。魔界催眠術トーナメント、通称MST^{マスター}のチャンピ
オンだ! ガンマのような筋肉バカとは、ひと味違っぜ?」

「きゃっ！ 引つかかれた！」

「大丈夫か？ 血が出てるじゃないか！ ……うおっ！？」

「バカね！ 人の心配してないで、自分のことを考えなさい！」

いちごと拳志郎が交わす言葉が聞こえてきた。

でも、視線を向けているような余裕もない。ぼくだって、猫たちの攻撃を避けるのに精いっぱいなのだ。

と、そんな猫たちのうちの一匹が、夢ちゃんのほうへと向きを変えて飛びかかる。

無類の猫好きの彼女は、こんな状態だというのに、

「ニャンコがぶにぶに肉球パンチで戦ってるっ！ か…可愛いわっっ！」

と言いながら無防備に立ち、ケータイのカメラで猫たちの勇姿を写真に収めていた。

そんな彼女に向かって、恰好の標的を見つけた！ とでも言わんばかりの勢いで、鋭い爪を立てて襲いかかる猫の姿が目映る。

「夢ちゃん、危ない！」

ぼくは思わず叫んでいた。

でも、彼女を助けることまではできない。距離が、遠すぎたのだ。

だけど、そんな夢ちゃんと飛びかかってくる猫のあいだに、さらに別の影が割り込む。

「じゃあ〜！」

それは、トラ縞の猫だった。
いきなり仲間である猫が割り込んできたからか、飛びかかっていったほうの猫もびっくりして飛び退く。

「にゃ〜、にゃ〜！」

チリンチリン。

トラ縞の猫のほうは、しきりに夢ちゃんの足にすり寄って、甘えた鳴き声を上げながら頬をこすりつけていた。

頬をこすりつけるたびに、尻尾にリボンで巻きつけてある鈴が、チリンチリンと音を鳴らす。

飛びかかってきていた猫は、どうしようか迷ってはいたものの、すぐに標的を変えることにしたようだ。今度は拳志郎のほうへと襲いかかっていった。

……まあ、拳志郎なら大丈夫だろう。たとえ瀕死の重傷を負っても、誰も悲しんだりしないし。

「こ……こら、降人！　なんか失礼なこと考えてないか？　って、うわっ、やめろ、この猫！　あっち行け！　しっ、しっ！」

拳志郎から文句が飛んできたけど、すぐにそれどころではなくなっていた。

それはともかく、今は夢ちゃんだ。

「夢ちゃん！　写真は諦めて、今は身を守ることを優先してよ！」

そんなぼくの叫びにも、夢ちゃんは気づいてすらくれない。

ただ、足もとにすり寄るトラ縞の猫を、いとおしそうな視線で見

つめるのみ。

「おっと、そうかつ！ キミはこれが欲しいんだねっ！」

夢ちゃんがポケットからなにかを取り出す。それは、ニボシだった。

「にゃ~~~~~！」

チリリン。

トラ縞の猫は、すぐさまそのニボシに飛びつき、鈴を鳴らしながら美味しそうにかじり始めた。

……夢ちゃんって、いつもニボシを持ち歩いているのだろうか……。

「えっ？ あたりまえだよっ！ いつでもどこでも、ニヤンコと仲よくっ！ それが猫好きとしての使命なのよっ！」

「おゝ、そう言われればそうだね！ ぼくも今度から、持ち歩くようにするよー！」

なぜか妙に納得する、同じく猫が大好きなぼくだった。

「おやおや、一匹ほど、催眠のかけり方が弱かった猫がいるみたいですよ。ま、それくらい、構わないですよ」

デルタが一瞬だけ目を見開いていたけど、すぐに余裕の口ぶりで

吐き捨てる。

確かに、数十匹のうちの一匹が支配下から抜け出したとしても、デルタにとってはとくに痛手ではないだろう。

でも、その余裕が命取りだった。

夢ちゃんの猫好き度を、甘く見てはいけない、ということだ。

ニボシをもらったトラ縞の猫は、にゃくにゃくと、さらなるエサを要求するように、夢ちゃんにすがりつく。

「にゃははっ！ さすがに、鼻がいいねっ！ よし、全部持ってけっ！」

夢ちゃんは制服のおなかの中から、ニボシがたくさん入った袋を取り出すと、それをトラ縞の猫に投げ渡す。

トラ縞の猫は、それを口で見事にキャッチ。

袋の上側は、すでに封が開いていた。最初にあげたニボシも、そこから取り出して、ポケットに入れておいたのだろう。

「というか夢ちゃん！ キミはいつも、制服の下にそんなのを隠してるの！？」

「えっ？ これも、あたりまえのことだよっ！ それが猫好きとしての使命なのよっ！」

「おおっ！ 夢ちゃん、ぼくはキミを尊敬するよ！ いや、勉強になるなあ！」

ぼくと夢ちゃんの会話に、なんだか他のみんなが、微妙に冷やかな視線を向けているような気がしたけど。

今はそんなことを気にしている場合じゃない。

夢ちゃんからニボシを袋ごと受け取ったトラ縞の猫は、口を上手

悔しげなうめき声を上げ、シグマも素早くきびすを返すと、その
まま裏門のほうへと逃げ去っていくのだった。

翌日は土曜日。学校は休みだった。

とはいええ、もちろんぼくたちは学校に行く。

それが肉球防衛隊としての務めなのだ。

「眠う〜……。わたしはあとから行く、ってのじゃダメかなあ〜？」

「ダメだよ！ 羽浮姉ちゃんは隊長でしょ!？」

「うう〜、でも眠いのさ〜」

なにやらダメダメな朝が弱い羽浮姉ちゃんを引きずりつつ、ぼくは小走りで小学校へと向かう。

二度あることは三度ある。

今日もまたシグマがミューちゃんを襲撃に来る可能性は高い。

高いというよりも、おそらく確実だろう。

そう考えられるわけだから、一刻も早くミューちゃんのもとに駆けつける必要があった。

ぼくたちが学校に着くと、ちょうど夢ちゃんと希望くんの姉弟といちごとみるくちゃんの双子姉妹も到着したところだった。

校門の前で挨拶を交わしているあいだに、拳志郎と南ちゃん、そして将流も到着。

肉球防衛隊メンバー勢揃いだ。

「って、こんなところで無駄話してる時間はないっての！ 早くミューちゃんのもとに行くわよ!」

いちこの声にぼくたちは頷くと、中庭を抜けて、ミューちゃんの

待つウサギ小屋の横へと向かった。

そこには、二匹の猫がいた。

そう、二匹。

シグマと、ミューちゃんだ。

「シグマ。今日は仲間の姿が見えないようだけど？」

ミューちゃんが凜とした声をぶつける。

もちろん対するシグマに、怯む様子なんてまったくない。

「ミュー姉、最後の決着だ。仲間に任せていても、埒が明かないからな。オレ様自らが、ミュー姉をねじ伏せてやる！」

余裕のセリフを吐くシグマではあったけど、その頬にはひと筋の汗が流れていた。

「へえ〜。あんたがわたくしをねじ伏せる？ いい度胸ね。あんた今まで、わたくしに勝てたことなんて、一度もないくせに」

「それはミュー姉が一応女だからさ。いくら女性優位な社会になっているとはいえ、物理的な力では男のほうが上なんだからな。いつだって打ち負かして従わせることができるんだぜ？ だがそうしないのは、オレ様たち男のほうが理性を持っていることの証さ」

「ふん。負け犬の遠吠えね」

「なんとでも言え。ともかく今日は一対一だ！ タイマンで勝負し

る！」

「ふふっ、いいでしょう。望むところよ！」

駆けつけたぼくたちは、完全に蚊帳の外。ふたりの話は、口を挟むこともできずに進んでいく。

いや、ミューちゃんはしっかりと、ぼくたちの存在に気づいていたようだ。

「……というわけだから。みんな、手出しは無用よ！」

ぼくたちのほうに視線を向け、そう言い放つミューちゃん。

「うわわっ！ ミューちゃんカッコいいっ！」

夢ちゃんは歓喜の声を上げていたけど。

「でも、シグマは今まで散々、仲間とか動物とかを使って負け続けているじゃん。それなのに、今さらタイムマン勝負で決着をつけるなんて、さすがに勝手すぎるんじゃないかな？」

ぼくのツッコミに、ミューちゃんは反論を返してくる。

「いいのよ、降人くん。今までだって、わたくしはあなたたちがいたから勝てただけ。それに、シグマ自身には指一本たりとも触れていない。つまりは、勝負すらしていないのと同じなのよ」

「そういうことだ。それともこの世界の人間は、本人同士が納得しているタイムマン勝負に手を出さなくて、そんな野暮な真似をするような人種なのか？」

「う……」

ミューちゃんとシグマから続けざまにそう言われたら、ぼくたちにはもう、止める手立てはない。

ポン。

ぼくの肩を、拳志郎が叩く。

「おれたちは黙って見守ろう」

「……………うん」

その言葉に、ぼくは素直に頷くしかなかった。

「それじゃ、行くぜ！」

「ふふっ、かかってきなさい！」

ミューちゃんとシグマは、すつと右腕を伸ばす。

「おおっ！」

観衆と化しているぼくたちから、どよめきが沸き起こる。

伸ばした手の先が光ったと思ったら、次の瞬間には武器が握られていたのだ。

猫の姿をしてはいるけど、さすがに魔界のプリンセスとプリンスだけのことはある、といったところか。

空気中のエネルギーを集め具現化したとか、そういった原理なのだろう。

でも。

「にやはははっ！　なんか、楽しそうっ！」

「そうねえ……。タイマンの真剣勝負、というふうには、どう考え
ても見えなくなっただわよね……」

「でもおゝ。怖くなくなつて、あたちはよかったと思つのおゝ」

口々に感想をこぼすみんな。

ミューちゃんの手に握られているのは、巨大なピコピコハンマー、
そしてシグマの手に握られているのは、巨大なハリセンだった。

ミューちゃんとシグマの、武器を打ち合わせる音が鳴り響く。

ぴっぴっぴっ！

すばー！

……ピロピロハンマーとハリセンだから、なんだか緊迫感のない戦いになってるけど。

ミューちゃんを応援するほかたちも、つついイロモノ系の番組を見るようなほのぼのとした気分にも包まれてしまう。

でも、ミューちゃんもシグマも、本気だ。

おもちゃのような微妙な武器を振り回しながらも、ふたりの頬や首筋からは、はっきりと汗の雫がしたたり落ちていた。

ふたりとも、相手の攻撃を牽制する。

自分から攻撃を繰り出しつつも、攻撃こそ最大の防御なりとはいかないようで、相手の攻撃動作に怯え、大きく飛び退く。

そんな一進一退の攻防が、もう長い時間続いていた。

どちらも息が荒くなり、汗が滝のように流れている。

持っている武器のせいで、ぼくたちの目にはそんなふうには映らないけど、どうやら緊迫した戦いが続いているようだった。

ふたりの武器は、勝手な想像でしかないものの、おそらくエネルギーを凝縮して具現化させたようなものだろう。

さっきからの大げさなまでの警戒心と合わせて考えれば、その直撃を受けたら大変なことになるといえるのは、まず間違いない。

だからこそ、ふたりとも本気なのだ。

姉と弟の戦い……。

いわば、ぼくと羽浮姉ちゃんの姉弟ゲンカみたいなものだとすると、たいしたことではないようにも思える。

でも、ミューちゃんとシグマは、立場が違う。

魔界のプリンセスとプリンス。

王位継承権を賭けた、魔界全体の運命をも左右する戦いということになる。

もつとも、戦う前に言い争っていたふたりの態度だけ見れば、やっぱり単なる姉弟ゲンカに毛が生えた程度でしかなさそうではあった。

姉であるミューちゃんは、弟なんかに負ける気はない。

どちらが上でどちらが下か、それをわかりやすい形で思い知らせる、ひとつのパフォーマンスのようなもの。

ぼくと姉ちゃんの場合のケンカだったら、そういう感じになるだろう。

実際ぼくは、姉ちゃんには敵わない。

もちろん姉ちゃんが女性だから遠慮している、というわけではなく、本気でやり合ったあげく、徹底的に叩きのめされる。

将来、大人になったら変わってくるかもしれないけど、ぼくたちくらいの年代だと、兄弟姉妹というのは基本的に上下関係だ。

ミューちゃんたちが人間年齢に換算してどれくらいなのかはわからないけど、ぼくたちとそう大差ないくらいだと思う。

とくにあのシグマというミューちゃんの弟を見ている限り、そう

としか考えられない。

それなのに。

ふたりの目は、真剣だ。

ついつい危険はないと錯角してしまうけど、これは本気の戦いなのだ。

ぴこぴこびりっ！

すばー！ーん！

うーん……。でもやっぱり、イロモノ的なお遊びの戦いにしか見えない……。

ぼくがそんなふうにならないうちで葛藤しているあいだも、ふたりの戦いは続いていた。

と、

「きゃっ！？」

シグマの攻撃を避けて着地したミューちゃんの足もとに、細い木の枝が転がっていた。

パキッ。

乾いた音を立てて、木の枝が折れる。

ただ、着地点に地面以外のなにかがあると予想していなかったミューちゃんは、突然襲いかかった足もとの異変に、思わずバランスを崩してしまう。

「チャンス！」

もちろん、その隙を見逃すシグマではなかった。

ザッ！

体勢を低くして、シグマはミューちゃんの目の前に飛び出す。そして、素早く足払い。

バランスを崩していたところへ、さらなる攻撃を受けたミューちゃんのひざが、ガクツと抜ける。

どうにか手をついて倒れることだけは免れたものの、片ひざを着く格好になったミューちゃん。

その目の前には、ハリセンを高々と掲げたシグマが立ちはだかっていた。

「ミューちゃん、危ない！」

「ミュー姉、これで、終わりだ！」

ぼくの声と、シグマの声と、そして振り下ろされるハリセンが空気を切り裂く音が、同時に鳴り響いた。

バシンッ！

ハリセンは、容赦なく打ちつけられた。

……ただし、むき出しの地面に。

「くっ、外したか！」

「……ふふっ。バカね。あなたが今のわたくしに敵うはずはないのよ」

焦りの声をもらすシグマに、ミューちゃんは余裕の表情でそう言い放つ。

片ひざをつきながらも、反対側の足でどうにか飛び退いたようだが、でも、危険な状態にあることは変わりない。

それなのに、ミューちゃんの顔には笑みすら浮かんでいた。

「どういうことだ!？」

「ふふっ。ひとりで乗り込んできた今のあなたに、仲間はいないわ。でも、わたくしにはみんながいる」

「……だからどうした？ 手出しは無用だと言ったはずだぜ？ もし手出したなら、タイムン勝負においては無効試合となる。それは、今さら言うまでもないだろう?？」

肩で息をしながらも、少しは落ち着いてきたらしく、シグマは冷静な声に戻ってミューちゃんに反論する。

それでも、ミューちゃんが怯むことはなかった。

「バカね……。仲間ってというのは、そこにいてくれるだけで心強いものなのよ!！」

叫びながら、ミューちゃんは飛ぶ。

「頑張れ~~~~~っ!！」

ぼくたち、肉球防衛隊の仲間たちからの声援を、追い風のごとくその背中に受けながら。

その勢いは、シグマの表情を歪ませるのに充分なほどだった。

「チェックメイト!！」

そしてミューちゃんのピコハンマーが、シグマの頭へと振り下ろされる。

「くっ……！」

思わず目をつぶってしまったシグマ。

衝撃は なかった。

「そして仲間からの声援は、勇気とパワーを与えてくれる。……ふふっ、わたくしの勝ちね」

ピコピコハンマーは、シグマの頭にぶつかる直前で、寸止めされていた。

へなへなへな……。

全身からすべての力が抜けたのか、シグマはその場へたり込む。

「へっ……。相変わらずミュー姉は甘いな」

「ふふっ。いくらわたくしだって、相手を殺してまで勝とうなんて思わないわ」

勝ち誇ったミューちゃん言葉にも、反論するつもりは、もうなくなっていたようだ。

「だが、オレ様の負けはくつがえしようがねえ。素直に負けは認めろわ」

シグマは苦い顔でそう吐き捨てた。

「所詮あなたは、わたくしの弟なのよ。いつまでも、ね」

完全に上下関係は成立しているということだろう。なおも上から目線の言葉を放つミューちゃんだったのだけど。

「ああ、そうだな……。でもな、ミュー姉。安心してもらえないぜ？ なんとって、オレ様が敗れても、オメガが控えてるんだからな」

「な……。なんですって……。!?」

シグマが放った言葉に、みるみると顔が青ざめていく。

「じゃあな。ま、せいぜい頑張ることだ」

ボロボロになった体を引きずりながらトボトボと去っていくシグマを、ミューちゃんはただ黙って見送るだけだった。

「……なによ、まだ親玉がいるっていうの!？」

「そうみたいだねえ。ま、あのシグマってやつじゃ、ラスボスの器じゃないとは思っていたけどさ」(ふあさっ)

「それじゃあ、わたしたちはまだ、ミューちゃんを守るために頑張らないといけないのねっ！ うふふふ、燃えてきたわっ！」

「はっはっは！ ま、それがおれたちの務めだ！ ミューちゃんも、ドーンと任せてくれよな！」

肉球防衛隊の面々は、わざとらしいほど明るく決意の声を叫ぶ。でも、ミューちゃんは黙ったままだ。

「……ねえ、ミユーちゃん。オメガってのはいったい、どんなやつなの？」

ぼくの問いかけにも、青ざめて微かに震えたミユーちゃんは、なにも答えてくれなかった。

次の日は、日曜日。

もちろん学校は休みだけど、当然ながらぼくたちは、ミューちゃんのもとへと向かうことになる。

まずは朝食をしっかりと食べて、臨戦態勢を整えないと。

休みだというのに、お母さんはしっかりと起きて、朝ごはんを作ってくれた。

ぼくと羽浮姉ちゃんが、なにやら休みの日にも出かけることが多くなっているのを、ちゃんとわかってくれているのだ。

テレビをつけながら、ぼくと姉ちゃんは、目玉焼きと海苔だけがおかずの朝食をたிரらげる。

と、不意にテレビのニュース番組から、アナウンサーの悲鳴が聞こえてきた。

「きゃあつ！ いったいこれは、どうしたことでしょうか！？ 大群の猫たちが、一斉に町の中を駆け抜けていきます！」

ぼくも姉ちゃんも、思わずテレビに釘づけとなる。

テレビ画面には、たくさんの猫たちが猛然とただただ一方向に向かって走りゆく光景が映し出されていた。

しかもそれは、今映っている一ヶ所だけで起こったことではなさそうだ。

各地の中継地点からの映像が、次々と映し出されていく。

北は北海道から、南は沖縄まで。

ありとあらゆる都市で、猫が大暴走しているようだ。

おそらくは、都市部だけではないだろう。
日本だけで起こっていることなのかすら、わからない。
もしかしたら世界各国で、同じような現象が発生しているのかも
しれない。

「あーやだ〜。怖いわねえ〜」

お母さんが、どう考えてもあまり怖がっていないような声をもら
す。

大量の猫が押し寄せる。それは動物が苦手なお母さんにとって、
耐え難い状況のはずだ。

それなのにこんな、のほほんとした感じなのは、べつに怖がって
いないというわけではなく、単にそういう人だからだろう。

と、この際、お母さんについては、どうでもいいか。

ともかく今は、猫たちの大暴走のほうが問題だ。
少なくとも日本中の猫が、暴走している。

先日シグマが連れてきたデルタは、催眠術で数十匹の猫を操って
いた。

またシグマがデルタを引き連れて懲りずに戦いを挑むつもりなの
だろうか？

でも、シグマは昨日、負けを認めて帰っていった。
それなのにまた来るようだ、さすがに頭のネジが外れていると
しか思えない。

仮にもミューちゃんの弟なら、そこまでバカじゃないだろう。…

…断言はできないけど。

シグマが昨日話していた、彼らの親玉であろうオメガ。そいつがシグマの敗北を察知して、自らこの世界に出てきた。おそらく、そうに違いない。

そしてそのオメガが、猫たちを大暴走させているのだろう。

これだけたくさんの猫に影響を与えていることから考えると、同じように猫を操っていたデルタの何倍、何十倍、いや、下手をするとは何百倍もの力を持っているのかもしれない。

心してかからないと、ぼくたちの命だって危ない。

「降人！」

「うん、行こう！」

それでも、ぼくたちは行かなくてはならない。

だってぼくたちは、ミューちゃんを守ると約束した、肉球防衛隊なのだから。

姉ちゃんの呼びかけに応え、ぼくは家を飛び出した。

小学校の前には、すでにみんなが集まっていた。

「来た来た！ 遅いわよ！」

いちごからの文句が飛ぶ。

「どうやら、大変なことになっているようね」

「夢ちゃんに抱え上げられたミューちゃんがつぶやいた。

いつもの場所に隠れているより、みんなと一緒にいるほうがいい。そう考えたのだろう。」

そして彼女の隣には、雪菜先生も立っていた。

「あ……あなたたち、大丈夫!？」

「雪菜先生!」

このあいだ、ぼくたちはミューちゃんが危険な目に遭っていることを、雪菜先生に話した。だからずっと、心配していたのだという。ニユースを見た先生は、胸騒ぎがして学校まで様子を見に来てくれたらしい。

と、突然辺りに響き渡る、地響きのような音。

「……来たぞっ!」

拳志郎が大声を轟かせると同時に、ぼくたちの足もとが、やわらかい物体にすり替わる。

いや、大群の猫たちがぼくたちの足もとをすくい、その流れの上にはぼくたちは乗せられたのだ!

抜け出そうとするものの、上下に激しく動く猫たちの背中の上では成すすべがなかった。

ぼくたち肉球防衛隊のメンバーとミューちゃんとそして雪菜先生。総勢十一名が、猫の波に乗せられて流されてゆく。

やがて階段になっている場所を登り、ぼくたちが運ばれた先。

猫をかたどった像が建てられているその場所は、猫の神様が祀られているという猫宮神社。通称ニヤンコ神社だった。

「ふおっふおっふお、よおく来たのお〜。おっと、無理矢理連れてきたのは、わらわじゃったの。ふおーっふおっふお！」

気づくとぼくたちの目の前には、なにやら頭に来る笑い声を響かせる、かなりデブった灰色の猫が、舂だというのに分厚い毛皮のコートに身を包みながらたたずんでいた。

猫の顔なんて、ぼくたちにはあまり見分けがつかないけど、それでも明らかに、かなりのおばちゃんだと思える雰囲気。

もし人間だったら、絶対にケバケバな厚化粧で、見るからに不気味さをもし出しているような、そんな印象だった。

……実際には魔界の住人なのだろうし、こっちの世界に来ると猫の姿になってしまうだけだというのなら、魔界にいるときには完璧にケバいおばちゃんなのかもしれない。

それはともかく、さっきの言葉を考えると、たくさん猫たちを操ってぼくたちをここまで連れてきたのは、このおばちゃん猫だということになる。

そうすると、相当な力の持ち主。

すなわち、このおばちゃん猫こそが。

「ふおっふおっふお！ そう、わらわがオメガじゃ！」

ぼくの思考を読んだのか、おばちゃん猫が名乗りを上げる。

身構えるぼくたち。

これだけの人数を前にしても、まったく怯む様子のないオメガ。

もつとも、無数の猫たちをオメガが操っていると考えれば、人数的に劣っているのはむしろ、こちらのほうということになるわけだ
けど。

ただ、人数の問題だけではなく、あのオメガの力は、明らかに強い。

普通の小学生でしかないほくでさえも、それは肌で感じられた。

「あ……あなたが、各地の猫を操っているんですか!？」

雪菜先生が、若干震え気味ではあったものの、どうにか声を上げる。

今この場にいる中で一番の年長者であり、教育者でもある雪菜先生。

適当な感じが多々あるとはいえ、教師の端くれ。

教え子たちを守るために、自分のほうに注意を向ける、という意味合いもあったのだろう。

「ふおつふおつふお、そうじゃ。こちらの世界に来て、力の加減がわからなかったのな。軽いデモンストレーションというやつじゃ
の」

デモンストレーションで、日本各地、もしかしたら世界各地の猫を操っていた!？」

いったい、どれだけ強大な力を秘めているというのだ、このオメガという不細工な顔のケバいおばちゃん猫は。

「ふおつふおつふお、そちらのガキンちよから、とつても失礼な思考を感じ取ったのじゃが、さて、どうしてくれようかのお?」

あつ、しまった！

さつきもぼくの思考を読んだみたいだったのだから、下手なことは考えられないと、心に留めておくべきだった。

もちろん、オメガの言うガキンちゃんというのは、ぼくのことだ。

じわり。

一步、オメガがぼくに近づく。

「待ちなさい！ 用があるのは、わたくしでしょう？ 降人くんたちは関係ないわ！ 手を出さないで！」

ミューちゃんが叫ぶ。

おそらくそれを、予測していたのだろう。

満足そうな笑みを浮かべながら、オメガはミューちゃんのほうに向き直る。

「ふおっふおっふお。よう言った。やはり、そうでなくてはの。ならば、邪魔の入らないように、力を解放させてもらっぞよ！ ふおあつたあ〜！」

ブワッ！

オメガが奇妙な雄叫びを上げると同時に、辺りの空気が熱を運び、一斉に上空へと舞い上がるように感じた。

いや、温度が上がったことにより、上昇気流が発生したのだ。でもそれは、単なる力の余波でしかなかった。

「うわっ！？」

「な……なによ、これ！？」

「わわわ、動けないよっ！？」

必死に体を動かそうとするものの、指一本動きはしない。

そう、ぼくたち肉球防衛隊のメンバーと雪菜先生の、人間部隊は全員、オメガの力によって動きを封じられてしまったのだ！

ただ口だけは動くようで、声を出すことはできた。

「ふおっふおっふお、あえて言葉だけは封じないでおいてやったのじゃ」

再びぼくの思考を読んだのか、オメガはそう言い放つ。

「シグマから報告は受けておったからの。……仲間はそこにいてくれるだけで心強い？ 仲間からの声援は、勇気とパワーを与えてくれる？ ふおっふおっふお、笑わせてくれるではないか！」

オメガはゆつくりと、ミューちゃんに歩み寄る。

その威圧感は、想像を絶するものだった。

さつきは意を決してオメガに言葉を向けたであろうミューちゃんですえも、近寄ってくるどす黒い力の奔流に吞まれ、へびに睨まれたカエルのように身動きが取れない。

オメガは高圧的な態度を崩さないまま、ミューちゃんに向かってこう言い放った。

「絶対的な力の前では、仲間からの声援なんぞ無意味だということ、このわらわが思い知らせてくれるわ！」

「まさか、こつちの世界でここまでの力が出せるなんて……！」
「ふおっふおっふお！ この世界にいる以上、おぬしはどうせたいした力はおせまい。じゃが、わらわは違うのじゃ。備えあれば憂いなしというやつじゃな」

ミューちゃんとオメガは、互いに構え、じわりじわりと間合いを詰め始める。

と。

「にゃ~~~~~！」

辺りを取り囲むように並び、今までのやり取りを黙って見ていた猫たちが、一斉に動いた。

ターゲットは ミューちゃん！

オメガが、猫たちを操って飛びかからせたのだ！

「な……、卑怯だぞ！」

「ふっ、なんとでも言っがよいわ。要は勝てばよいのじゃ！」

ぼくの叫び声にも涼しい顔でそう答えるオメガ。

向こうはミューちゃんの仲間であるぼくたちの動きを封じておいて、自分は手下の猫たちを使って攻撃させるなんて！

「ふおっふおっふお、わらわにとって、この世界の猫はいわば忠実なるしもべ。じゃからこそ、わらわたち魔界の住人がこちらの世界に来ると、猫の姿を取るようになるのじゃからの。精神的な根源が一致しておるのじゃ」

オメガがごたくを並べているあいだにも、猫たちは次々とミューちゃんに襲いかかる。

しなやかな身のこなしで、四方八方から迫り来る猫を華麗に避け
ているミューちゃんではあったけど。

あまりにも相手の数が多すぎる。

いつまでもつかは、わからない。

ぼくたちが守ると誓ったミューちゃんが今、目の前で危険にさら
されている。

にもかかわらず、ぼくたちには成すすべもないなんて。

身動きすら取れないわけだから、いくら助けたいと念じたところ
で、どうにもならなかった。

もう、諦めるしかないのか……？

ぼく以外の肉球防衛隊のメンバーも、苦い表情をしながらも諦め
きっているのか、ミューちゃんへの声援すら止めてしまっていた。

「ふおっふおっふお！ 今はこうしておぬしらの動きを封じるだけ
しかできぬが、わらわの真の目的まで、もうあと一歩というところ
まで来ておるのじゃ！」

ミューちゃんへの攻撃は、猫たちに任せていれば問題ない。

そう考えているのか、余裕の笑みを浮かべたオメガは、聞いても
いないのに語り始める。

「これが世に言う、冥土の土産ってやつなのねっ！？ 貴重な体験
だわっ！」

夢ちゃんがなぜかちょっと嬉しそうに叫ぶ。

瞳もキラキラと輝いてるし……。

こんな絶体絶命の状態だというのに、夢ちゃんはいつもとどおり、マイペースだ。

いや、そのほうがいいのかもしれない。

「わらわの真の目的は、猫たちの支配だけなどといった、みみっちいものではない。人間どもを含めたすべての生けとし生けるもの上に立つ、真の意味での支配者になることなのじゃ！ ふおーっふおっふおっふおっ！」

オメガのいやらしい笑い声が響く。

そんな中、ぼくは微かに動くだけのこぶしを固く握り、オメガを睨んでいた。

沈んで諦めきってしまったら、その時点ですべてが終わってしまったら……。

未来がどうなるかは、誰にもわからないのだ。

こんなケバいおばちゃん猫なんか、世界を支配されてたまるものか！

ミューちゃんは、ぼくたちが守る！

そう誓い合っただんだ！ その決意に嘘はない！

勝手に諦めて、オメガの支配を受け入れてしまったら、ミューちゃんを見捨てることになる。

そしてミューちゃんを見捨ててしまったら、魔界の王位継承権はシグマに移ってしまうだろう。

ミューちゃんの弟だというのにカリスマ性のかけらもない、あの

シグマが魔界で最高の地位に納まり、なおかつ、こんなにケバいお
ばちゃん猫が、人間や動物たちを支配するなんて。

地獄以外のなにものでもない。

諦めた時点で、そんな未来へと向かって、歯車が動き出してしま
う。

諦めたら、負けなのだ！

「そんなことは、させない！ ぼくたちは、そしてミューちゃんは、
絶対に負けない！」

ぼくは、今まで出したことのないほどの大声で、力強く言い放つ。

「そ……そうよ！ あんたなんか、支配されてたまるもんですか
！」

「ま、ぼくとしては、可愛い女の子にだったら支配されてもいいん
だけどねえ〜」（ふあさっ）

「……将流くんは黙ってなさい！ 隊長命令よ！」

「ふええ。動けなくてつらいけどお〜。でもあたちだって、肉球防
衛隊の一員だもん〜！ 絶対に、負けたりしないんだからあ〜！」

「……ぼくも、負けない……！」

「もちろん、みなみだって負けないです！ 頼りないお兄ちゃんと
一緒に、頑張ります！」

「はっはっは、頼りないだけ余計だな！」

「冥土の土産はもらっちゃったけどっ！ でも、もらっただけもらっ
て、勝っちゃうもんねっ！」

みんなも、ぼくの言葉でいつもの勢いを取り戻してくれたんだろ
う。口々に決意を叫ぶ。

「そうです！ 可愛い教え子たちには、指一本触れさせませんよ！」

普段は適當すぎる雪菜先生までもが、熱血教師のごとく、背後で炎を燃やしているように熱くなっていた。

「ふおっふおっふおっ！ 口だけは達者じゃのお。もっとも、今は口だけしか動かせないじゃろうが。ふおふおっ、苦しゅうないぞよ。たっぷりと楽しませてもらうおうかの！」

と、オメガの余裕も、ここまでしか続かなかった。

「ええ、楽しませてあげるわ！ このわたくしがね！」

ミューちゃんが、澄んだ声で高らかに宣言する。

見ればいつの間にか、ミューちゃんの周りには、倒れた猫たちが無数に横たわっていた。

「な……！？ これはいつたい、どうしたというのじゃ！？」

焦って汗をまき散らしながら、きよるきよると辺りを見回し、もともと歪んでいた顔を、さらに醜く歪ませていくオメガ。

「はっはっは！ そんなに汗をかいたら、厚化粧がはがれちまうぜ？」

「くっくっくっくっくっくっ！」

拳志郎のバカにしたような茶々に、オメガは顔を真っ赤に染めながらうなり声を上げる。

「油断させるために、わたくしは猫をひたすら避けていただけ。力

はすべて、わたくしのほうに受け継がれているんだから。もともと勝ち目なんてなかったのよ！」

そう言っつて両腕を広げるミューちゃん。

と、それに合わせて猫たちが起き上がる。

疲れて倒れた猫たちはオメガの支配が解け、ミューちゃんが新たに支配し直した。

そんなところだろうか。

「いいえ、違うわ。襲いかかってくるあいだに、すべての猫たちの支配を上書きしたの。そして、倒れたふりしてもらっていた。それだけのことよ」

ぼくの考えを、ミューちゃんが自ら訂正する。

もちろんぼくは口に出したわけではなかった。

オメガでも思考を読めたのだ。その上を行くというミューちゃんにだって、同じことくらいできるのだろう。

それにしても、あれだけたくさんいた猫たちを、しかも、オメガによって支配されている状態にあった猫たちを、いとも簡単に支配し直してしまうなんて。

ミューちゃんとオメガの力の差は、歴然としていた。

「ぐ……、なにゆえそこまで力が残っておるのじゃ!? 確かに魔界ならば、おぬしの力は最大級じゃろう。じゃが、この世界に入った時点で、力は大幅に制限されるはずじゃぞ!？」

「それはそちらも同じことでしょう? 秘伝の薬は、なにもお城の倉庫だけに眠っているってわけじゃないのよ」

「なんじゃと!？」

「泉を越えてこちらの世界に来ると、王家の力はほとんど出せない

ほど弱くなつてしまふ。それを抑える効果のある薬……。お城の倉庫にあるその秘伝の薬を使ったのよね？ でもあれは、薬ってわけじゃなかったの」

ミューちゃんが言うには、その薬は昔から魔界の各地にあったのだという。ただし、薬ではなく、飲み物として。

一般人には、その薬の効果はまったくなかったのだ。

もともと特殊な力があるのは古代王家の血筋を受け継ぐ者だけ。だからこそ、民衆を支配する立場になつたとも言える。

木の実から作られるその飲み物は、甘酸っぱくて美味しいため、嗜好品として一般にも広まっていた。

安くはないものの、それほど高級というわけでもないから、王家の人たちはまったく見向きもしていなかった。

だけど、町に出て一般人の生活を見て回り、食事を振舞つてもらつたりしたときに、ミューちゃんはそのことに気づいた。

お城の倉庫にある薬をイタズラ心で舐めてしまったことがあり、その味と一般人の飲んでいる飲み物の味が同じだつたからだ。

「シグマが使っていた薬だつてそうよ。倉庫にある秘伝の薬と言われていたけど、単なる果実酒だつたの。古くから家畜なんかを手なずけるために使われていたらしいわ。もつとも、こつちの世界の動物たちには効果が強すぎたみたいで、わたくしたちも手こずつてしまつただけ」

ふつ……。一気に語り上げたミューちゃんはひとつ、小さく息をつく。

「もうわかつたでしょう？ あなたはわたくしには勝てない。観念して魔界へ帰りなさい！」

ミユウちゃんが、勝利宣言とも言つべき凜とした声を響かせた。

刹那。

雷鳴のような空気をも切り裂く破碎音が轟く。

「きゃっ!?!」

「油断大敵だぜ、ミュー姉よ」

それは、ミューちゃんの弟　魔界のプリンス、シグマだった。
いつの間にかぼくたちの背後に迫っていたようだ。

いや、おそらくはオメガに全神経を集中させていたから気づかなかっただけなのだろう。

ともかくヤツは今、ぼくたちの後ろで勝ち誇ったように立っている。

代わりにミューちゃんの体がドサツとその場に崩れ落ちる。

「きゃあ、ミューちゃんっ!」

夢ちゃんの悲鳴がこだまする。

苦しげにどうにか頭を上げるミューちゃんではあったものの、明らかに彼女の顔は苦痛で歪んでいる。

ミューちゃんはもちろん猫の姿のままだけど、彼女の表情はしっかりとわかるようになっていた。

心が通じ合っていれば、動物の表情だってわかるのだ。

……ミューちゃんは魔界の住人なのだから、動物呼ばわりするのは失礼かもしれないけど……。

それはともかく、突然現れたシグマと、それによっていきなり倒れてしまったミューちゃん。

「いったい、どうなっているのだろう？」

「なに、簡単なことだ。ミュー姉が猫たちを支配した上から、さらにオレ様が支配の上書きをただけ……。支配の上書きをされると、力が倍になって、自分自身に跳ね返ってくるのさ」

シグマはそう言い放つ。

「……呪詛返し、みたいなもの……？」

希望くんがつぶやく。

「なんだか希望くんって、妙なことをよく知っているような気がする。」

それはともかく。

言葉の上では確かに、「簡単なこと」でしかないのかもしれない。でも、実際にはそんなに簡単ではないはずだ。

その証拠に、猫たちを支配し直すほどの力を発揮したシグマのほうも、尋常ではないほどの汗をしたらせている。

そして次の瞬間。

ドガッ！

腕で防御することもなく、シグマは地面に倒れ伏した。

「あとは任せませ……」

最後の声をしぼり出したシグマは、それっきり動かなくなっ

まった。

「ふおっふおっふおっ。シグマなんぞに助けられたというのもシヤクにさわるが、これで形勢逆転じゃの、ミューよ」

今度こそとばかりに勝ち誇った嘲笑を響かせながら、オメガは地面に倒れたミューちゃんへとにじり寄る。

「ミューちゃん！」

「くそっ、結局おれたちは、負けてしまっつてのか!？」

……いや、違う。

ミューちゃんはシグマによって猫の支配を上書きされ、呪詛返しの要領で傷つき、倒れた。

でもそれならば、さっきミューちゃんが猫の支配を上書きしたときに、オメガも同じようにダメージを負ったはずだ。

そんなダメージなんてなかった。だからオメガはミューちゃんの前立ち、勝利を目前にしている。

というわけではないのは、明らかだった。

オメガの足もとは、酔っ払ったおじさんをもしのぐ勢いでふらつき、今にも重そうな体重を支えきれなくなって倒れてしまいそうなほどだったのだ。

そして、ぼくの考えが正しいと裏づけられる変化が、もうひとつあった。

「あつ、動けるよっ！」

「おお！ほんとだな！」

そう、ぼくたち全員の動きを封じていたオメガの力が解けたのだ。口々に安堵の声を上げるみんな。

「わーい、やっといつもみたいに、機敏に動けるあたちに戻れたよ
おー！」

……いや、みるくちゃんは普段から、機敏になんて動けてないよ？
なんてツッコミは、この際、胸のうちにしまっておくことにして。

ここで勢力図を確認してみよう。

ミューちゃんチームは、大将のミューちゃんが倒れる寸前。

でも、オメガの封印を逃れたぼくたち肉球防衛隊と雪菜先生の総勢十一名が残っている。

一方のオメガチームは、シグマが援護に入ったものの、一瞬にして撃沈。

シグマが支配した猫たちは、あくまでシグマの配下。

主人が気を失ってしまった以上、もうただの猫でしかない。

そして大将であるオメガも、ミューちゃんほどではないにしても、足もとがふらつくほどの痛手を追っている。

どちらが優位に立っているのかは、言うまでもないだろう。

もちろんそれは、オメガ本人にも充分にわかっていたようだ。

「くっくっくっ……！ 仕方がないの、かくなる上はっ！」

ふらつく足をどうにか踏みしめながら、体中に力を込めるオメガ。すさまじいオーラが、オメガの全身からほとばしり始めた。

「ダメツ！ 最後の力をふりしぼって、まとめて蹴散らすつもりよ！ 猫たちも、神社も、わたくしたちも、なにもかも！ みんな、逃げて〜！」

苦痛に顔をしかめながらも、ミューちゃんが叫ぶ。
でも。

「ミューちゃんを残して、逃げられるわけないよ！」

「はっはっは！ そうだな、それがおれたちの役目だ！」

「肉球防衛隊は、肉球を、ミューちゃんを、そして世界を守るために存在するんだから！」

「なんだか、勝手にすごく規模を拡張してる気がしなくもないけど、でも、そういうことなのさ〜」（ふぁさっ）

「あたちだつて〜、ミューちゃんを守るのお〜！」

みんなの心がひとつになる。

「わたしだって、教育者として、教え子たちに負けてはいられません！」

雪菜先生も、ぼくたちの味方だ。

「にゃ〜ん〜！」

そしてトラ縞の猫も。

……って、このあいだの猫ちゃんも、巻き込まれていたのか……。夢ちゃんのニボシで、餌づけされちゃったのかな？

チリリン。猫ちゃんの尻尾に巻きつけられた鈴が、乾いた音を響かせる。

ともかく、そんな猫ちゃんも含めて、みんなの心はひとつになり、そして、

「みんなの思い、しかと受け止めたわ！」

ミューちゃんが立ち上がる。

「な………！ どうしておぬしらは、そこまでしてミューの味方をするのじゃ！？」

驚愕をケバい顔全体に張りつけるオメガ。

「だってわたしたちは、ミューちゃんを守る肉球防衛隊なんだからっ！」

勢いに乗った夢ちゃんが、胸を張ってすかさずそう答える。

と同時に、

「ほざくでない！」

オメガが右腕を伸ばし、その手のひらからレーザーのような激しい光を放った。

一直線に、夢ちゃんの左胸を　　心臓を貫かんとするレーザー。

「きゃっ！」

「危ない！」

「にゃ〜ん！〜！」

ぼくの叫びよりも早く、トラ縞の猫が飛び出していた。
チリ〜ン……。

レーザーは、猫ちゃんの尻尾にリボンで巻きつけられていた鈴に
当たり、そのまま明後日の方向へと飛び去っていく。

「おおっ、トラ縞ニヤンコ！ わたしを助けてくれたのねっ！ あ
りがとうっ！」

夢ちゃんはトラ縞の猫を抱き上げ、いとおしそうに頬ずりをして
いた。

「な……！？ この猫、いったい……！？ い、いや、そんなはず
はない！ 偶然じゃ！ そうに決まっておる！」

信じられない光景を目の当たりして、焦りを隠せないオメガ。

最後の力を使ってすべてを吹き飛ばすはずが、夢ちゃんの言葉に
怒り思わず放ってしまった攻撃を、いともやたすく、それも猫によ
って弾かれてしまったのだ。

焦るのも無理はないだろう。

ただ、まだすべての力を使い果たしたわけじゃないはずだ。

だけど、

もう終わりだ！

ミューちゃんが右手を さっきのみんなの想いを受け止めて明
るく輝いている右手を、困惑しているオメガに向かって繰り出した。

「食らいなさい！ 猫パーンチ！」

ぼくたちの想いを乗せた肉球ぶにぶにパンチが、オメガの顔面を直撃する。

「うぐはっ!」

短くうめき声を上げながらも、オメガは足を踏んばっていた。スタツ。

「ミューちゃんが着地する。」

「……………」

沈黙の時間が訪れる。

おそらく数秒程度だっただろう。でもそれは、ぼくたちにとって、数十秒にも数分にも感じられる長さだった。

そして。

「ぶっ……。わらわの、負け、じゃ……………」

ドオツ!

盛大に砂ぼこりを巻き上げながら、オメガは倒れた。

ぼくたちは、勝ったのだ!

ニヤンコ神社の境内で。

ミューちゃんの前にオメガとシグマのふたり（見た目としては、二匹だけど）が座り、ぼくたちもそれを取り囲んでいた。

とはいえ、すでにオメガもシグマも、神妙にしている。負けは認めているのだ。

魔界のプリンセスであるミューちゃんを追って、この世界までやってきたオメガとシグマ。

以前ミューちゃんは、シグマが自分を亡き者にして王位継承権を得ようとしていると語ったことがある。

ただ、それにしてもシグマの行動もおかしいような気がした。ミューちゃんを殺すことが目的で、手段や巻き添えなんかも気にしないなら、いくらでも別のやり方があったと思う。

古代王家の血筋にあるという力がどの程度のものなのかはわからない。

でも、あれだけたくさんの猫を操る手下を連れてきたり、エネルギーを凝縮させて武器を具現化させたりできるのなら、もっと簡単に、例えば広範囲を一瞬で爆発させたりすることなんかもできたのではないだろうか？

そこまでできなくても、ミューちゃんを隠していた場所の横に建てられたウサギ小屋の壁を崩して倒すとかでも、ミューちゃんの小さな体では致命傷になるだろう。

単にそこまで頭が回らなかつただけ、というわけでもないはずだ。

だからぼくたちは、詳しく話を聞こうと思った。
ミューちゃんが勝者で、オメガたちは敗者ではある。
問答無用で魔界に返してしまえば、それで終わりだ。
でも、納得して帰ってもらえたほうが、こちらとしてもあと味が
悪くなくてすむ。

魔界のプリンセスという立場にあるというミューちゃんが、今後
どうするつもりなのか。

それにもよるとは思っけど、おそらくは戻らないのではないか。

ぼくはそう考えていた。
いや、そうであってほしいと、願っていたのかもしれない。
肉球防衛隊としては、守るべきミューちゃんがいなくなると、存
在意義がなくなってしまう。

……というよりも、素直に寂しい。

ともかく徹底的に話し合おう。
ぼくたちみんなの意見は、そう一致していた。

だけど。

「オメガは、わたくしのママです。つまり、魔界の女王、というこ
とになるわね」

いきなり放たれたミューちゃんの言葉に、ぼくたちは啞然とする。
え〜と、なに？ シグマはミューちゃんの弟ってことだし、オ
メガはお母さん？

そうするとつまり、単なる姉弟ゲンカと、親子ゲンカだった、っ
てこと？

「うーんと、まあ、そうなるのかな……?」

ポリポリと頬の辺りをかきながら、ミューちゃんがつぶやく。

「じゃ……じゃあ、ミューちゃんが最初にオメガの名前を聞いて、怯えて声も出せなかったのは、すごい力がある相手だからってわけじゃなくて……」

「ええ。母親だからよ。だってほら、ママって怖いものじゃない? そりゃあさ、もう子供じゃないから、しつげなんだってのはわかっているけど、それでも小さい頃から叱られたりして、怖いイメージが脳裏に焼きついてるものでしょう?」

ぼくの問いに、さも当然のようにそう答えるミューちゃん。

いや、それは各家庭によるのでは……。

もっとも、魔界の家庭、しかも王家の家庭環境なんて、ぼくには想像できるものではないけど……。

「でも!」

疑問符が浮かんでいるぼくには構わず、ミューちゃんは突然大声を上げる。

「わたくしが勝ったのは事実。だから、生まれて初めてのわがママを言わせてもらうわ!」

「……いや、ミュー姉はいつも基本的にわがママだと思っただが……」

ゲシッ!

シグマのツツコミは、なかったことにされた。猫キックという強

制力を行使して。

「わたくしはママのあとを継ぐ気はないわ！」

ミューちゃんは一点の迷いもなく、力強い声でそう言いきった。

その瞳には、確固たる決意が見て取れる。

見た目は猫のままではあるけど、素直にカッコいい場面だと思えた。

……彼女の足もとで痛々しく転がっているシグマの残骸を除けば。

「ミューよ……。そなたの意思は、よくわかったのじゃ」

オメガは静かに、しかしはつきりと、そう言った。

そして、地べたに転がるシグマを足先でちょんちょんと軽く蹴りながら、

「著しく不安ではあるが、このシグマをわらわの正式なあと取りとしよう」

と宣言した。

「うん、それがいいわ」

オメガの言葉に、ミューちゃんは素直に頷く。

足もとのシグマには、口を挟むことすら許されない雰囲気だった。どうやら魔界は紛れもなく、女性優位社会のようだ。

ミューちゃんは初めから、弟であるシグマに王位継承権を譲るつもりだったらしい。

最初からずっと、そのために行動していた。

もともとは魔界から出て逃げ続けていれば、自然と王位継承権はシグマに移るはず、と考えていたという。

ただ、シグマ本人に見つかってしまった。

そこで素直に、あなたに王位を譲ると言うことができれば、問題はなかっただろう。

でも姉としての尊厳が、それを妨害した。

「だって、弟がやんちゃしてたら、姉としては徹底的にこらしめて上下関係をみっちりわからせるのが、世の常ってものでしょう?」

ミューちゃんはそれと、そんなことを言っただけ。

まあ……、今さらその辺りにツッコミを入れる必要もないか……。

「ともかく、今回のことで、シグマにも古代王家の血筋の強い力があるってわかったでしょう? わたくしの支配した猫たちを、さらに上書き支配するなんて荒技をやったのけたんだから」

「……そうじゃの。もっとも、力を使い果たして倒れておったがな、こやつは」

ゲシゲシ。

「ま、ちょっと詰めが甘いところはあるわね、シグマは」

ゲシゲシ。

ふたりとも、足もとのシグマをつま先で蹴りつつ、会話を続けていた。

うわあ、なんかシグマって、とつても不憫な身の上なのかも……。

「それにわたくしはずっと思ってたの。女性優位な社会ってのは、おかしいって。もちろん逆に男性が優位なものね。性別を問わず、平等であるべきなのよ。今までの古い習慣なんかにとらわれず、臨機応変にいかないと」

「……そうじゃな。魔界は変わるべき転機を向かえておるといこうとじゃの」

「ええ、そうよ。よりよい未来へ向かって歩き出す、絶好の機会だわ」

爽やかな笑顔を浮かべながら、ふたりはがっしりと握手をする。

その足もとでは、爽やかさのカケラもないほどボロボロになった、平等というのがどう考えても疑問な魔界のプリンス、シグマが、様々な意味合いを含んだため息をひとつ、吐き出していた。

「みんなにはお世話になりっぱなしで……。ほんとにありがとう。今までのことは、絶対に忘れないわ！」

ミューちゃんは潤んだ瞳をきらめかせながら、目の前に並ぶぼくたちにそう言った。

「にはははっ！ こちらこそ、楽しかったわよっ！」

「はっはっは、そうだな！ とても充実した日々だったと思うぞ！」

そんな彼女に手を振り返しながら、ぼくたちの目にも微かに涙が浮かんでくる。

そう、ミューちゃんはオメガとシグマを引き連れて、魔界に戻ることにしたのだ。

もちろん、王位を継承するためではない。

王位継承権を弟に譲るといふ当初の目的が果たされた今なら、もう戻っても問題はないと考えたのだろう。

「家族っていうのはかけがえのない大切なものだから。こんな人たちでもね」

ミューちゃん言葉に反論することもなく、オメガもシグマも、黙って待っていた。

魔界にあるという伝承の泉を通して、この世界にやってきたミューちゃんたち。

その出口は学校の裏手にある池の中だった。

魔界とこちらの世界を結ぶその通路は、一方通行ではない。つまり、魔界に帰りたいたいなら、その池の中に飛び込めばいい。もっとも、ぼくたち人間がその池に入っても、魔界に行けるわけじゃないらしいけど。

ともかく今、その池の前でこうして手を振り合っているぼくたち。ミューちゃんを隠していたウサギ小屋からは、学校の裏門を通り抜けてすぐの場所だ。

シグマとオメガが、ポチャンと音を立てて池に飛び込む。水しぶきを上げながら、ふたりの体は池の中へと消えていった。

「それじゃあ、わたくしも帰るわね。……いろいろと巻き込んでしまつて、ごめんなさい」

「いや、ぼくたちこそ、肉球防衛隊なんて勝手に作つて、ミューちゃんを絶対を守るとか言いながら、結局あまり役目を果たせなくてごめん」

頭を下げて謝罪の言葉を向けてくるミューちゃんに、ぼくも思っていたことを吐き出す。

肉球防衛隊だとか肉球の平和はぼくが守るだとか、ちょっと面白半分な部分があったと、ずっと気にしていたからだ。

「そんなことないわよ！ それにみんなは、自らの意思でそう決めて行動してくれた。それだけで充分すぎるほどだわ！ もとはといえば、わたくしのわがままから始まったことだったんだから」

「ミューちゃん、ほんとに帰っちゃうのっ？ 気が変わつて、やっぱりやめた、とか言ってくれたり、しないのっ？」

夢ちゃんが、耐えきれなくなったのだろうか、中腰になってミュ

「ーちゃんの両手をギュツとつかみ、早口でそう問いかける。問いかけ、というよりも、それは彼女の心からのお願いなのだろう。」

「そんな夢ちゃんの両手をぶにぶにの肉球でしっかりと握り返し、ミューちゃんは優しい目を向けながら答える。」

「ごめんなさい。でもわたくしは、魔界に戻ってひっそりと暮らすことに決めたの。」

「寂しそうな表情に変わる夢ちゃんを、そっと抱きしめるミューちゃん。」

「もちろん二本足で立っていたとしても、人間の半分くらいしかない猫のミューちゃんだから、抱きしめるといよりは、寄りかかるという感じに近いかもしれないけど。」

「でも、たまにはわたくしのこと、思い出してね……。」

「そう言ったミューちゃんの声は、微かに震えているように感じられた。」

「戻ることに関心があると、はっきり言っていたものの、やっぱり寂しいという思いはあるのだろうか。」

「ぼくたちと、同じように。」

「あ……あのさっ、また遊びに来て、くれるよねっ？」

「……だけど、また変なことに、巻き込んだじゃうかもしれないわよね？」

「夢ちゃんからのお願いに、ミューちゃんは悲しそうにつぶやきを返す。」

「大丈夫だよ！ ぼくたち肉球防衛隊は、ミューちゃんを守るためにいるんだから！」

「そうよ！ 今日で解散ってわけじゃないんだから！ いつでも来ていいんだからね！」

「はっはっは！ そうだぞ！ いつだって大歓迎だ！」

「うん」。あたちも、たまにはミューちゃんに会いたいし」

「……ここは、ミューちゃんの第二の家……」

「ふっ、希望くん、いいこと言うねえ〜！」（ふあさっ）

「にははっ！ さすがわたしの弟だわっ！」

「ミューちゃん、隊長命令よ！ 絶対にまた遊びに来ること！ いいわね!?!」

ぼくの言葉を筆頭に、みんながみんな、ミューちゃんを歓迎する声を重ねる。

「みんな……!」

ミューちゃんも、ぼくたち全員の想いを受け止めてくれたみたいだ。

「来てくれなきゃ、泣いちゃうよ！」

「降人くん……、男の子は泣いちゃダメ！」

笑顔で取り囲んでいるぼくたちの中心で、ミューちゃんも同じように笑顔を輝かせてくれていた。

「あはは！ でも、約束だからね！ ぼく、絶対にまたミューちゃんと会いたいし！ 楽しみに待ってるから！」

いろいろあったけど、無類の猫好きであるぼくにとって、ミューちゃんも過ごした毎日はとても充実した楽しい日々だったのだ。

「(ぼそぼそ)……う、うん、そんなセリフを言ってもらえるなんて……。……なんだかちょっと、うらやましいというか、ねたましいというか……。うつつ……」

夢ちゃんがなにやらつぶやいているようだったけど、ぼくの耳には届かなかった。

「ふふっ……」

そしてミューちゃんは、微かに含み笑いを残し、池の中へとその身を躍らせた。

こうして、魔界の住人たちは帰っていった。

と、その夢ちゃんの足もとに、

「にゃ〜ん!」

いつの間にやらトラ縞の猫がいた。

そう、それはニャンコ神社でオメガと戦っていたときに夢ちゃんを助けてくれた、あの猫だった。

夢ちゃんの足に、すりすりと頬をこすりつけている。

「あら、さっきの猫じゃないの。ついてきちゃったのね」

いちごがつぶやく。

心なしか、いつもの彼女らしくない弱々しい声だったのは、やっぱりミューちゃんが帰ってしまつて寂しいからなのだろう。

それはきつと、夢ちゃんも同じなのだ。

彼女がさつきからずっと目を伏せているも、寂しいからに違いない。

「夢ちゃん、気に入られちゃったみたいだね！ 妬けちゃうな！ ひゅーひゅー！」

ぼくと同様、無類の猫好きである夢ちゃんには、猫に好かれるのはなによりの喜びのはずだ。

そう考えたぼくは、大げさすぎるほど明るい声で彼女を茶化す。

「……………うんっ……………」

なぜだか一瞬間をすくめていた夢ちゃんではあつたけど、すぐに小さく頷くと、そのトラ縞の猫を抱き上げるのだった。

「あっ、いらっしや〜いっ〜」

夢ちゃんの元気な声が響く。

「……いらっしやい、お兄ちゃん……」

希望くんも、いつもながらの控えめな声ではあるものの、精いっぱい笑顔でぼくを迎えてくれる。

……最近、なぜか希望くんは、ぼくのことを「お兄ちゃん」って呼ぶようになったよね……。

以前は、降人さんって呼んでたはずなのに。どうしてだろう……？

あのあと、夢ちゃんはトラ縞の猫を家に連れて帰った。

彼女の住むアパートはペット不可だったのだけど、もともと家族四人で住むには狭いと考えていたため、別の物件をずっと探していたようで、ご両親はすぐに行動を開始した。

そして晴れてペット可のアパートに引っ越した。

夢ちゃんの家は四人と一匹という構成に変わり、頻繁にお客さんが訪ねてくるようになった。

そのお客さんというのは、ぼくなのだけだ。

無類の猫好きなのに、お母さんが動物嫌いだから猫を飼えないぼくの家。

それを不憫に思ったのか、夢ちゃんはいつでも遊びに来ていいと言ってくれた。

そんなわけで夢ちゃんの厚意に甘え、こつして「トラちゃん」と遊ぶために、ぼくはかなりの頻度でお邪魔している。

そう、トラちゃん……。

夢ちゃんはトラ縞の猫に、そう名前をつけていた。

いや、その、なんというか、そのまんますぎて、逆にツッコミようがないくらい。

「トラちゃんっ！ 降人くんが、遊びに来てくれたわよっ！」「にゃ〜ん！」

そう呼ばれたトラちゃんのほうも、喜んでいるみたいだから、まあ、いいよね……。

それにしても……。
やっぱり室内で猫ちゃんと遊べるのって、すっごくいい！ 癒される！ もう最高っ！

ぼくはトラちゃんの頭を優しく撫でながら、にへら〜つと、妙な笑顔を浮かべていた。

でも、いくらクラスメイトで友達とはいえ、こんなに頻繁にお邪魔して、夢ちゃんには悪いかな、と思わなくもないのだけど。

「にゃははっ！ そんなこと、気にしなくていいよっ！ というか、どどん来てくれたほうが、嬉しいというか、なんというか……、って、なに言わせるのよもう、恥ずかしいわねっ！」

とかなんとか言いながら、夢ちゃんは顔を真っ赤に染めながら、壁やら床やら、希望くんやらトラちゃんやらぼくやらを、パシパシと叩く。

「痛たたたた、ちょっと、夢ちゃんってばー!」

「あ、あつーっ!」
「じーじーじーじーじーじーめんなさいっ!」

「……お姉ちゃん、はしゃぎすぎ!……」

希望くんから控えめなツツコミを受ける夢ちゃん。

「だけど、どうしてこんなに、はしゃいでるのだろう?」

「……やっぱり、猫が家にいるからだよね。」

「夢ちゃんって、ほんとに猫が大好きなんだなあ。」

「ぼくも夢ちゃんみたいに、猫と一緒に暮らせる生活になりたいよ!」

そんなことを考えていると、希望くんがじーっとぼくの顔をのぞき込んでいた。

「ん? 希望くん、どうしたの?」

「……お兄ちゃん、猫と一緒に暮らしたいって、考えてる……」

「うっ!」

バレバレだった。

でも希望くんは、続けてこんなことを言う。

「……いい方法があるよ。……お姉ちゃんと、一緒に暮らせばいい」

「……」

「な……っ! の……希望っ!」
「ら、なに言ってるのよ、あんたはっ!」

夢ちゃんがさらに顔を赤くしながら、慌てた声を上げる。

「え? ぼくがこの家の子になるってこと?」

まあ、確かにそうすれば、トラちゃんと毎日遊べることにはなるけど……。

養子縁組とかっていうんだっけ？

でも、いろいろと問題とか、あるんじゃないのかなあ？

「……………そうじゃなくて……………。今は無理だけど、将来的には、籍を…

…もっじゅー！」

「じ……………くら、希望っっ！」

夢ちゃんは眉を吊り上げて、希望くんの口を思いつきり手で塞ぐ。

「……………？ セキ？ 教室の席？ それとも、風邪でもひいた？」

「……………やっぱりお姉ちゃん、前途多難……………」

「……………？」

ぼくには、なにがなんだかわからなかったけど、夢ちゃんと希望くんの姉弟は、揃ってため息をこぼしていた。

「にゃ〜ん…！」

そんなぼくたちの様子を、なんとなく楽しそうに見ているトラちゃん。

「そついえばさ、トラちゃんって、あのニャンコ神社にいたでしょ？」

ぼくはちょっとだけ気になっていた件について、話してみることにした。

「うん、そうねっ」

「あのとき、オメガがたくさん猫を操って、ぼくたちはあの神社に連れていかれたけど、もしかしたらトラちゃんって、オメガに操られてきたわけじゃなくて、もともとあの神社にいたんじゃないかな」

「え？ どうしてそう思うの？」

夢ちゃんの当然のごとき疑問に、ぼくは言葉が続ける。

「あの神社、猫宮神社っていう名前でしょ？ あそこって、ぼくの親戚が宮司をやってるんだよね。だから何度か、遊びに行ったこともあるんだけど……」

「あ、そうだったんだっ。そうだよ、降人くんの名字と同じ名前神社だもんねっ。結構珍しい名字だと思うし、考えてみたらあたりまえかもっ！」

「うん。それでね、神社に遊びに行ったとき、こんなトラ縞の猫がいるのを見たような気がするんだ。まあ、珍しい猫じゃないだろうし、別の猫かもしれないけどね」

軽く笑いながら、ぼくは自嘲気味に言う。

「猫好きの降人くんが、見間違っってこともないと思うなっ！ ……あの神社ってさ、猫の神様を祀ってるんだよねっ？ ってことはもしかして、トラちゃんがその猫の神様だったりしてっ！ にゃはははっ！」

それを聞いた夢ちゃんは、夢見がちな言葉を響かせると、いつも

の元気な笑い声を振りまいていた。

とはいえ、夢見がちなお話、とは言いきれないのかもしれない。ついこのあいだまで、現にぼくたちの目の前には、人間の言葉を喋って二足歩行もする猫がいたのだから。

「にゃ〜ん!」

夢ちゃんの笑顔に合わせて、トラちゃんが鳴く。

ぼくがふと目を向けると。

ニヤリ。

ほんの一瞬ではあったけど、普通の猫とは思えないような、そんな意味深な笑みをこぼしたように、ぼくには見えた。

……ぼくはそれを、見なかったことにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7778x/>

われら肉球防衛隊！

2011年11月13日17時09分発行